風の花　しばし見交わす　恋の実を

TETSU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
風の花　しばし見交わす　恋の実を

【Ｎコード】
Ｎ９６００Ｉ

【作者名】
ＴＥＴＳＵ

【あらすじ】
本作品は、学園物でファンタジーなラブコメディです。
略して、スクファンラブコメです！（なんじゃそりゃ？）
＋柴犬（ドッグ）です♪

※犬好きな人に読んでもらっても、あまり犬は出てこないかもしれません・・・
あらかじめ、ご了承ください。

【ここからがあらすじです】
高校生の女の子、廷上（ていじょう）　風花（ふうか）は、空を見るのが好きな1年生。自分の生まれてきた生い立ちが原因で、なんとなく毎日を過ごしていて、何事にも全く興味が無い少女。しかし、ある柴犬との出会いが、彼女の人生を大きく変えることになる・・・少女と、犬との淡くせつないファンタジーな恋の物語です。

第1話　あなたは柴犬？

今日も、空は青い。
白い雲が、途切れなく続いて、白の放物線を描いていく。
あの雲の上は、どうなってるんだろう。
本当に、黒い黒い宇宙なのかな？

あ、また、白い雲。
今日も青空だ。

「痛っ」

と、空を見ている間に、私は、蹴躓(つまず)いた。

私は、空を見るのが好き。
だって、澄(す)み切っている空は、私の心を軽くする。
なんで、生まれてきたのか、分からない不安な気持ちも、空を見ればなんとなく和らぐ。

だから、この間、電信柱にぶつかった傷が、まだおでこから消えていない。
いつも生傷が絶(た)えない私・・・
でも、自転車には、乗らないから、そんなに大きな怪我にもならない。
小さい傷が、あちらこちらにある。
その痛みが、生きている実感だ、と私は思っている。
私の名前は、『廷上(ていじょう)　風花(ふうか)』

静山丘高校(しずやまがおか)の1年生。

「あいたた。あっ、膝(ひざ)から血が出てる～・・・」

今日も、私の勲章が右足の膝に刻まれた。

と、前を見ると、小汚い犬が、私を見てる。

飼い犬なのかな？

それとも、野良犬？？

私は、犬のことはよく分からないけど、多分、柴犬・・・？？

柴犬は、少しずつ私に歩み寄ってくる。

本当に、のろのろと寄ってくる。

私は、肩膝をついたまま、柴犬が近づいてくるのを待った。

どうでもいい話だけど、私もよく「のんびりしてるね」と友達から言われる。

あくせくしても、なんか疲れるだけだし、なんとなく毎日を過ごしてるから、そう言われても当たり前。

毎日、退屈なだけだし・・・

だから、この柴犬も私みたいなのかな？、ってちょっと思った。

私の前まで、柴犬がやって来た。

鼻を近づけて、私の顔を嗅ぎだした。

私は、反射的に目をつぶった。

「怖い??」

「えっ??」

今、声が聞こえた気がする・・・

確か、「怖い??」って。

私は、目を開けて、周りを見渡してみた。

後ろを振り返っても、誰もいない。

左右を見ても、誰もいない。

前を見ると、柴犬しかいない。

えっ??

柴犬がしゃべったの?

私もとうとうおかしくなったのか、私は、額に手をあてて考え込んだ。

でも、確認したかったから、柴犬に話かけてみた。

「今、あんたしゃべったでしょ??」

・・・

全く返答は、無い。

柴犬は、お座りの姿勢で、舌を出してる。

なんか、馬鹿にされてる気分・・・

「そんな訳ないよね」

私は、そう結論づけた。犬が日本語をしゃべる訳ないもの。
「ワン」とはしゃべるけど・・・
「だよね」と言って、立ち上がろうとした時、右足が痛んだ。
「痛っ」
と、言って、目をつぶった。
「大丈夫？」
今、聞こえた！？
はっきりと、聞こえた！？
私は、ぱっと目を開けて、柴犬の目を覗(のぞ)き込んだ。
「今、絶対に、喋ったでしょ？？」
と、柴犬の顔をつかんで、顔を近づけた。
柴犬は、やっぱりひょうきんな顔で、舌を出していた。

・・・うーん、やっぱり思い違いかなぁ。
その時、携帯が鳴った。
友達の琴実からだった。
「もしもし、琴実。今さぁ、なんか変なことにあっちゃって」
「何言ってんのさ、ふう。もう、テスト始まるよ！今どこ？」

あ！？今日、テストだった。
学年末テスト！？
今、何時？？

・・・８時５０分だ。

私は、「すぐ行くから、先生にはテスト出るって言っておいて」と言って、
痛む足を引きずりながら、駆け出した。

あ～あ、せっかくのんびり歩いていたのに・・・
あ、そういえば、柴犬は？

しかし、柴犬の姿はどこにも無かった。

なんだったんだろう？あの柴犬。

私は、不思議に思いながらも、もう絶対に間に合わないテストに向かって、駆け出していた。

第1話　あなたは柴犬？（後書き）

今、もう一つ小説を書いていますが、煮詰まった時に、風花の物語が浮かんだので、投稿してみました。けれど、もう一方が煮詰まった時に書いているので、更新が遅いと思いますが、暖かく見守ってください。

ご感想や誤字、脱字等のご指摘、お待ちしております。

タイトル付けてみました☆

第2話　信じてくれないよね？

「どうだった？テスト？？」

琴実が、私に話しかけてきた。

琴実は、私が小学校からの付き合いで、
ずっと一緒にいてた友達。
だから、琴実の事は昔から何でも知ってる。

「もうっ、ぜんぜ～っん、駄目！」

私は、息切れして、ドアを開けた瞬間を思い出した。

静かなる教室。
乱した私に対するみんなの視線が怖かった・・・

その後は、テストに集中するどころか、呼吸を整えるので必死だった。
あ～恥ずかしい・・・

「ってかさぁ、ふう、何やってたの？？　」

琴実が、私の机に肘を立てて、聞いてきた。

「それがね、今日、いつものように空を見てたら、こけちゃって・・・」

私は、琴実に右膝を見せた。
今もチクチク痛む。

「まぁ、いつもの事じゃん」
「違うの。その後が、違うの」
「何が違うの？」
「えっと、犬がしゃべったの」
「しゃべったじゃなくて、ほえたんでしょ？」
「違うの、日本語をしゃべって、私に話しかけたんだって」
「・・・。ふう、大丈夫？　最近、おかしいかなぁって、思ってたんだけど・・・」

違うって反論しようと思ったら、後ろから肩を叩かれた。

「終(つい)に、夢見る少女が、おかしな少女、に変わっちゃったんだ」

そう私に声をかけながら、肩を叩いたのは、同級生(クラスメート)の美希(みき)。
美希は、学内でも常に1位、スポーツ万能でテニス部に入っている。
私とは、全く正反対なんだけど、なぜか私と気が合う・・・のかな？

「ひっどぉ～！」
「だって、この間も、『雲があんぱんに見える』とか、訳の分からないこと言ってたじゃない」
「いや、そぅだけどぉ・・・」

反論できない・・・
だって、雲の形が、あんぱんのように見えたんだもん。
駅前のあんぱんより、おいしそうだったから・・・つい、ね。

「まぁ、まぁ。美希。ちゃんと、ふうの話、最後まで聞いてあげよ

～よ」

いつも、私が突拍子(とっぴょうし)もないことを言っても、琴実が聞いてくれる。
だから、何でも琴実には、言ってしまう。

「ええっと、ええっとね。なんか、汚れた犬・・・柴犬かな？・・・・
が、いたの。こけた時に。」
「それで？　」
「で、顔を近づけてきて、しゃべったの！」
「なんてしゃべったの？　」
「怖い？って聞いてきた」
「怖い？どうして？？」
「目をつぶっちゃったからなのかなぁ・・・」

琴実と美希は、一緒になって、「う～ん」って考え込んだ。

「違うの、もう一回しゃべったんだって」
「何て言ったの？」
「大丈夫？って、右膝の事、心配してくれたの」

二人は、天を仰(あお)いだ。

「それは、妄想だね」
「現実逃避とも言うよね」
「それとも、擬人化・・・？　」
と、二人で話し合ってる。

「もういいよ、分かった」
と、私は、話を打ち切った。
私自身、あれは何なのか分からないから。

「それよりさ、ふう。テスト終わったら、休みじゃん。遊びに行こうよっ」
と、琴実が聞いてきた。
「駅前に、フルーツバイキングが出来たんだって」
と、美希。
「・・・別に予定も無いから、いいけどぉ。・・・ケーキあるかな??」

「あるある!」

って感じで、今朝の柴犬のことはどこかにいっちゃった。

第2話　信じてくれないよね？（後書き）

友達を出してみました。私は、けっこう3人一組が昔から好きなので、3人になっています。
次は、風花の生い立ちやら、日常やらの話を織り交ぜたいと思います。
でも、ストックが次で終わりなので、また続き書かないといけません・・・
ご感想、誤字、脱字等のご指摘、お待ちしております。
タイトル付けてみました☆

第3話　あれれ？晴れから曇り・・・

ほぇ～・・・と、ため息をついた私。

午前中のテスト終了後に、先生に呼び出しをくらい、説教されてしまった・・・

明日、遅刻したらもっとうるさいだろうなぁ。

私は、自分の下駄箱を開けて、靴をとった。

さっきまで、晴れだった空が、曇り空へと変わっていた。

曇り空も好き。

なんか、この星が泣きそうだから。

なんか、寂しいのかな、って思う。

だから、曇り空は、泣きたいんだけど、泣けない、みたいな感情があるような気がするんだ。

でも、雨が降ってこないうちに帰ろ。

と、立ったまま、空を見上げていた。

「また、空見てる」

振り返ると、琴実が傍にいた。なんだか、ちょっと寂しそうな感じがするんだけど・・・

「うん、雨が降りそうだね」

私は、また空を見上げて、つぶやいた。

「ところで、どうしたの、琴実？　」

琴実は、「別に～」って、石を蹴飛ばしながら、言った。
何かあったんだ、って私は、思った。
でも、それ以上は、聞かない。言いたい時になったら、琴実は言ってくるから。

「それよりさ、ふう。結構、先生に怒られたでしょ？　」
「うん、担任の安部がうるさくて。ほんっと、うざい」
「だって、1時間目のテストは、英語だったからだよ」
「ほんっと、大人って、怒ればいいとか思ってない？　」
「あ～分かる～。大人だから、言う事聞けみたいな」

そんな愚痴を言いながら、二人で下校。
毎日の当たり前な風景なんだ、これが。

「じゃあね～、ふう。明日は遅刻したら駄目だよ～」
「うん、分かった～。琴実もバイト頑張ってね～」

と、駅で別れる。
琴実は、家が近くなんだけど、バイトしてるから、いつも駅で別れる。
私は、バイトとか出来ない。
別に、お母さんに止められてる訳じゃなくて、外に出るのがめんどくさい。
おしゃれがしたいとか思わないし、ジャージ最高だし・・・
夜中にコンビに行って、ポテト買うのが趣味だし・・・

って、私って、暗い。
周りのみんなが、眩しく見えてくる。

あ、メールだ。

「帰りに、白菜と椎茸買ってきて。ママより」

今日は、鍋かな？　お肉は無いのかな？
私が遊びに行かない日は・・・って、言ってもほとんど真っ直ぐ家に帰るから、ほとんどだけど・・・買い物は、私の仕事。

お母さんは、仕事で帰ってくるのが遅いし、疲れてるから、「買い物する気力が無いわぁ」といつも言ってる。
私は、お母さんとの2人暮らしだから、洗濯とか、洗い物とか、一応やってる。
掃除は苦手だけど・・・

「うん、分かった。気をつけて帰ってきてね」

私は、お母さんにメールを返す。
すると、顔に滴(しずく)が落ちてきた。

「あ、降ってきた」

私は、携帯を持ったまま、空を見上げた。
白い雲が、黒い雲へと変わっていた。
もちろん、傘なんて持ってきてない。
私は、走ることが苦手なので、早歩きで帰ることにした。

あ、スーパーにも寄らなきゃ。って、今思い出した。
私は、帰りの途中にあるスーパーに寄って、白菜と椎茸と、ポテトを買ってしまった。

どうでもいい話なんだけど、中学の時に、プリングル〇が大好きで、一時、太ってしまったこともあったので、今は止めている。
見た目は、どうでもいいんだけど、重くなると、動くのがつらくて、つらくて、だから、食べない。
自分の体が重くなって、外に出るのがしんどくて、登校拒否したぐらいだから、私のめんどくさがりも相当なものだと思う。
その時から、お母さんの家事を手伝って、体重が減ったんだっけ。
しかも、結構きつい労働なんだけど、誰かがしなくちゃならないから、してる。

スーパーから出ると、雨はますます激しくなってきた。
どうせ濡れるんだから、と思ったから、ゆっくり歩くことにした。
急いだって、雨に濡れる量は変わらないような気がするから。

それに、雨が降った時の空も好き。
私に向かって、涙が降ってるみたいな感じがいい。それに、水浴びしてるのも気持ちがいい。

すると、道の真ん中に、あの柴犬が座ってた。

第3話　あれれ？晴れから曇り・・・（後書き）

担任の先生が話の中だけで登場。もちろん、先生のモデルは、私の好きな某ＣＭの英語の先生です（笑）
柴犬が出てきて、意味ありげに終わってすみません。
ご感想、誤字、脱字のご指摘等お待ちしております。
今日中に、次話を更新しようと思います！
タイトル付けてみました☆

第４話　星がある公園だよっ！

雨が降ってるのに・・・何をしてるんだろう？
と、私も柴犬を見て立ち止まった。

柴犬は、座ったままこちらを向いていて、時折、口を開けて舌を出している。
雨は、どんどん激しさを増してきた。

もしかして、私を待ってたの？
と、思ったんだけれど、まさか、そんなはずはないよね、と思い、首をかしげた。

このままじゃ、風邪をひいちゃうよ。
私は、犬のところに、駆け寄った。

「何をしてるの？　こんな雨の中で。どこか雨宿りする場所・・・あ、そこに公園があるから、そこに行こ？」
と、私は、公園のある方角を人差し指で示して、柴犬に声をかけた。
柴犬は、軽く首を立てに降り、公園に向かって、歩き出した。

私の言ったこと、わかるのかな？
でも、またそんな事言ったら、琴実と美希に笑われるなぁ。って思いながら、私も柴犬と一緒に歩き出した。

雨は本当に、どんどん降ってきた。
それは、もう、台風なんじゃないかってぐらいに、降ってくる。
どうせ、濡れてるんだから、あんまり気にもしないけど、柴犬は、毛がたくさんついてるから、重くなるんだろうな、

って、事を考えながら、小さい公園にたどり着いた。

星谷公園（ほしのたに）・・・

小さい時に、よく琴実と遊びに来た公園。

毎日、近くを通るんだけど、なかなか寄ったりしないから、ほんと、久しぶりだよね。

あ、まだ、あのブランコある。ちっさいブランコ。

と、公園に入るなり、辺りを見渡した、私。

雨宿りする場所はもう決めてある。

この公園に唯一ある星型のトンネル。

中は、ちょっとだけ迷路みたいな感じになっていて、入り口と出口がそれぞれ一箇所ずつあるんだ。

でも、どっちが入り口でどっちが出口か、わかんないけど。

「この中なら、雨に濡れないよね」と言いながら、私と柴犬は、トンネルの中に入った。

私は、バッグからスポーツタオルを取り出して、柴犬の濡れた毛を拭いてあげた。

なんか、柴犬、嬉しそう、って勝手にいい風に解釈する私。

そういや、お母さんも昔、犬飼っていたって言ってたっけ。

私が生まれる前の話だから、多分、おじいちゃん、おばあちゃん家に住んでた時なんだろうな。

私が生まれてからは、お母さんは、一人で私を育てたから、犬を飼う余裕もないって言ってたよね。

お母さんは、頑固だから、「私一人でも、育てる」って言ったら聞かない人だから。

でも、いっつも私一人でお留守番だったし、すごく寂しかったんだ

けどなぁ・・・

私は、古い記憶の回想の真っただ中だったんだけど、
いきなり柴犬がほえた。

「ワン」

私は、びくっとして、タオルを落とした。

「もぅ、いきなり、ほえないでよっ」
私は、落としたタオルを拾いながら、柴犬に言った。

柴犬は、片目を軽く閉じて・・・って、ウィンクした??
犬って、そんな事出来るの?
聞いたことないんだけど・・・

ちょっと変わった柴犬だ、謝ってるのかな。

私は、この柴犬に興味が沸いてきた。
今まで、こんな体験したことが無いから、少しおもしろかった。

私は、次は何するんだろう?って、興味深く、柴犬を見た。
すると、次は、柴犬はお座りの状態で、両目をつぶった。

「どうしたの? タオル、目に入っちゃった? 」

柴犬は、横に首を振った。
その後、私の袖を口で引っ張った。

「何をして欲しいのよ? 分からないよ」

私は、柴犬を見た。首を縦に大きく振った。
目をつぶれって言ってるのかな？
よく分からないけど、そんな気がしたから、柴犬と一緒に目をつぶった。

すると、暗闇の中から、声が聞こえた。

「君を待ってたんだ」

私は、今朝あったことが、現実だったんだ、って思った。
その声は、すごく透き通っていて、若い男の子の声だって分かった。
すぐに聞き返してみた。

「どうして、私を待っていたの？　」
「えっと・・・えっとね・・・。また、それは今度言うよ」
「え、今言ってよ」
「拭いてくれて、ありがと」
「いえいえ、どういたしまして」と、私は目をつぶったまま、おじぎをした。

・・・しかし、その後の返事が無い。
私は、ゆっくりとまぶたを上げてみた。

柴犬は、またどこかに行ってしまった。
「もう、また勝手にいなくなる」と、私は、ほっぺたをふくらまして、怒った顔をした。

ふと、気付くと、雨の音は止んでいた。
私は、トンネルから外に出て、暗くなった空に、星が出ているのを見ていた。

第４話　星がある公園だよっ！（後書き）

なんとか、本日中に２話投稿出来ました！！
どういった繋がりにしようかな、と考えて、公園にしてみました。
星型の中が空洞になったものなんか、無いんですけどね。
星型のトンネルは、結構お気に入りですので、また出そうと思います。
次の更新は、明日になりそうです・・・
タイトル付けてみました☆

第5話　嘘ってつくの苦手～

「ただいま～」
って、言っても誰もいないけど・・・と、思っていたら、奥から声が聞こえた。

「おかえり」
あれ、お母さんもう帰ってたの？

「早くない？　」
「ふう、何してたの？　こんな遅くまで、あら、そんなに濡れちゃって」
「え、そんな時間？？　」
時計を見たら、８時を過ぎていた。
あれ？　そんなに時間って経(た)っていたっけ？？

「はい、タオル。先にお風呂入っちゃいなさい。風邪ひくわよ」
「はぁ～い」

何してたかなんて、話せないよ。だって、信じてくれる訳ないもん。
だから、とりあえず、何にも言わず、お風呂に入ることにした。

もう、お湯張ってくれてたんだ。
私は、服を脱ぎながら、お風呂場を覗(のぞ)いていた。

お湯につかると、なんか疲れがどっかに行っちゃう。
そして、私は、さっきあったことを考えていた。

絶対に、ぜぇっ～たいに、あの犬から声を聴(き)いた。

それは、間違いない。透き通った男の子の声だった。
それに、目をつぶったら、聞こえる。どうしてか分からないけど、今でも覚えている。
すごく優しかった声だった。
でも・・・

と、私は、口までお湯に浸(つ)かって考えていた。
柴犬は、私に何を伝えたかったかな。って、また私の妄想だったのかなぁ・・・自信無くなる。でもちゃんと聞いたし・・・

ポチャン、と、天井の水滴が、水面(みなも)に波紋を作る。
私の黒い長い髪の毛が、お湯に浮かんでいる。
柴犬の、あの綺麗な茶色の毛を思い浮かべていた。
朝は、小汚い犬だって思ったんだけど、雨で泥が流れて、すごく綺麗な毛をしてたなぁ。

私は、ずっと柴犬のことばっか、考えていた。
どことなく、愛嬌のあるあの顔とか、舌を出してる顔とか、そして、あの声・・・
どうしてか分からないけど、朝のこと、そしてさっきのこと、何回も頭をよぎる。

ガラッ、と浴室のドアが開いた。・・・お母さんだ。
「ふう、いつまでお風呂に入ってるの？　早く出て、ご飯食べなさい」

あ、もうそんなに入ってたんだ。そういや、のぼせてきたかも・・・
私は、「はぁ～い」って、お母さんに答えて、お風呂から上がった。
ジャージに着替えて、私は、タオルで頭を拭きながら、リビングに

向かった。
そこには、豚肉の生姜焼きが並んでいた。
「お母さん、今日は、鍋じゃないの？　」
「ふうが、帰ってくるのが遅かったからじゃない。さぁ、早く席に着いて」
「あ、そっか・・・」
私は、タオルを肩にかけたまま、ご飯を食べる。
お腹は、すごく空(す)いていた。ただ、食べるまで分からなかったけど・・・
「ふうって、考え事したらずっと、考えてるわよね」
お母さんが、聞いてきた。
私は、味噌汁のお椀(わん)を口にあてながら、「そうかな」って答えた。
「それに、あんな長い間、雨の中で何をしてたの？　」
どうしよ？　なんて答えようかな？　正直に言っても、信じてくれないだろうし。
「・・・琴実とコンビニで、雨宿りしてたんだけど、全然止まないから、帰ってきたの。そしたらさぁ、途中で雨止むでしょ。なんか、嫌んなっちゃう」
と、とっさに嘘をついた。
「そうなの？　だったら、コンビニで、傘買えば良かったじゃない」
「え、あ、そうだね。買えば良かったね。あはは、何してんだろね、私」
私は、嘘をつくのが、すっごく下手だ。知ってたけど・・・

それから、私は、黙々とご飯を食べた。
別に悪いことをしてた訳じゃないんだけど、少しでもしゃべっちゃうと、「犬が話しした」とか言いそうで。

すると、お母さんから声をかけてきた。
「明日もテストでしょ？　勉強しなくていいの？」
「そっかぁ、まだまだテスト続くんだよねぇ・・・明日は、現国だったかな？」
「ふう、そんな他人事でいいの？　ふうの事なんだから、もっとちゃんと考えなきゃ」
「はぁ～い、ごちそうさまでしたぁ～」

私は、お箸を置いて、自分の部屋に戻った。
もちろん、勉強なんか、手につかないわけで・・・寝ちゃった。

第5話　嘘ってつくの苦手～（後書き）

今回のテーマは、親子の会話や、日常にしました。
少し、物語の展開を遅くしてしまうのですが、こういった描写も必要なのかな、と思って書いてみました。そんなに長くなる物語でも無いので・・・（笑）
しかし、せっかく日曜に作ったストックを使っちゃいました。明日、書かないといけないですね。
では、感想や誤字脱字のご指摘お待ちしております。
タイトル付けてみました☆

第6話　私の朝はいつも早い・・・早く起きれたらなぁ・・・

ジリリリリ・・・

今時、ジリリリって鳴る目覚ましもどうかと思うけど、目覚ましで私の朝は、はじまる。

「ふわぁ～」って、大きな背伸びをして、体を起こす。

「あら、珍しい。目覚ましで起きるなんて」

お母さんが、エプロン姿で登場してきた。

「あ、おはよ」

「いっつも、私が起こしにくるまで、起きないのにね」

・・・私は、リビングに向かう。

テーブルには、トーストにスクランブルエッグに、ローストしたハム。

朝食は、和食ではなく、洋食スタイルなのだ。

どうやら、お母さんの仕事が関連している・・・らしい。

というか、たまには、和食が食べたい。

でも、その為には、お母さんより早起きしなくちゃならないから、多分無理。

私は、日課のオレンジジュースを飲みながら、朝のテレビを見る。

どんなに、遅刻しようが、絶対にテレビを見るんだ。

って、そう心に決めている。

「今日もテストでしょ。昨日、すぐに寝ちゃったのに、大丈夫なの？」

「うん、大丈夫」
私は、トーストを食べながら、テレビに視線を止めたまま、返事した。
「お母さん、落第なんて、嫌よ」
「はぁ～い」
って、私は、生返事をする。

「じゃあ、仕事に行ってくるから、後はよろしくね。テスト頑張って」
「うん、行ってらっしゃ～い」
と、私は、お母さんを見送る。
お母さんは、スーツ姿で、手には大きなゴミ袋を持って、毎朝、仕事場に出掛ける。

高校が近くなので、いつもお母さんの方が早く出る。
だから、ギリギリまで寝ていられるから、静山丘高校（しずやまがおか）にしたんだけど、今朝は、昨日の柴犬が気になって早く出たかった。
食器を洗って、服を着替えて、すぐに家を出た。
「いってきまぁ～す」

昨日、柴犬に会ったのは、家から学校に向かう途中の家が並んでいる道。
あんまり車も通らない住宅街だから、柴犬が車とあたることもないと思うけど・・・

あ、メールだ。

「チョリーッス、ふう。ちゃんと起きれてた？　」
琴実からのメールに、返事を返す。
「うん、起きれたょ～。もう学校に向かってるょ」

「ありえないんだけど・・・、じゃあ、学校でね～」
と、メールのやり取りを続ける。

空を見上げる。
やっぱり今日も青空だ。
雲の隙間から、太陽が顔を覗(のぞ)かせているのが、すごく気持ちがいい。
昨日の雨で、風邪をひくかなって思ったけど、体は元気。

その場所に、近づいた。
私は、辺りをキョロキョロと見渡した。

・・・けれど、柴犬はいなかった。
今朝も会えるかな、って思ったんだけどなぁ・・・ちょっと、残念。
もしかして、昨日の雨で、風邪ひいたんじゃぁ・・・
私って、バカだから、風邪ひかないんじゃぁ・・・

私は、肩を落として、落胆(らくたん)した・・・って、ちょっと大げさかな？
でも、柴犬は、どんなに探してもいなかったから、仕方無いよね。
今日も、テストがあるから、とりあえず学校に行かなくちゃ。また、担任の安部に怒られちゃう。

駅前を通りこして、踏み切りを渡って、坂を上れば高校だ。
この坂が結構キツイ。近所の難所の一つ、恐怖の静山坂(しずやまざか)なのだ。
冬の耐寒マラソンなんて、ゴール寸前の最後の最後に、この坂があるから、恐怖の静山坂って呼ばれてる。
私は、走るのが苦手・・・っていうか、めんどくさい的な。
あと、自転車で来る子達もこの難所に苦戦してる。
ただ、一人を除いて・・・

「おはようございます」

「おはようございます」
「おう、おはよ、おはよ」
その、ただ一人がやって来た。私も挨拶をする。
「おはようございます、先生」
「おお、廷上(ていじょう)。今日は遅刻しなかったんだな」
「ええ、まぁ・・・」
担任の安部は、唯一この難所を普通に・・・普通をよそおって・・・
自転車で登ってくる。
熱血をアピっているのだけど、私から見たら、無駄な努力。もっと
他にしなくちゃならないことがあると思うけど・・・

「おはよ、ふう」
後ろから、声をかけられる。
「おはよ、美希(みき)」
「今日のテスト大丈夫？」
学内一の秀才が、私に聞いてきた。
「うん、多分駄目」
「あきらめんの、早くない？」
「え、どうでもいいじゃん、テストなんか」
「でも、落第しないでね」

私達は、校門をくぐった。
私は、美希に昨日の犬の話はしなかった。

第６話　私の朝はいつも早い・・・早く起きれたらなぁ・・・（後書き）

更新のスピードが落ちてきていますが、頑張ります！
風花の母の年齢は書いていませんが、多分３６歳ぐらいです。
先生もどんどん出したいんですけど、もうすぐ冬休みに入ってしまうので、先生の出し方を考え中・・・
ご感想お待ちしてま～っす！
タイトル付けてみました☆

第7話　テストって退屈～

「今日は、早いじゃん、ふう。しかも、朝起きてるなんて、何かあったの？」

私は、自分の机にカバンを置きながら、琴実を見た。
琴実は、にやにやした感じで私に、声をかけてきた。

「おはよ、琴実。別に、何にも無いけどね～」
私は、自分の椅子に座って、琴実に返事をする。
「だってさぁ、いっつもテストの日って、ふうは暗いのに、今日はすっごい明るいよ」
「え、そうなの？　自分では分かんないよ」
そうなのかな？　そんなにいつもと違うのかな？

「そうそう、私もおかしいかなって、思ったんだ」
美希も、琴実と一緒のことを言う。
「二人の思い違いだって。そんな事ないよ、いつもとふつ～だけど」
昨日、言って笑われたから、今日は言わないもんね。

「それよりさぁ、ちゃんと勉強してきたの？　」
琴実が、私に聞いてきた。それを聞かれると、つらいんだけど・・・
私は、無言で首を横に振った。
「もしかしたら、ガチで補習あるかもよ・・・」
「えっ！　嘘、それ、やばいじゃん」
琴実が言った言葉に、なぜか美希が驚く。
「補習かぁ・・・仕方ないけどね」
私は、一人、ため息をつきながら、天井に向かって独り言をつぶやいた。

「のんきだねぇ～、あんた」
美希が、あきれた顔で言った。
「ってかさ、昔からだよ、ふうがのんきなのは」
琴実が補足する。昔から、したくない事には、興味がわかないのは、ほんとだけど。補習受けなくちゃならないんだったら、受けたらいいんだよ。なるよ～になるさ。
でも、言われっぱなも嫌なので、反論してみた。
「・・・琴実はどうなのさぁ？　他人(ひと)の事言えなくない？　」
「ふふ～ん、ふうとは違うのだよ、ふうとは」
確かに！　琴実は昔から、ちゃっかりしてるもんね。と、心の中で、つぶやきながら、どうでもいいけど、意外と琴実は、おたくなのかなって思った。

キーンコーン、カーンコーンと、開始のチャイムが鳴り響く。
なんか、あんまり好きになれないこの音。だって、時間に縛られてる感じがするし、そもそも時間の感じ方って人それぞれ違うわけで、それを一緒にしようとするからおかしくなるんだよっ！
・・・でも、それって、ただの、社会不適合者だよねぇ。

ガラッと、扉が開く。ピシャッと扉が閉まる・・・って、全部、擬音語じゃん。ごめんね、あんま頭良くないから、擬音語多いけどさぁ・・・
で、とりあえず、先生が入ってきて、一番前の列の人に、テストを渡すの。そして、前の人から順番に、後ろに渡して・・・って、説明要らないよね。

私は、一人で、テストの様子を実況していた。
どうしてかって言うと、暇なもんで・・・テストって。だって、分かんないから、名前書いて、考えるフリして、窓の外眺めて、そして、終わるんだよね。テストが。

宿題は、美希がやってくれるし、体育祭とか学園祭とかは、琴実が教えてくれるから、なぁ～んも考えなくてもいい生活。こんなんでいいの？　って思うかもしれないけど、こんなのがいいの！

テストはとっても平穏無事に終わった。
「ふわぁ～」って、大きく伸びをする私の目に、青い空に、白い雲が映った。雲の流れが早い。もう冬なんだなって思う。西高東低だったっけな？
冬の空は、澄み切っていて、いいなぁ～。夜もいいんだよね、星が綺麗に見えるもん。

「お疲れ～、ふう。テスト終わったねぇ～」
「うん、お疲れ、琴実」
「それよりさぁ、今日さぁ、帰りマック寄らない？　」
「え、別に予定も無いからいいけどぉ・・・琴実、大丈夫？　」
「あ、バイトのこと？　今日は、休みだから」
「じゃあ、いいょ～。でも、美希は？　」
「美希は、駄目なんだってさ。よく分かんないけど、今日はどっかに行くみたい」
「そういや、謎が多いよね、美希って」
美希とは、高校に入ってからの友達だから、中学ん時に、何してたとか全く知らない。だから、謎が多いんだ。
そんな噂をしてたら、美希がやって来た。

「ふう、琴実。ごめんね～、今日はマジで予定入ってんのよ。明日だったら行けるからさぁ」
と、両手を合わして、謝ってきた。
「え、全然気にしてないよ。別にいいじゃん」って、私が美希に言った。
「そぅゆうとこ、ふうの事好きだよ～っ！」

と、美希が抱きついてきた。
・・・いちおう言っとくけど、美希は美人だけど、そんな趣味は無いからね。
「ってかさぁ、どうしてそんなに謝ってんの？　」
美希が、目をきょとんとして、見てきた。
「だってさぁ、ふう。この間、テスト終わったら、フルーツバイキング行こって言ってたじゃん。だからさ、明日にしない？　」
あぁ～、だから謝ってたんだ、と、私は手を軽く叩いた。
「・・・美希。ふうに、そんな事聞いても駄目だよ～。三歩歩けば、忘れるんだもん」
って、琴実が言った。まぁ、そぅなんだけど、そぅなんだけど、他に言い方ってあるじゃん！
「謝ったことが損だったわぁ」
ほんと、二人して、私のことバカにしてんじゃないの？　と、ふくれっ面してるけど、二人とも気付いてくれない・・・寂しい、私。
「まぁさ、そぅゆうことだから、明日行こうねぇ～。じゃあね～、また明日ねぇ～」
と、言って、美希は手を振りながら、教室から出て行った。
「じゃあ、帰ろ～」と、琴実と私も、教室を後にした。

第7話　テストって退屈～（後書き）

テストって本当に退屈ですよね。昔、テストに３０分遅刻して、「今からテストは受けさせない」とか言われ、先生と口論することになってしまいました・・・（実話）

まぁ、次回から少しずつタイトル通り、展開していきたいと思います～☆

第8話　恋愛なんて出来ないよ

恐怖の静山坂の帰りも、恐怖。
だって、坂が急すぎて、走ったら止まらない・・・自転車で降りようもんなら、怪我の一つぐらいは覚悟しなくちゃいけない。
そんな静山坂を、琴実と二人で帰る。

「最近、寒くない？　」
「うん、寒いねぇ～」
静山丘高校は、丘の頂上にあるから、気温が下より寒い気がする。
風が通りやすいからだろうか？時折吹く強風に、身がよじれる思いなのさ。

私は、マフラーをすっぽり口まで被って、坂を下りている。
琴実は、ニットを耳まで被って、防護している。
二人とも、傍から見たら変なのかなぁ・・・
私は、スカートの下にジャージを着てるから、そんなに寒くないけどね。

そうして、坂を下りきったら、駅前になる。
駅の名前は、両淵駅。そんなに大きな駅じゃないから、特に何も無いんだけどね。
でも、駅前には、色々食べ物屋さんとかあるから、ほとんど駅前で済ませる。
だって、都会に行くには、ここから乗り継ぎとかもしなくちゃならないから、結構めんどくさい。
それに、最近、この不景気の中、駅前には、新しくオープンした店とか増えてきた。
こんなとこに出して、やっていけるのか、心配だけど・・・

両淵駅前は、人が多いなぁ・・・って、いつも思う。人が多いのが苦手なんじゃなくて、歩道を歩きづらくなるから嫌なんだよね。琴実と、何気ない会話をしながら、目的地へと向かう。駅の降下にある。

「あ、けっこう、いっぱいだよね～」
みんな行く場所が無いのか、テストが終わった後なんかは、学生で埋まる。
「ふうは、何食べる？　」
と、琴実が聞いてくる。
「じゃあ、チキンタツタ食べる～」と、私は即答した。
「琴実は何食べんの？　」
「え～、私は、ストレートティーでいいや」
食べないの？　じゃあ、何で私に聞くの？？
「えっ？　私だけ食べてたら、変じゃん？　」
「そんなことないよ～。ふつ～だよ」
何が「ふつ～」なのか、さっぱり分かんないんだけど・・・
「ええっと、お決まりですか？　」と、困った様子で、聞いてきた店員さんだった。

結局、私は、チキンタツタのセット・・・にしちゃって、琴実はストレートティーだった。
席について、番号札の裏とかひっくり返して見てる私に、琴実が聞いてきた。
ちなみに番号札の裏側は、真っ白だった。どうでもいっか。

「ねぇ、ふうって恋とかしないの？　」
え？いきなり言われても・・・少し、考えてから、「しない・・・というか、出来ないんじゃない？　」と答えた。

「どうして？　好きな人とかいないの？　」
「う～ん・・・いたら、琴実にもう言ってるんじゃない？　」
「そうだよねぇ。ふうって昔からそうだもんね」
何が言いたいのか、さっぱり分からないけど、ちゃんと話を聞かなくちゃ。
「どうして、そんなこと聞くの？　」
と、私は琴実に聞いてみた。

「あのね・・・実はね・・・」
「３４番の番号札でお待ちのお客様。お待たせいたしました」
人がせっかく話の核心を聞こうとする時に、なぜ邪魔をする、店員よ。
「あ、はい。」・・・でも、普通に答えちゃうんだよね、私って。
「チキンタツタのセットになります。ごゆっくりどうぞ」
・・・私達の目の前には、話を邪魔したチキンタツタのセットが、おいしそうに並んでいます。

「あの、ごめんね。琴実。続きを話して」
「あ、いいよ、いいよ。食べてからでいいょ」
「だってさ、食べれないょ。話が気になるし・・・」
どんどん冷めていくポテト達よ、ごめんなさい。

「えっと、ふうに内緒にしてた事があるんだ」
え、何？
「実は、今年の夏から、バイト先の人と、付き合ってて、なんか、ふうに言えなくて遅くなったんだけど・・・」
ええっ！！　ほんとに知らなかったよ～、そんなの～！！
「え、あ、そうなんだ～！」
私は、驚きを隠そうとしたけど、駄目だった。
「ふうには、何か言えなくて、ごめんね」

「でも、琴実。どうして今言うの？　」
「あ、えっと・・・昨日、彼から別れよって言わて」
「それで、どうするの？　」
「まだ、分かんない。はっきり決められないの」

私は、琴実の彼の事や、付き合った時のこと等、色々聞いた。
と言うか、琴実は、誰かに話したかったんだと思う。
そんな話を聞きながら、私は、目の前にいる琴実が、昔の琴実じゃなくて、なにか遠い存在のような気がしていた。

私には、恋愛なんて出来ない。
そんな感情が沸かないし、こんな私に興味を持ってくれる人なんかもいやしない。

第8話　恋愛なんて出来ないよ（後書き）

実は私は、恋愛話を書くのがすっごく苦手なんです（暴露・・・）多分、歴史の小説とか戦争ものとか書いてる方が得意なんですけれど、今回頑張って自分に挑戦しています。ふうが、頑張って恋愛できる女の子になってくれればいいんですけど・・・私が書くので、どうなることやら？前途多難です。

次回からは、新たな展開をしていきます。ということで、少し次話の投稿が2日～4日以内を目標に頑張りたいと思います。
ご感想、誤字脱字等のご指摘お待ちしてますっ！！

第9話　雲がない夜は、月も星も綺麗だょ～

そんなこんなで、琴実は、ずっと喋っていました。
私は、結構うわの空で、琴実がこんなにたくさん自分の事を話すのは久しぶりだなぁって思ったり、恋愛ってほんとに、こんな感じになるのかなぁって思ったり、もしかして私は一生恋愛なんて出来ないかも？　っと、嘆いたり・・・
でも、琴実は、寂しそうでもあり、でも、楽しそうでもあり、なんて言えばいいのか分からないんだけど、幸せって言うのかな？
そんな感じ。

琴実の話は、長かったので、短く言うと、彼氏は、４歳年上の大学生で、写メを見る限り、優しそうではなかったけれど、琴実はべた惚れでした。そいで、彼から別れよって言われて、でも琴実はまだ好きだから、どうしよう？　って、いう感じ。
私は、なんとも言えないから、「うん、うん。それで？　」って、聞いてるだけだったけど、琴実は満足そう・・・なのかな？
結局、結論は出ないまま、お店から出たんだけど、恋って人を変えるよなぁって思うばかりで、なんか良く分かんない。

「じゃあね、琴実。なにかあったら連絡してね」
琴実の家の前で、バイバイした、私は、空を見ながら考えごと。
「今日も、寒いね」
と、満天に広がる星達に、一人、声をかける。
星は、キラキラと輝きを増しながら、雲ひとつない空に、灯りをともし続ける。

そして、月は、その圧倒的な輝きからか、ひどく孤独に見える。
「あの月は、私なのかな」

虚空(こくう)に浮かぶ、月は、星達の輝きに負けないように、光っている。
時折、冷たい風が、私の頬を横切る。
白い息を吐く。ほんとに、「冬が来るのが早いんだよねぇ」と、独(ひと)り言をつぶやきながら。

私は、街灯が少なくなってきた住宅街に入ってきた。
ここを抜けると、私の家はもうすぐ。

すると、あの柴犬がまた道の真ん中に座っていた。

「あ、柴犬だぁ」
私は、柴犬までの距離を小走りに、走った・・・他人から見たら、歩いただけど。

「柴犬、元気にしてた？」
尻尾をぱたぱたと振り、私の聞いたことに答えたようにもみえる。
膝(ひざ)に手をつき、柴犬の眼を覗きこむ。
「風邪、ひいてなかったよね？　」

「あ！」、私は思い出した。
瞳(ひとみ)を閉じれば、会話出来るんだっけ。

私は、瞳を閉じて、柴犬に話し掛(か)けてみた。
「あの日、雨降ってたから、心配したんだよ」
「ありがとう。大丈夫だよ。今朝は、どうしても用事があったので、ここには来れなかったんだ」
と、暗闇(くらやみ)の中から、彼の言葉が聞こえた。
「良かった、元気で！でも、寒いのに、こんなところで、何してるの？」

「どうしても見せたいものがあって・・・」
「私に？　」
「そう。こんなに雲が無い夜って、あんまりないから、どうしても今夜見せたいんだ」
私は、目を開けて、時計を見た。夜８時だった。
どうしよう？　あんまり遅くなると、お母さんが心配するし・・・連絡したら、「危ないから早く帰って来なさい」って言われるよねぇ・・・と、私は考えた。
「ごめんね、突然で。夜遅いから、もう無理かな？　」
そう言われると、逆に断りにくくなるんだよなぁ、私って。

少し考えて・・・ううん、考える振りをした。もちろん結論（けつろん）は、決まってる！
「いいよっ」
と、私は返事した。
だって、好奇心の方が強いんだもん。おもしろそうだし・・・お母さん、ごめんなさい。と、心の中で謝っても、テレパシーは使えないから通じないよね。

「じゃあ、ついて来て」と、柴犬は走り出した。
「え、あ、ちょっと待ってよ」と、私も柴犬の後を追いかけていった。

第9話　雲がない夜は、月も星も綺麗だょ～（後書き）

やっと、柴犬再登場です！少し、日常の描写を書きすぎたので、展開が遅くなったんですが。なんとか、3日目で目標をクリア出来たぁ！

琴実の話を少し短くしてしまったので、今度は長めに取りたいと思いますが、それはまた以降のお話で。

次回の更新も、2日～4日を目標としています。もしかしたら、ちょっと伸びるかも・・・年内完結は難しくなってきました（汗）

それでは、感想、ご指摘お待ちしてます～☆

第１０話　走れメロス～っ

犬と一緒に走る。
そんな体験したことないぃょ。
私、走るの苦手なんだけどぉ・・・

私達は、駅前に向かって走った。
道行く人達には、犬と散歩してるように見えるんだろうなぁ・・・
っていうか、柴犬、首輪してないけど。

こんなに走るのなんて、久しぶりすぎて、ちょっと・・・
「はぁ、はぁ・・・ちょっと、待って、ってか無理」
私は、途中で立ち止まった。肩が上下に揺れて、白い息が空中に浮かぶ。
「あ、ゴメン、僕、走ることが好きなんだ」
目を開けると、柴犬がこちらにゆっくり歩いてきてる。
また、目を閉じる。
「はぁ、はぁ・・・あのね、ちょっとゆっくり行かない？」
「う～ん、いいけど、あんまり時間が無いんだ」
「・・・時間が無いの？　じゃあ、しょうがないか・・・」
どうして時間が無いのか、なんて事は考えなかった。私は、目を開けたら、駆け出していた。
柴犬も私の横をぴったりついて、走る。

駅前の繁華街（はんかがい）に入った。８時過ぎだから、駅前は人が多い。
その人の中を、一匹と一人は、走っていた。
結構、人から見られるけど、そんなことどうでも良かった。
久しぶりに走っていて、なんかいい気分。

電車の高架下を越えて、線路の向こう側へ向かう。
すると、私の目の前には、あの静山坂が、立ちふさがった。
「えっ！恐怖坂じゃん！」
私は、叫んだ。ここを登るの～？　うそ～！
「そう、ここを登らないといけないんだ」
柴犬は、そう言うと、軽々、四本足でかけていった。
私も柴犬に続いて、この坂を登り始めた。もちろん、走って。

走りながら、柴犬に愚痴を言う。
「はぁ、はぁ。だって、犬って、四本も足あるじゃない。ひきょ～だよっ」
「卑怯、かな？　」
と、柴犬は苦笑いをしたようだった。だって、表情は見えない、っていうか、目を開けると、いつものひょうきんな顔だもの。
「駄目～、駄目～、駄目っ～」
と、走りながら、叫ぶ。何も入ってないバッグが重く感じるよ。

「ってかさ、どこ行くのさ。もうすぐ高校なんだけど」
私は、目を閉じながら、柴犬に聞いてみた。もちろん、走りながらだから、電柱にでもぶつからないかな？
「その高校の裏に・・・って、大丈夫？　」
ドタンって、私は倒れた。石につまずいたらしい・・・
「いったぁ～い」
私は、大声で叫んだ。
「・・・ジャージが破けちゃった・・・」
今度は、左足だ・・・なんて、運動神経の無い私。でも、叫んだら、あんまり痛くないのはどうしてだろ？
柴犬が、心配そうな感じで近づいてきた。
「ほんとに、大丈夫？　ゴメン、僕と話すのに、目を閉じなきゃいけないから・・・」

ひどく、悲しそうな声だった。私は、柴犬が本当に心配してくれてるんだって、その暖かい声で分かった。
「うん、へーき！だって、こんなのいつものことだもん」
と、私は、立ち上がって、膝のほこりを払う仕草をした。今は、走り疲れているのか、全く痛みが無かった。
「さぁ、行こっ」

柴犬と私は、頂上まで登りきって、高校の裏にやってきた。
「疲れた～」
私は、両手を真上にあげて、疲れたのポーズをとった。
高校は、この静山坂の頂上にあるんだけど、高校の裏って、竹やぶみたいな草が生い茂(しげ)っていて、あんまり立ち寄ることは無かった。
「こっちなんだ」
柴犬は、その草をかけ分けて中に入っていった。
辺りは、暗くなっているから、ちょっと不気味なんだけどぉ・・・
でも、ここまで来たんだしね。入るしかない！って思って、柴犬の後を追って、中に入った。

「いたっ！もうっ、何なのよ、この草！いたた・・・」
私は、手入れのされていない長い草を両手でかき分けながら、柴犬の後を追った。
「大きな木があるから、気をつけて」
目を閉じると、柴犬の声が聞こえる。

目を開けると、大きな木が立っていた。
「え～、こんな木があったんだ。教室からは、向きが逆だったから、見えなかったんだ」
私は、大きな木を見上げて、つぶやいた。

「その木の周りを歩いてきて」

柴犬の声が、木の向こう側から聞こえてきた。
私は、手で木を掴みながら、木の周りを歩いた。

第１０話　走れメロス～っ（後書き）

次話更新、意外と早かったです。走る描写は、書く方もその気分になって、勢いつけて書くので、スラスラ書けてしまいました。・・・ただ、誤字、脱字が気になるところですけど。だって、勢いだけで書いてしまいましたので。

このお話は、次のお話と一緒に書こうと思っていたのですが、意外にも走るだけっていうお話があってもいいんじゃないかなって思って、走るだけで、１話にしてみました。

次回は、前回から含みを持たせた見せたいものとここに連れてきた意味が分かると思います。まだ話が少ないので、感想は無いと思いますが、寂しいので誰か感想書いてやってくださいなっ（涙）では

では～☆

第１１話　星と星の夜空と、どうしよう？っていう想い（前書き）

前回までのお話
犬と一緒に、あの恐怖の坂を登ったよ。
とっても疲れたけど、すっごく気になるから、苦手だけど、登りきった。
そして、高校の裏にある茂みの奥へと進む私。
何があるんだろう？

第１１話　星と星の夜空と、どうしよう？っていう想い

「わぁ～、すごい～」
私の眼前には、街(まち)がキラキラと輝きを放ってた。

そう、何て言えばいいんだろぉ？
空の星達と、街の煌(きらめ)きが一緒になって、全部が光に溢(あふ)れてるの。
えっと、「風景の玉手箱や～」みたいな感じ？あは。

私は、その光景に圧倒(あっとう)されて、仁王立(におうだ)ちして、その風景を眺めてる。
時折、吹く風が、私の肌を冷たくしても、全然平気って感じだった。

「キレイ～」
ほんっとに、キレイとしか言いようが無くて、ごめんなさい。
多分、レポーターなんかしたら、視聴者の皆様方に、何も伝えることができない程の表現力だと思う。

私は、その場に腰を降ろして、体育座りをして、見ていた。
なんか、感動？
毎日、毎日、なんっにも無くて、ただ生きてきただけなんだけど、
こんな景色とか、こんなのが見られるなんて、まだまだ世の中捨てたもんじゃないっていうか、だよね。
こんなんで、人生？みたいなこと考える私ってほんとに単純。

柴犬は、私の横に座って、一緒に見てる。
その横顔が、かわいい。

私は、瞳(ひとみ)を閉じて、柴犬に話かける。
「すっごくきれいだね」

柴犬も、私に話かける。
「でしょ？僕のお気に入りの景色なんだ、ここは」
「いい場所(とこ)もってんじゃん」
「よく一人で、ここに来て、ずっと眺めてるんだ。ここに来ると、明日の事とか忘れることが出来るから・・・って、性格、暗いね」
と、柴犬は苦笑いをした・・・と思う。
「いいんじゃない？私は、好きだよ、この景色」
「ありがとう。寒い夜は、星がすごくキレイ。凍(こご)えるような寒さは、空を澄み切らせて、僕達に安らぎの光を与えてくれると思うんだ」
「・・・なんか、よく分かんないけど、寒い日は、キレイなんだね」
「・・・そうだね」

「あ！？」
私は思い出した。
「どうして、時間が無かったの？」
そう、坂を登る時に、時間が無いって言ってたの、ちょっと分からなかったんだ。
「ああ、時間が遅くなると、電灯が消えてしまうから、というのが、一つ目の理由」
「そっか。じゃあ、もう一つの理由は？」
「今、この後ろにある大きな木って、古くから伝わる神木(しんぼく)なんだよ」
「・・・しんぼく？？」
「えっと、神様の木っていうこと」
「神様の木ねぇ～」
私は、額に手を当てて、考える振りをした。だって、神様の木って何よ？
だから、テキトーな思いつきを言った。
「・・・願い事が叶うとか系？」
「え、どうして分かったの？そう、願い事が叶う、神様の木なんだ」
えっ？当たっちゃったけど・・・思いつきだから、ちょっと恥ずか

しい。
「あ、やっぱり～。そっかな～とか思ってたんだけど・・・あはは」
これが、苦笑(にがわら)いっていうのかな？
「今日という日は特別なんだ。僕の願いを叶えてくれたんだから」
「あ、そうなんだ。どんな願いをしたの？」
「君に会いたいって願った」
「ふぅん、そっか・・・って、あたしに？？」
さらって言ったから、危(あや)うく流しちゃうとこだったよ。
「そう、犬だけど、君に会いたかったんだ」
「・・・良く分かんないことだらけだけど、どうして犬？」

ほんっとに、頭ぐちゃぐちゃなんですけど・・・
「犬って、いっぱい走れるから。風のように走れる。君に追いつくことが出来るから」
「私、足遅いから、すぐに追い付けれるよぉ？」
「・・・ほんとだね」
と、柴犬は笑った。・・・ちょっと失礼なんですけど・・・

「でも、どうして、私に会いたかったの？」
聞いてみた。聞いてみたかったから。
「好きになってしまったから」
「ええっ？？」
犬なんですけど・・・あなた犬なんですけど、って言えないよ～！
犬に告白される私。
なんて言えば言いんだよぉ～？？

第１１話　星と星の夜空と、どうしよう？っていう想い（後書き）

前話からだいぶ経ってしまいました・・・仕事が忙しくて、精神的にも書く気がしなくて、だから、全然執筆出来なくて、このまま書かなくなるのでは？と、危惧（きぐ）したので、書いてみました。
作者もこの作品の気持ちを忘れてしまうところでした（笑）

ちなみに、後書きで書くことでは無いのですが、風花（ふうか）はボーイッシュな感じで、かわいい男の子みたいな感じです。それを思い出しながら、２時間ぐらいかけて、やっと１話書けましたので、更新しました。
私の胸の中に生きる風花は、いつまでも元気でいて欲しいものです。

第１２話　神木のキセキ

私と柴犬の間に、沈黙という冷たい風が吹いた。
どう答えたらいいのか、ほんっとに分からなくて・・・

「・・・犬じゃ駄目だよね」
柴犬の声が聞こえてきた。
「人間だったら、良かったかな？」

私は、何も答えないまま、というか、答えることが出来ないまま、時間だけが過ぎる。
ビュウーって、冷たい風が頬を叩く。けれど、寒さより、どうしたらいいの？　って、ぼっかり考えてた。

好きとか言われても・・・
ってか、私って、人に好かれないのかも。
初めて告られたのが犬って、ありえなくない？
そもそも、どうして、犬が私の事を好きなのよ。
私は食べ物とかじゃない！

でも、頭の中に話掛(か)けてくる声は、すっごく優しくて、なんか気になる。

「う～ん」
私は、唸(うな)った。
頭の中は、空っぽだから、なんにも考えられないけど、でもこのままじゃいけない気がするし・・・

ふと、私の頭をよぎった。

・・・人間だったら？

「あのさ、この木って、しんぼくなんでしょ？だったら、私が、この木に、あなたを人間の姿にして下さい、とかゆう願いも叶えてくれるの？」

「え？叶うと思うけど、僕はもう願いを叶えてしまったんだ。願いは一つしか叶えられないんだ」

「じゃあ、私が叶える」

いっそのこと、柴犬の人間姿って見たい、って思った。

めちゃくちゃだとは、思うけど、ほんとに、叶うのかも分かんないけど、でも、でもしないよりは、マシ。

だって、なんか、このままムリとか言うの、可哀想な気がして仕方ないのよ。

それに、柴犬の人間の姿って、なんか興味沸かない？

そう思うでしょ？だから、私もそんな願いをしてみた。

だって、駄目でもともと。願いなんか、叶うのかなぁ？

私は、眼をつぶったまま、「柴犬を人間にして」って、願いを心の中で言ってみた。

えっと、こうゆう時って、手を組むの？それとも、手のひらを合わせるの？

両方違うよぉな気がするけど・・・

すると、風が私の周りを、包み込むように、まわっているのが分かった。

私の後ろ髪が、ふわりと宙に浮く。

「え？」

私は声を出した。

目を開けると、周りは白い靄(もや)で、そこに、光がうっすらと見えた。
「え？え？何コレ？？」
右見ても、左見ても、白くて・・・なんか、暖かい光が・・・照らす。
これって、願いが叶ってる、ってこと？
神木の葉っぱが、風で揺れてる音が聴(き)こえる。
ザワ、ザワって、音。
葉っぱと葉っぱが当たる音。
枝が揺れてる音。
神木が、私に話し掛けてるの？

「うん、願いは、彼を人間の姿にして欲しい」
私は、神木に答えた。

風がそっと吹きぬける。
「それで、いいの」
私は、答えた。

そう心の中で私は答えると、神木は了解したように、ゆっくりとゆっくりと白い靄(もや)が晴れていく。
それは、もう、瞬(まばた)きをすることも忘れるぐらいに、不思議な光景・・・

白い靄(もや)の向こうに影が見えたっ。
それは、人の形してる。

私は、右手で両目をこすった。
だって、今あるこの現実を、私の悪い頭が理解してくんないんだも

の。

私が目を開けると、そこには、すらっとした長身の男の子がこっちを向いて立っていた。

ドキッとしたょ。けっこうかっこうイイ顔してるから。
イケ面っていうやつ。
こんな人に告られたの、私って。本当に？
全てのことが信じらんない。コレって、本当は夢だったりして・・・
私は、自分のほっぺたをつねってみた。
・・・マジで痛いんですけどぉ。
ってことは、夢じゃないよね。

柴犬は、自分で自分の姿をキョロキョロ見ていた。

「やぁ。・・・どうも」
と、彼は、私に向かって、にこってした。

本当に願いって叶うんだ。
私は、柴犬・・・ではなくなった彼を、ずっと眺めていた。

第１２話　神木のキセキ（後書き）

やっと、柴犬が人間になりましたよ。
ここまで考えていて、やっと一部（って区切っていないけど）が終わりそうな感じです。

なかなか更新速度があがりませんが、ゆっくりとゆったりと時の流れを感じながら、次話をお待ち下さい（笑）
あと、２話ぐらいは、書き上げたので、すぐにアップできそうです。

第13話　彼の名前は私が決めたんだ

「あの・・・、口開(あ)いてるんだけど」

えっ??・・・あっ！

私は、口をポカーンと開けたまま、今、目の前に現れている男の子を見ていた。

慌てて、私は口を両手でふさいだ。

「あはは」

いきなし、彼は私を見て笑い出した。

何？なにかおかしなことでもしてる、私？

口は閉じたょ。

すると、それが分かったのか、

「ごめん、ずっと目がまん丸で、きょとんとして、見てるからさぁ」

って、彼は、自分のお腹(なか)に手を当てながら、答えた。

当たり前でしょ！だって、だって、犬が人になるなんて、ありえなくない。

そんなことが目の前で起きてて、普通でいられるわけないじゃん。

どうせ、私の顔って、ホントにひょうきんな顔してると思うけどサ・・・

私は彼に近づいて、手で彼の顔を触ってみた。

だって、私の中にいる好奇心(こうきしん)が、「本当に人間なの？触ったら、毛がふさふさしてるかもよ～」って、ささやくんだもの。

「うわっ、触れる～」
ペタペタと、私の頭のちょうど、てっぺんにぐらいにある彼の顔を触ってみた。
目もあるし、鼻もあるし、口もある。ちゃんと全部人間だょ。

「・・・あの」
って、彼は、恥ずかしそうに言った。
「あ、ごめんなさいっ」今度は、私が謝って、手を引っ込めた。
そうしたら、なんか気マズイ沈黙(ちんもく)が・・・
だって、なんか緊張されたら、私も緊張するって。

「えっと。名前は何て言うの？」
その沈黙に耐え切れなかったから、名前聞いてみた。

「え？名前？」
彼はすごくびっくりした感じだった。

「だって、名前、聞かないと、何て呼べばいいか分かんないじゃん。
あるでしょ？犬だった時の名前。何て呼ばれてたの？」

彼は考え込んだ風に、腕を組んだ。
「あのね。野良犬(のらいぬ)だったから、特に名前は無いんだ」
と、彼は私の目を見て答えた。

そっかぁ・・・捨て犬？それとも、両親がどっかにいっちゃったのかな。
なんか、悪いこと聞いちゃった。
あ・・・そうだ、そうだ。

って、ある名案(めいあん)が私の頭に浮かんだ。

「じゃあ、柴犬だから、シバ君って読んでもいい？」
私は、手であいづちをたたいた。名前が無かったら、作ればイイじゃんね。
私ってあったまいい～。

「うん、シバか・・・いい名前だね」
「・・・ホントにそう思ってる？」
「思ってるよ、思ってる」
「じゃあ、決定だね。今日からあなたは、シバ君だよっ」

私は腰(こし)に手をあてて、胸(むね)を張(は)って、「エヘン」って言った。
あ、胸が無いとか言わないでね。けっこう、気にしてんだから・・・
そんなことより、なんか大切なコト忘れてるんじゃあ・・・

第１３話　彼の名前は私が決めたんだ（後書き）

２日連続で投稿できました！！
こつこつと、仕事中に原稿を書いていて良かった（笑）

しかし、ちょっと文字数が少ないのです、すみません。
明日もこの調子で、投稿できたら、と思います。

第１４話　シンデレラタイムっ

「あっ」
と、私は声を出してしまった。
告られたんだよね、私って。
どう答えたら、いいんだろ？
「いや、今、すぐに返事して、とかじゃないんだ・・・」
シバは、頭をかいて下を向いた。
かっこいいとは思うけど、私、恋って分かんないし、付き合うとかももっと分かんない。
ってか、人になっても犬は犬なんだし、そもそも、犬が人になっても・・・
「うん、ごめんなさい。私、今はまだ、心の整理がつかなくて・・・」
としか、言えなかった。ってか、問題の先送り？
「そっか・・・」って言った。シバは、下を向いたままだった。
「あ！廷上（ていじょう）さん。こんな、時間になっちゃったけど、大丈夫？」
「えっ？今何時？」
私は、ポケットから、携帯電話を取り出して、時間を見た。
げっ！ヤバイっ！！コレは、非常にヤバイっ～！！！

時計は、夜の１２時になろうとしていました・・・
しかも、聞いてっ！ここって、圏外なんだよねぇ～・・・あはは・・・

「家まで送るよ」って、シバは言ってくれた。
夜中だし、かよわい女の子が一人で帰るのは危険だよね。

私たちは、坂を下りて、家まで帰ることにしたんだけど、帰り道は、二人とも無言だった。
なんか、聞きたいコトは、いっぱいあるんだけど、緊張してる。そんな感じ。

シバと会った道までやって来た。
「ここでいいよ。家、近くだし・・・」
ご近所さんに見つかったら大変だよ。「廷上（ていじょう）さんとこのお子さん、遅くに男の子と一緒にいたんですって」みたいなコト言われるし、それでなくても、母一人、娘一人だから、何かと目立っちゃうんだよね。

「じゃあ、ココでね」と、私は、言ったんだけど、シバはどうするのかな？
「シバ君は、ドコに帰るの？」と私は、振り返って聞いてみた。

すると、すぐ後ろにいたはずのシバがいなかった。
「あれ？ドコに行っちゃったの？」
私は、あたりを見回してみたけど、シバの姿が見えない。

ふいに、「ワン」って、鳴き声がした。
私は、とっさに、半歩下がった。

視線を落とすと、いつものひょうきんな柴犬がそこにいた。

「あれ、犬に戻っちゃったの？」

シバは、顔を縦（たて）にふった。どうやら、私の言ってることは分かるみたい。

目を閉じて、シバとの会話を試みた。

「今日は、遅くまでごめん。でも、ありがとう。僕、好きになってもらうように頑張るよ」

好きになるように頑張るって言われても・・・

「また、待ってるから」

「・・・うん」

「じゃあね、気をつけて」

「うん、バイバイ・・・って、ドコに帰るのさ？」

・・・やっぱり、返事無い。

目を開けると、シバの姿はどこにもいなかった。

まるで、キツネにつつまれた・・・犬に振り回された気分。

でも、すごいよね。願いが叶うんだもん。そんなんありって感じ。

今も星がキレイ。今日は、とってもイイ日でした。

その後、もちろん、私はお母さんに、こってり怒られちゃったわけで・・・

琴美からの電話も圏外だったから、「つながらないじゃん」って怒られて・・・あはは、な夜でした。

第１４話　シンデレラタイムっ（後書き）

書き溜めていたストックがこれで無くなりました・・・
更新速度が、また遅くなってしまうのですよ、すみません。
感想書いてくれたら、嬉しいです。よろしくお頼み申します。

第１５話　答えなんて無いの！

その晩、私は寝付けなかった。

私なりに、「好き」っていう感情を考えてみた。

「好き」っていう感情ってさ、何で生まれるんだと思う？
だって、元々他人だし、知らないわけじゃん、自分のコトを。
なのに、どうして、人は簡単に、「好き」とか「恋」とか「愛してる」とか言える訳？

生活も違うし、一緒に居た時間なんて、ほとんど無いはずなのにさ、
どうして心を許すことができるのかな？
結局、心を許してないんだと思う。スリルっていう楽しみ、新しいことを知りたいって感情なんじゃないのかな。

「この人しかいない」、とかってのも、ただの妄想じゃん。
誰でもいいんじゃないの？、とかって思っちゃう。
だって、この日本だけでも、１億人の人が生きてるんだよ。
その内の、半分が男性で、それを単純に、７０で割っても、７１万人の人が同い歳。
さらに、３歳ぐらいの歳の差でもいいんだったら、２１３万人もいてる・・・

なんか、数字が大きすぎてよく分からないんだけど、要するにたくさん人はいてるっていうこと。
その中から、どうして、２１３万分の１を選ぶのかもよく分からない。

結局、近くにいたから、たまたま知り合ったから、とかいう理由じゃないのかな。
誰でもいーんだよ、どうせ。

お母さんも結局、駄目だったわけでしょ。
それは、生活環境が違うからなのか、そもそも二人とも若すぎたのか。
お父さんは、お母さんより、年下だったし、私達を養(やしな)うお金も無かったって言ってた。
というか、そもそも、まだ子供だったんだよ、二人が。
多分、そう思う。

私は、お父さんの顔を見たこと無いけど、あんまりお母さんも話をしたがらないし。
話を聞いたところで、今までの私の人生が変わることない、これからも。

えっと、えっと、話が逸(そ)れてきたけど、
結局、若いうちの「好き」とか「恋」とかって、なんか勝手に盛り上がっちゃってるみたいな。
そんな感じだと思うんだ。

誰だったけ？
「恋に恋してる」とかナントカ。
恋をしている自分に恋をしていて、相手なんか誰でもいいんじゃないの、みたいな。
それでね、自分の思っていた理想と違うから、傷つくんだよ。
裏切られた、とかね。

ありえない。

自分と相手とは絶対に違うんだから、相手を勝手に妄想するのはいいんだけど、それを相手に押し付けて、こんなんじゃなかった、とか言うじゃん。
そんなのバカらしくない？
自分がかわいいだけじゃん。

その逆もそう。
自分はこんなにしてるのに、とか、こんなに尽くしてるのに、とかこんだけ思ってるのに、とかって、それも自分の勝手な妄想なんだよね。
相手は、そう思ってないことの方が多いような気がする。

そんな恋だったら、しないほうがいいょ。
そんなのが、恋愛だったら、したくないょ。

・・・駄目だ。なんか思考のループが、負の螺旋（スパイラル）に陥（おちい）ってる・・・
分かんないことだらけで、これは、出口の無い迷宮（ラビリンス）なのかも。

結局、私って何なんだろう？

怖い・・・んだろうなぁ。人を好きになるのって。
妄想だもん、私の。
傷付くのが怖いよ。
本当の姿を見たくないよ。本当の姿を見せたくないよ。
どうせ分からないんだもん。

それでも合う人っているのかな。
それでも、お互いがお互いを思いやれるって人はいるのかな。

でも経験しないと分からないこともある、とも思う。

ああっ、分かんない。
答えみつけようとするから、分かんないんだよ。
答えなんて、無いの！

なんか、疲れた・・・
普段、使ってない頭を使うのはだるぃ・・・

結局、すっきりしないまま、気付いた時には、私は寝てた。

第１５話　答えなんて無いの！（後書き）

夜中に更新です！
なんとか毎日、投稿続けています（笑）
今回は、１話丸々、風花の気持ちを綴（つづ）ってみました。

小説の中の一日は、遅かったり早かったりします。
小刻みにテンポ良く進みたいのですが・・・まだまだ修行が足りませぬ・・・
日々、精進、精進ですね。

第１６話　番号交換しちゃいました。

「・・・きなさい。ふう！起きなさい！！」

ゴローンって、私はベッドの下に落ちて目が覚めた。

お母さんが、私の布団を下から抜き取ったおかげで、私は無様（ぶざま）な姿で床に落ちた。

なんていう起こし方なんだろぅ・・・

「イったいじゃん！何すんのさ！」

「あなたが起きないからでしょ。昨夜、あんな遅くに帰ってくるからじゃない」

あ、そうだった。私は、あぐらをかきながら、頭をポリポリかいた。

お母さんは、もうスーツに着替えていた。

今日は、テスト休みだから、寝かしてくれてもいいのに・・・

私は、ふてぶてしく、立ち上がってリビングに向かった。

お母さんは、「あんなに夜遅くに帰ってきちゃ駄目（だめ）よ」と、言い残して家を出て行った。

みんな忘れてると思うんだけど、今日は、琴美と美紀が言っていたフルーツバイキングに行く予定。

昨日、琴実からメールが入ってたから覚えてたんだけど・・・

なんだけど、昨日の不思議な体験が頭をよぎってしまう。

なんかウソみたいなホントの話。

朝は、いっつもテレビを見続けているのに、それもずっと、なのに、

全くテレビを見る気がしなかった。
とりあえず、服を着替えて、洗い物して、ちょっと早いケド、出かけよ。
外の空気を吸いたいなって思った。

・・・もしてかして、シバいるのかな？
私は少し期待(きたい)した。

今日も青空だ。
私は、空を見上げて、空に、「おはよ～」って、挨拶(あいさつ)した。
なんかすがすがしい～みたいな。精一杯、深呼吸して駅に向かって歩き出した。

電信柱にもたれて、腕(うで)を組んで、目をつぶってる長身の男の人が見えた。
・・・シバだ。
イヤホンしてる・・・多分、音楽聴いてるんだと思うけど、どっから盗んできたんだ、コイツ。

えっとぉ・・・何て声かけたらいいんだろ？

すると、シバは目を開けて、こっちを見た。
とっさに、私も近くの電信柱の後ろに身を隠した。・・・つもりだったけど、電柱におでこからぶつかっちゃった。

「・・・あのさ、何してんの？」
おでこを押さえながら、私は、シバに聞いた。
というか、私のほうが何してんのって感じだけど。

シバは、片方の耳からイヤホンを外した。

「えっと、待ってたんだけど」
「私を？」
シバは、頭を縦にふった。
「どっか、遊びに行かないかなぁ？って、思って」
う～ん・・・と、私は腕を組んで考えた。
今日は、フルーツバイキングに行く予定なんだけどなぁ・・・
予定なんだけどなぁ・・・
「いきなし、勝手に待たれても・・・私にも都合ってもんがあるのよねぇ」
普段、都合なんて何にも無いんだけど、どうして今日？
「そっか、予定があるんだよね」
「・・・うん、友達と遊びに行くの」
「こちらこそごめん」
「・・・うん」
素直に謝られると、私は戸惑(とまど)っちゃう。
でも、友達との約束は守りたいって、昔から決めてるから。
・・・よく忘れてすっぽかしちゃうけど。
本当に忘れただけだから、嫌だから行かないとかじゃないからね。
シバは、ポケットから携帯(けいたい)を取出した。
えっ、どこから携帯を？？謎(なぞ)は深まるばかり。だって、犬なのに。
「・・・番号教えてくれないかな？」
シバは、下を向きながら、携帯を持ってる。

「その携帯って、シバ君の？」
「そうだよ」
「携帯って犬でも借りれるの？」
「犬は、借りれないんじゃないかな」
なんかよく分かんない会話。
じゃあ、どっから携帯を持ち出したんだろう？

けど、せっかく待ってくれてたの悪かったし、番号交換ぐらいしなきゃ悪い、ような気がする。

「うん、いいよ」
「ホントに？」
「うん、じゃあ、赤外線で通信できる？」
「・・・何それ？そんなの出来るの？あんまり携帯使ったことが無いから」
「そうだね。犬だもんね」
と、私は笑ってしまった。
シバも、「そっか、犬だったもんね」と笑ってる。

私は、「じゃあ、シバ君の貸して」と言って、携帯を借りた。
ってか、最新の機種じゃん。こいつやるなぁ～。

私は、手馴れた操作で、番号の交換をした。これぐらいなら、私でも出来るもん。
「はい、終わったよ。じゃあ、後で私からメールするね」
「うん、ありがとう」

「じゃあね」って言って、シバは、星谷公園（ほしのたに）へ向かって歩き出した。

後ろから眺めてて、思ったけど、なんか歩き方もかっこいい。
これで、犬じゃなかったら、モテただろうなぁって思った。

第１６話　番号交換しちゃいました。（後書き）

学園ものに変わっていきそうな予感が・・・
書いていると、考えていた展開よりも、違う展開になっていきます。
風花もシバも友達もそうなんですけど、小説の中で生きているって感じがします。
書き手は、もしかしたら、この世界を支配しているのではなく、書かされているのかもしれませんね。

では、この調子で頑張っていきま～す！

第17話　フルーツバイキングに出陣〜！

「おっはよ〜、ふう」
「ちゃんと起きてんじゃん。遅刻するかと思ったよ」
琴実（ことみ）と美希（みき）が駅前のちっちゃなバスロータリーでお出迎え。
「もうちょっと、寝たかったのにさ。起こされちゃったんだよ」
って、肩を落として、私は二人に挨拶した。

「久しぶりだね〜」って言ったら、「昨日、会ったじゃん」って言われた。
ほんとに、昨日会ったのに、全然会ってなかったみたい。

「それよりさぁ、ふう。昨日、電話たくさんしたのにさ、全然繋がんなかったんだけど、どこ行ってたの？」
私達、3人が歩きながら、琴実が聞いてきた。

なんて答えようかな。
ありのまま話出来ないから、「高校の裏にさ、星がとってもキレイに見える場所見つけたんだ」って。

琴実は、「昨日、寒かったじゃん。わざわざ坂登って高校まで行くの？」って、目を細めて聞いてきた。
「あはは、めんどくさがりの私が珍しいよねぇ〜」
と、頭をかきながら苦笑い。

「ふ〜ん」と、琴実は私の目を覗いてくる。
悪いことしてないんだけど・・・なんか後ろめたいから、目をそらしちゃった。

「まぁ、いいけどさぁ。なんか、ふう、変わったよね」って、琴実はその話をするのをやめた。
ほっ、と一安心。

ところで話変わるけど、私達3人組みは、いつも並んで歩くときの順番がどうしてか決まってるんだ。
琴実が左、私が真ん中、美希が右。
琴実はちっちゃくてかわいいお人形さんみたいで、私は中途半端で、美希は背が高くてモデルさんみたいな美人。
だから、大中小の3人組って感じ。
一人ずつだと、そんなに目立たないんだけど、3人集まると結構目立っちゃう。

そんなに、フルーツバイキングのお店は、遠くなかった。
駅から、ちょっと歩いてすぐ。

「結構、人多いねぇ」
と、私は、店の前でつぶやく。
今風かどうか分かんないんだけど、キレイでおいしそうな感じ。って、そんなんじゃあ伝わんないよね。
でも、そんな感じのお店なんだ。
なんか、パイを焼くいい匂いがするぅ〜。

「ここらでは、珍しいからね。フルーツバイキング」
美希が、腕を組みながら、お店をにらみつけるように言った。

「みんな、お腹空いてる〜」、琴実が左手を挙げて、号令を出す。
「朝ご飯食べてないから、ペコペコだよぅ〜」と、お腹に両手を当てる私。
「気合十分っ！」って言ってから、鉢巻を締める仕草をする美希。

なんか、戦国時代みたいに「おおぅ～」って3人で言ってから、いざ出陣！

中は、女の人、女の人、女の人～って感じで、混んでいた。
私達は、なんとか空いていたテーブルに座って、説明を聞いて・・・
説明された内容は、食べ放題が９０分なんだってさ。ほかにも色々言ってたけど、全然頭に入んない・・・早速、取りに行くことに。

「すごいじゃん、美希。ケーキもあるし、パイとかもあるよぉ～」
私は、甘いものが大好き。
色々な果物（くだもの）が入ったマチェドニアとか、
マンゴーのジュレとか、
フルーツの王様、ドリアンのショートケーキなんか、斬新（ざんしん）かもっ！！
あとね、パパイヤ入りのマカロンとかって、どんな味がするんだろう～？

無理やりな感じだけど、全部果物が入ったスイーツってすご～いって思いながら、
私は無我夢中（むがむちゅう）で、そこいらにあるものを取っていた。

さぁ、幸せの時ですょ～。
食べますよぉ～。
パクリって、「おいし～」って、頬が落ちますぅ～！

ああ、なんか幸せ～。嫌なことを全て忘れてしまう感じ。
生きてるってたまにイイコトもあるもんさ。

バクバク食べてる私を見て、美希は、「おいし～よねぇ」って。
私はドリアンのショートケーキを食べながら、うんうんと、頷（うなず）いてた。

ってか、ドリアンのショートケーキはちょっと・・・
生クリームの甘さとドリアンの生臭さが微妙に絡(から)み合(あ)って、私には
よく分かんない味だ。
「ってか、ふう。全然、話聞いてないよね？」
って、琴実から言われて、現実に引き戻された・・・

琴実は、不満なんだって。
どうしてかと言うと、背がちっちゃくてデザート取れないやつもあ
るんだってさ。
「ごめんね、琴実」
って、謝(あやま)りながら、でもスイーツが、私を待ってるから・・・って、
思って、全然、話、頭に入んなかった。

第１７話　フルーツバイキングに出陣～！（後書き）

フルーツバイキングっていう店、行ってみたい～！というノリで作りました。
なんでもかんでも、フルーツが入っているスイーツってのも売れるのではないかと。ドライフルーツを使ったスイーツでもいいですよね。
そんなお店作ってくんないかなぁ・・・
けど、風花がそんなに甘いものが好きだとは知らなかった・・・

ちなみに、３人組の身長は、琴実が１５０ｃｍ、風花は１６２ｃｍ、美希は１７３ｃｍの裏設定です。

第１８話　参上！茶髪ピアス男。

「満足、満足っ」
と、私は上機嫌でお店を出た。
琴実も美希も、「お腹痛いっ～」って言ってる。

聞いてっ！私は、なんと９０分間、フルに食べたもんね。
店員さんに、呼ばれるまで、食べ続けたょ～。
すごくない？？

すると、突然、私の携帯が鳴った。
あ、携帯の着信音は、カエラちゃんの曲なのだ。

えっと、誰からだろう、と思いながら画面を見たら、
・・・あ、シバだ！
しまった。メールすんの忘れた・・・
つい、フルーツに頭を取られちゃった。

「あ、ごめんね」
私は、携帯を出た瞬間に謝った。
「こちらこそ、ごめん。メールが来なかったから、電話してしまって・・・」
「いいょ、いいよ～。今、店出たとこだからさ」
なんか、シバって優しい声だよなぁ～って思う。甘い声なのかな？
「僕、携帯でメールを打ったことなくて・・・」
「そりゃそーじゃん、犬が携帯のメール打ってたら、おかしいって」
「・・・あはは、そうだよね～」
「ごめんね。こっちから、メール打つから、返信してみてよ。携帯の番号のとこに文字がふってあるから、多分、若いし、すぐ出来る

ょ」
若いとか、そーゆう問題ぢゃないかもしんないけど・・・
ってか、文字は読めるのかな??ちょっと、不安・・・
「分かった。頑張ってみるよ」
「うん、頑張ってね。じゃあね～」

それで、私は、電話を切った後に、いそいそとメールを打つ。
なんて、メールしよ?
まぁ、適当に、簡単なメールの方がいいよね。デコメとかしたら分かんないか。
って、考えながら、携帯とにらめっこ。

「あの～、ふう?」
「え、どうしたの」
私は、携帯を打ちながら、琴実の方に振(ふ)り返った。
「今から、どうすんの?とりあえず、食べたし、解散する?」
「う～ん、どうしようかなぁ・・・?」
「私は、部活があるから、そっちに行かなくちゃ」と、美希が言う。

「じゃあ、解散ってコトで」
と、私は、携帯を持ちながら、決めた。
「うん、分かった。じゃあ、私もバイト先にでも行こ～」
「うん、じゃあね～。バイバ～イ」
と、いつも通りあっさりと別れる3人組。
仲良しが続く秘訣(ひけつ)は、この「あっさり」にある、と私は思ってる。

メール送信!ピッ!!よしよし。
駅前で、みんなと別れて、私は歩きながら、家に帰る。
どんなメールが返ってくるんだろ、なんかちょっと楽しみ。

とか、思いながら、歩いていたら、
「ごめん」
って言う男の人の声が、後ろから聞こえる。
聞き覚えない声だから、私はスタスタと歩いた。

「ごめんって、聞こえてる？」
どこのどいつだ、こんな慣れ慣れしい奴は！
と、思って、後ろを振り返ってみた。

そこには、茶髪でピアスした男の人が立っていた。
「私に、何か用ですか？」と、ちょっと身構える。
「いやぁ、ごめん、ごめん。道分かんなくなっちゃってさ。ちょっと教えてくんない？」
「道？どこまで行きたいんですか？」
「確か、両淵山中学に行きたいんだけどさ」
あ、私の行ってた中学。
「それでしたら、この道を真っ直ぐ行って5個目の信号を左に行って、3個目の信号を右に行って、2個目の信号を左に行ったら着きます」
「・・・さっぱり分かんないだけど」
「・・・とりあえず、行ったら分かります」
「冷たいなぁ。そこまで連れてってくんない？」
「ええっ～」
「頼むよ」
って、茶髪ピアス男は両手を合わせて、頭を下げた。
謝られると弱い、私。
「・・・分かりました。じゃあ、そこまで」
「ありがと。助かったよ」
見るからに遊び人風の男の人は、苦手～。

だけど、人助けと思って、あくまでも人助け。
私は茶髪ピアス男と距離を離(はな)して歩いてく。

「あ、オレの名前は、春斗(はると)っていうんだ、よろしくな」
いや、別に聞きたくないんだけど・・・
「君の名前は？」
「それって言う意味あるんですか？」私は、前を向きながら、そっけなく答える。
「言う意味は無いけど、オレが知りたいから。名前ぐらい、いいじゃん」
「・・・廷上(ていじょう)です」
「苗字じゃなくて、名前、名前」
はぁ、めんどくさい。
「・・・風花(ふうか)です」
「・・・風花？どっかで聞いたことある名前だなぁ」
茶髪ピアス男、春斗さんは、上を向いて考えながら歩く。
風花って珍しい名前だと思うんだけど・・・
「あ、そうだった。ふうって呼ばれてるんだよね？」
「どうして、知ってるんですか？」
一回も会ったことなんて無いんですけど、むしろ関わりたくないって感じなんですけど。
「そっか、そっか。ふうちゃんは、この子なのか。まぁ、何かの縁(えん)だ。仲良くしようぜ」
「結構(けっこう)です」
私は、即答(そくとう)した。

第１８話　参上！茶髪ピアス男。（後書き）

第1部が終わったので（シバが人間になるまで）、やっと登場人物が出せます（嬉）
ここから、たくさんでもないですが、サブキャラクターを出していけたらなぁって思います。

春斗は、これから重要な役を担（にな）う・・・はずです（笑）
私の思惑通りに書けたらですけど。

第19話　空茜色（そらあかねいろ）

「はいっ、着きましたよ」
私は、両淵山中学を人差し指で示しながら、茶髪ピアス男と目的地に到着した。

「おっ、これか！」
茶髪ピアス男の春斗さんは、モンクレールのダウンジャケットに両手をつっこみながら、笑いながら叫んだ。
っていうか、茶髪ピアス男は、常に声がでかい。

「じゃあ、私はこれで」
と、言って踵を返す、私。
「おっ、サンキューな」
後ろから茶髪ピアス男の声が聞こえるが、そのまま真っ直ぐ進む。
歩みは止めない。
「また、どっかで会おうぜぇ～」
ってか、声でかいんだけど・・・

はぁ、変なのにつかまったわぁ、なんか疲れた・・・
でも、両中なんか来て、何するんだろ、あの人。
駄目だぁ・・・気になるよぉ。
っということで、電信柱の影に隠れて、ちょっと観察。

ヘムヘム、もとい、ふむふむ。
あっ、紙を見てる。
辺りを見回してる～。
あやしぃ～。あっ、とんちんかんでは無いのでお間違えなく、って

か古い？どうでもいいけど、私が産まれて来た時には、とっくに連載が終了してるんだよねぇ～。
そうそう、アニメでは同一時間の前番組の奇面組で歌っていたうしろ髪ひかれ隊さんが、前半主題歌を歌っていたんだよね。ほんっとに、どうでもいいけど。

あれ、紙を見ながら、中学校を通り過ぎてく。
っていうことは、両中(ダブチュー)が目的地ぢゃないってことだよね。
う～ん・・・このまま、推理(すいり)小説になっちゃうのか？

よしっ！分かった！って、加藤武さんのように言えたらいいんだけど・・・さっぱり、分かんない。
いちおー、金田一耕助さんのように、頭を掻(か)いてみたけど、答えは見つかんない。
ちなみに金田一シリーズは、好きなんです。
金田一さんは、かっこ良くてステキなんだけど、ほんとに頭(か)掻いてふけがたくさん落ちたら、ひくかもっ・・・
でも、あの着物姿が、いいよねぇ～。

そんなこんなで、一人芝居してたら、気付いたらいなくなっちゃった。
あはは・・・
何だったんだろう？

ふと、時計を確認しようとして、シバからメールが来ていたのに気付いた。
また、返事してないんだけど。いいのこんな主人公(ヒロイン)で！

私って、携帯、あんま好きじゃない、って言い訳ですけどぉ・・・
携帯出来てさ、便利なったって言うか、逆に不便じゃない？

だってね、携帯っていつでもどこでも連絡取れるじゃん。
なんか、縛(しば)られてるって感じがして、ヤなんだけど、でも、持っちゃうんだよねぇ～。
携帯無いと、生活出来ないって感じで。やばくない、この感覚(かんかく)。
って、一人で、言い訳してるけど、メールが来ているので、とりあえず読んでみよ。

「こんにちは」

・・・。
それしかメール来てない。
ちょっと、おもしろいんですけど。
でも、何を伝えたかったのさ、シバは。

分かんないから、とりあえず家帰ろ。
なんか、最近、私の周(まわ)りって変だ。
あっ、今日は、帰りにスーパー寄らなきゃ。
昨日、遅かったからねぇ・・・今日は、ちゃんと晩御飯(ばんごはん)買わなくちゃ。

って、スキップしながら、歩いていたら、空が茜色(あかねいろ)に染(そ)まっていましたとサ。

第１９話　空茜色（そらあかねいろ）（後書き）

脱線（だっせん）しまくりの話でした。なんか、書いてるとつい、脱線したくなって・・・すみません。

ちなみに、両淵山中学（りょうぶちやま）の事を、風花達は、両中（ダブチュー）って呼んでます。

両＝W（ダブル）だからだそうです。

ところで、ちゃんと本編書かないといけませんね・・・（笑）

第２０話　地獄っ！テストの返却日！

「今日はテストを返すぞ！」
安部先生は、教壇に立つなり、私達に不安を授けていただいた。
教室がざわざわとどよめく中、時間は止まることなく、生徒の名前を挙げられる。
今日は、テストの答案を返してもらう日なんです。
もちろん、私にとっては、地獄の始まり。さながら閻魔様の審判の日でございます。

「安藤！」
「はい」
って、具合に、同級生が生贄にされる中、私は、空を見ながら、祈った。
私は、悪いことなどしていません。だから、生贄だけは、ご容赦ください、と。
補習があってもなくてもどうでもいい、と、高らかに宣言した私だけど、
さすがに、貴重な休みが勉強に消えていく、という無駄な時間は、出来れば避けたい思いなんですぅ～。
「京極」
「はい」
ああ、美希が呼ばれた。
彼女にとって、この儀式は、地獄でも何でもなく、ただの日常の一

コマに過ぎない・・・
私は、テストを受け取った後、後ろに振り向いてウィンクした悪友の顔を、生涯忘れることはないだろう。

「篠山」
「はぁい」
そういや、琴実は、私とは違うって言ってたけど、ちゃんと勉強したのかなぁ。
はぁ・・・こういう時だけ、今度のテスト前ぐらいは、勉強しよ！って思う。

もうすぐ私の番だ。
ドキドキ感をほぐす為に、空を見て、祈り続ける私。
今日の雲は、とっても早く、東へと抜けていく。

「田中」
「はい」
「武田」
「うっす」
「橘」
「あいよ～」
「津崎」
「へい！」
ああ、終にタ行が終わりに近づいた。
次だ、次は私。呼ばないで、私の名前！

「那須」
「あ～い」
「中西」

「おう！」

あれ？

あれれ？？

タ行の最後は、私、廷上なんですけど・・・

どうして、ナ行に行くの？

どうでもいいけど、中西、那須の順番だと思うけど、いつも先生は、那須中西って呼ぶ。

そっか、ナ行に行った理由が分かりました！

つまり、私の願いは、天に届いて、そして、天女様のはからいで私の生贄の儀式は、免れたってコト～？？

ありがとう、天女様！ありがとう！！

感謝の思いは銀河鉄道９９９（スリーナイン）号に乗せ、はるか上空へと走っていく。

遠く異国の地にいるメーテル似の天女様まで私の思いは伝わったかしら？

私の大好きな車掌さん。お願い！ちゃんとこの想いを届けてください。

と、私が幸せな妄想をしている最中、現実という代物は非常に残酷なやり口で、私を更なる儀式に立たせた。

「本田！廷上！こっちに来い！」

「はぁ！」

と、銀色に染め上げた少し短めの髪を、さらにハードなジェルで地球の重力に反発させ、なぜか鼻にピアスを装飾している・・・前世は牛だった・・・見るからに不良青年、本田君は、声を荒げて、納

得いかないことを先生にアピールしている。
銀短髪鼻ピアとどうして私が一緒に呼ばれるわけ～??
私も納得がいきませんっ!!

「お前ら、早く来い」

しかし、追い討ちをかけられた・・・
私は、しぶしぶながら、先生というこの限られた空間の中だけで権力を振りかざす横暴な輩に、真っ向から勝負を挑める根性も気力も無く、権威に屈した犬の如き従順さを権力者に見せ付けながら、教壇まで速やかに、かつ、おしとやかに、歩いた。

「お前達、なぜ最後に呼ばれたか、分かるか?」
「さぁ～?分かんないです」
「んなもん、分かる訳ねーだろ!」
私は、とぼけて、銀短髪鼻ピアの猛牛こと、本田君は、ガンを飛ばして、先生に答えた。

「なんだ、お前達のこのテストの内容は?廷上!どうして、この連立方程式が成り立つのか?という問いに対する答え、なんて書いた?」
「・・・すみません。覚えてないです・・・」
「空が青いから。・・・って、お前、テストをバカにしてるのかぁ～!!」
先生の怒号が、教室中に鳴り響いた。その後、同級生達が笑声の多重奏をかなでた。

はずい～!
私は、真っ赤になって肩をちぢこめた。

「本田！お前は、自分の名前すら書けないのか？テストの答案用紙に、ひらがなで、名前だけ書いて白紙で提出するなぁ～！！」
「わかんねぇもんは、わかんねぇんだよ！」
本田君は、そう叫ぶなり、いきなり先生のネクタイを握り締めて、思いっきり引っ張った。
私は今までにない機敏さで、先生を避け、先生は、教壇から転げ落とされて、床と不本意なキスをした。

教室内は、静寂に包まれた。

最後に、一言。
「お前ら、明日から毎日補習だ～」
という、悲痛な叫び声だけが、教室にこだました。

第２０話　地獄っ！テストの返却日！（後書き）

この話は、半分実話でした。
私が中学や高校の頃、実際に、テストで「この方程式の答えは、どうして成り立つのでしょうか？」という問いに、「空が青いから・・・」と答え、さらに、「この答えを求めなさい」という問いに対しては、「人生において他人に答えを求めること自体が馬鹿げている行為だ」と書き、私の場合は両親共々職員室へと呼ばれました（笑）答案用紙に、ひらがなで名前を書き、白紙で提出したこともありました。よって、私も補習を受け、なんとか卒業を果たしたのでございます。思えば懐かしい、若さゆえの行動であったことを、この話を書きながら、感慨深く思い返している所存でございます。

そんな一風変わった作品及び作者ではございますが、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

第21話　白いバイクの夢　その1

「でさぁ・・・補習受けるコトになっちゃったんだ」
「・・・勉強しないからだよ」
「そうなんだけどさぁ・・・自業自得ってやつ？　はぁ、あとね、どうしてか分かんないんだけど、銀短髪鼻ピア男と一緒に受けることになっちゃって、ありえなくない？」
「何それ？　ギンタンパツハナピア・・・？」
「しかもさ、猛牛なんだよ」
「え、人間？　まさか、動物と一緒に、補習受けるわけじゃないよね、ムツゴロウ王国じゃあるまいし・・・」
「そーゆー、不良っていうのがいるのよ、これが」

って、私はシバと携帯で話してる。
私達の関係は、友達。それ以上には、もちろんながら、発展してナイ。

毎日ってわけじゃないけど、楽しいこととか、嫌なこととかあったら、シバに話しちゃう。
なぜだか、シバには何だって言えるんだ。何でも受け止めてくれるから、彼は。
「補習、頑張って。落第だけはしないでよ」
「はぁ～い。ありがと、シバ。じゃあね～、オヤスミ～っ」
私は携帯を閉じて、ベッドの上に寝転がる。

はぁ、ヤだな～。せっかくの休みなのにサ。勉強なんて・・・。
でも、安部先生に、「補習、受けないと落第だよ。落第！その意味

分かるよな」って。
キョ～ハクじゃんかよっ！こんないたいけな少女捕まえて、キョ～ハクしてるって、ほんっと信じらんないっ。

・・・でも、現実は、行かなくちゃならないから、今日はもー寝よ。

次の日、私は坂を登って、学校に向かう。
誰もいない恐怖坂。普段は、学生が多くて、うざいんだけど、辺り見回してもネコの子一匹いやしないってのも、寂しい感じがする。

そうこう一人の時間を楽しんで？　いたら、後ろからバイクのエンジン音が聞こえてきた。
運動神経が無いことを自負している私だから、早めに避けた方が、無難だよね。
だから、道路の端に寄ったけれど、それが駄目だった。

バイクは、私の横をすり抜けようとして・・・ドカーンっ！

ああ、景色がスローモーションに見えるよ、お母さん。

「イったぁ～い」

後ろからバイクに衝突されて、道に転がった、達磨さんのよーに。
加害者は誰よ、って、転がってる白いバイクの運転者を探した。

運転者は、白いバイクから１０ｍほど、向こう側に転がっているのを発見した。
飛ばされたようだった。

そして、ムクって起き出した。

白いフルフェイスのヘルメットをしているから顔は、分かんないけど、私のとこの制服着てる。

「ぶつかっておいて、謝りの1つも無い訳っ？　早くメット取りなさいよっ！！」

って、私のアドレナリンは、MAXを超えていた。

そして、ヘルメットを取った。

あのツンツンの銀色の髪と牛を彷彿させるピアス・・

白いバイクの主は、銀短髪鼻ピアの猛牛こと、本田君であった。

ヤバくない？

ああ・・・私、ボコボコにされる・・・

私は、本田君をただ呆然と見上げていた。

第21話　白いバイクの夢　その1（後書き）

お仕事の都合で、ちょっと更新が遅れました。

ちなみに、本田君の名前は、速人（はやと）ではナイです。亮太（りょうた）って言いますので、お間違えなく～。（って、誰が間違えるのさ！）

このお話、少し長いので2回に分けました。

明日も更新頑張りますっ！

第22話　白いバイクの夢　その2

「すまん、大丈夫か？」

身構えて、座り込む私に、
銀短髪鼻ピアの本田君は、開口一番、そう言った。

「え？　うん、大丈夫だけど・・・」

本田君の左肩と左足から血を流しているのが、見えた。
私は、右膝を少し擦りむいただけ・・・。

「私は全然平気だけど、本田君の方がひどい怪我じゃん」
私は、立ち上がって、そう言い直した。

「オレは、いつもバイクに乗ってっから、こんなもん怪我に入んねーよ」
って、あきらか本田君は強がっているように思えた。

「とりあえずさ。早く保健室に行かなきゃ」
私は、学校を指した。

そう私が言うなり、本田君は転がっていた白いバイクを起こして、
「いけるな」と確認した後、私にヘルメットを渡してきた。

「後ろ、乗れよ。早く、お前、消毒しねーと、そっからばい菌が入るぜ」
ヘルメットを渡された私は、本田君の怪我が心配だから、「うん」
って言って、後部座席にまたがった。

だいぶ、怖いんだけど。本田君は、走り屋とかゆーやつじゃないのかな？

私の不安は、空を切った。
初めてバイクの後ろに乗ったんだけど、本田君の運転は上手だった。
全然、怖くない。
それより、この恐怖坂を足で登らないコトって楽なんだなぁ・・・
って、関係無いこと考えてた。

学校に着くなり、私達は保健室に向かった。
もちろん、私は消毒だけだったけど、本田君は打撲、幸い骨には異常なかったんだけど、その日の補習は延期になっちゃった。

二人っきりの保健室。
窓から差し込む日差しが、暖かさを運んでくれた。

「本田君ってさ、いつもバイクで学校きてるの？」
私は、白い椅子に座りながら、ベッドで横たわっている本田君に話かけた。

「ああ」
「あのバイク、真っ白だよね」
「ああ」
「昔から、バイク好きなんだ」
「ああ」
「・・・そぅなんだぁ。ふ～ん」

彼は、壁を見ながら、「ああ」ってしか、答えない。
話しかけてる私が、バカみたい・・・。

だから、無言。

私は、窓の格子(こうし)に手をかけて、外を見上げる。

今日は、ポカポカ。まん丸太陽が、笑って出てる。
雲に邪魔(じゃま)されることもなくて、自分の役目を果たしてるぞ！、ヤッホーって、言ってるみたい。

「オレ、白バイの警官になりたいんだ」
いきなり、彼は語りはじめた。
「だから、白いんだ。オレのバイク」

本田君って、中学ん時から、悪いことばっかしてて、みんな怖がってた。
でも、今の本田君は、そんな感じしない。
どうして、警察官になりたいんだろう？

「まぁ、オレみたいな奴(やつ)が、なれるわけねーけどよ」
「そんなコトないんじゃない？　あきらめたら、終わりじゃん」
「・・・別に、あきらめてねーけどよ」
「じゃあ、絶対になる、って言ってよ」
「ああ、ぜってぇ、なってんやるよ」
「だね。そのキモチだよっ」
何、私、励ましてるの？　でも、今の彼は、いつもの彼ぢゃなくて、ただの夢見る少年って感じだったから。だからかな。

扉が開いた。
白衣(はくい)に包まれた保健室(ほけんしつ)の先生だ。
黒い長髪の髪の毛と、いくら食べても変わらないプロポーションで、すごく美人なんだけど・・・

「おぬし達、もう大丈夫じゃ。悪霊は払われた」
・・・なんか、言葉がおかしいんだよね。

「でも、サクラ先生。本田君、病院行かなくても大丈夫なんですか？・・・それに、悪霊って？」
「男の子は、そんなに弱くないわよ。さぁさぁ、邪魔だから、おぬし達、早く出て行きなさい」

って、私達は、保健室を追い出された。本当、無茶苦茶な学校。

本田君は、バイクに乗りながら、「すまねーな。ケガさせちまって・・・」
「ううん、いいょ。いつものコトだし・・・」
「じゃあな」って、言ってそのまま白いバイクで行っちゃった。

その次の日から、私達は、二人だけで補習を受けた。
本田君も、なぜか真面目に学校に来てた。・・・あんまり、会話してないけど。
でも、担任の安部先生は、５日の間に、４日間は、カバンの中身を間違えて、ポテトチップスしか入ってなかったから、ほとんど補習になんない日が続いた。

で、気付いたら、新学期に突入していた。

第２２話　白いバイクの夢　その２（後書き）

あ〜、１週間も更新してなかった・・・すみません。
ちなみに、展開も早くしないと、作品終わらないんですケド・・・
目標は、８万文字〜１０万文字。単行本一冊ぐらいで、と考えております。

どうでもいいですけど、錯乱坊（チェリー）、久しぶりに見たいなぁ・・・

第２３話　小さな幸せ

「元気ないね、どうしたの？」
「だってさぁ、ずっとホシューだったんだよ。で、気付いたら、もう学校が始まっちゃうんだょ～・・・」

ジャージ姿、私の普段のパジャマ姿、で、ベッドの上に寝転がった。窓の外を、見上げたけど、月は雲で隠れて見えなかった。

「僕は楽しいんだけどね」
「シバは、何が楽しいのさぁ～。毎日、フツーで楽しくないっていうか。こうやって、勝手に時間が流れてくんだよね」
「そうだね。時間は勝手に流れていくね。それが、嬉しいんだけど・・・」
「いいよね、シバは。何にだって、楽しみを見つけれるんだから」
「いいじゃん。楽しいほうが」
「そうだけどさぁ・・・ホシューで私の青春を取られてるのが、嫌なの」
「僕は、毎日を過ごせるだけで、幸せだよ」
「シバはいいよね～、うらやましいよっ」
「そうだね。他人から見たら、何の変哲も無い生活なんだろうけど、そんな中にも小さな幸せがあるんだよ。僕はそれを大切にしたいんだ」
「ふ～ん、小さな幸せかぁ・・・」

私は、頭上に枕を放り投げて、体を反面した。

「そう思えたら、幸せだよね。でも、ちっちゃい幸せって、埋もれてしまっててて、私には分かんないよ」

「すぐそうやって、あきらめるんだね」
「駄目？　いいじゃん、別に。おもしろいことなんか何も無いんだから」
「そうかなぁ？　廷上(ていじょう)さんは、幸せな生活を送っていると思うよ」
「どこが？」
「だって、すごい元気じゃん。転んでも起きるし。」
「それだけ？　ただ、頭悪いだけじゃん」

ふくれっ面(つら)した。・・・電話で話(はなし)してるから、シバには見えないけど。

「まぁ、元気なことが幸せってことだよ。何でも出来るじゃないか」
「何にも出来ないの！」

どうして、こんなにムキになっちゃうんだろう、私って。

「学校、行けるだけでも、いいじゃないか」
「えぇ～。そーゆーものなの～？」
「・・・と、僕は思うけどね」

犬だから、学校に行けないんだよね。
私って、犬に幸せを説(と)かれてるんだよね。
なんか、変な感じ。

「明日、学校だから寝るね」
と、私は、話を打ち切った。

犬は、幸せだよねぇ～。
食べて、寝て、動きたい時に動いて、ホワイトプランをおススメして・・・

でも、私は毎日こうやって、平凡に生きてるってのが、嫌なような、それでいいような、よく分かんない。
ああっ、もぅいいや～。考えるの、だるい。

「風花～」
と、お母さんの呼ぶ声が聞こえる。

「なに～？」
私は、ベッドから微動だにせず、声だけで応える。

「明日、お母さんね。仕事早いから、自分で起きて学校に行ってね」
ドアを開いて、お母さんは私に言った。
「はぁ～い」
「どうして、こんなとこに枕があるの？」
「犬の代わりに、投げちゃった」
「何を訳の分かんないこと言ってるの」
お母さんは、枕を拾い上げて、私の枕元にそっと置いた。

「最近、長電話してるけど、携帯代だってバカにならないのよ」
ああ、嫌だ、嫌だ。電話ぐらいしてもいいのに。

私は、返事をせずに、ベッドに顔をうずめて、寝るフリをした。

「もうっ、分かってるのかしら、この子」
って、捨て台詞を残しながら、私の部屋から出て行った。

お母さんだって、好きな仕事ばっかしてんじゃない。
どうして、電話ぐらいで怒られなきゃなんないのさ。
そんなに、仕事がおもしろいんだったら、仕事場で住んだらいいじゃん。

私にも、何かやりたいってことが見つかればいいんだけどなぁ・・・
と、思ってても、結局、なぁんにもしないんだけどね。

久しぶりだなぁ、琴実(ことみ)と美希(みき)に会うの。
そういうのが、小さな幸せ、ってことなのかなぁ？
でも、いつでも会えるから、幸せってコトじゃないのかも・・・

そう、思いながら、私は眠りに落ちていった。

第２３話　小さな幸せ（後書き）

小さな幸せって、すごく小さくて、分かりにくいんですけど、そういう幸せを大切にして、みんなにお裾分(すそわ)けできたら、いいなぁって思います。

次回は、「ええっ、新入生！？」です。お楽しみに～。

第２４話　ええっ、転入生！？　その１

「ふわぁ～」
私は、目覚めると、大きく伸びをした。
「・・・そっか、今日、お母さん仕事だったよね」
眠たい目をこすりながら、私はリビングまで歩く。
「ちゃんと、朝ご飯の用意してくれてたんだ」
テーブルの上に置かれた、クロワッサンとスクランブルエッグに、オレンジジュース。
今日もタカアンドトシ的な朝食。
ここは、日本だから、白いご飯とお味噌汁をたまには食べたいよね。
私は、日本の心を取り戻そうと思って、オレンジジュースの代わりに、愛媛のポンジュースをグラスに注ぐ。
「やっぱり、オレンジぢゃなくて、みかんだよっ。みかん」
腰に左手をあてながら、一気に飲み干す。
「ぷはぁ～」って、おじさんみたいに・・・
そうして、私はテレビをつける・・・と、８時３０分??
やばい、まずい、遅刻じゃん！
バタン！
「どうして、起こしてくんないのさぁ～」

って、玄関のドアを閉めながら、琴実(ことみ)に電話する。
間に合わないのは分かっているけど、私なりの全速力(ぜんそくりょく)で走り出す。

「え？ちゃんとメールしたじゃん」
「うそぉ～？？来てなかったよ」
「マナーとかにしてたんじゃないの？」
「あ、そうかも」
「ふうには悪いけど、もう学校着いちゃったよ」
「今日、始業式だよね～。遅れるとやばい？」
「うん、やばい、やばい。赤点取って、補習(ほしゅう)受けて、しかも遅刻魔(ちこくま)って・・・」
「やろうと思って、やってるんぢゃないもんっ！」

私は、携帯で電話をしながら、駅前を越えて、静山坂(しずやまざか)を走って登る。
最近、どうしてこんなに走るのが多いんだろ？
特にこの恐怖坂(しずやまざか)は、私に恨(うら)みでも持ってんのかな？

私は、坂を登り切って、教室まで走る。
疲れと、だるさで、足がパンパンになってんのが分かる。
私の脳は、全く判断力をきかせず、そのまま教室のドアを開けた。

ガラッ！

みんなの視線(しせん)が私に集中する。

すぐに、私は先生に言った。
「すみません、遅刻しまし・・・た？」

あれ？？教壇に二人？

・・・見覚えがある顔なんだけど。

「廷上っ！また遅刻か！？今日は、転入生も来てるというのに。早く席に着きなさい」

転入生？？

・・・あっ！あの、長身の優男は、シバじゃん！！

「えっ？どうして・・・？」

と、私はその場で固まってしまった。

「どうしても、こうしてもない！席に着けという日本語が分からなかったのか？」

「あ、はい」

みんなの笑い声の中、先生と転入生の前を、そそくさと歩き、私は窓側の自分の席に座った。

私は、目が点になって、転入生を見つめていた。

だって、すっごく似てるけど、シバって犬だし、高校なんかに転入なんかできないと思うんだけど。

戸籍も住民票も無いのに・・・

「えぇ～、コホン！」

私の思考は、阿部先生は、わざとらしい咳払いで、中断させられた。

「この度、我が静山丘高校の一員として、彼は転入してきた。これからみんなと一緒に勉強する同志を紹介する」

先生は、シバに目配せをして、挨拶を促した。

「あっ、はい。えっと、楠木(くすのき)です。よろしくお願いします」
その間、先生は、黒板に向かって大きく、文字を書いた。
「楠木　梓羽」と。

よ、読めぬぃ・・・
シバかどうか分かんないけど・・・

先生は、ぶつぶつと「難しい字だな」と言いながら、書き終えて生徒の方に向いた。
「楠木(くすのき)　梓羽(シバ)と読む。これからみんなの・・・」

「あ〜、やっぱり〜!!シバじゃん!!」

と、席を立って、シバに指さした。
「どうして、ここにいるのよ?」

教室中、ざわざわと・・・
あっ、しまった・・・やっちゃった。

「ん、廷上(ていじょう)、知り合いか?」
「あ、えぇと・・・」
って、私の頭の中は、空っぽです。

「廷上(ていじょう)さんは、実家の近くで、ジョギングしてる時に知り合ったんです」
「そうか?廷上(ていじょう)がジョギングなんかするか?」
「あ、僕(ぼく)がジョギングしている時に、廷上(ていじょう)さんが、学校に向かっている途中で」
「さすが、ロンドン帰りの男は違うなぁ〜。朝からジョギングか?」

「あはは、そうなんです。僕、走るのが好きなので」
と、シバと先生のやり取りを、ぼっーと見ていた私。

「じゃあ、席は廷上の横でいいな？」
と、勝手に決め付ける先生。

横の男子が抗議の声をあげる。

「ええっ！オレはどこ行くんだよ、先生」
「後ろに下がったらいいじゃないか」
「横暴だ。コンチキショー」
と、昔々の台詞を残しながら、後ろの席に移った。

「そういや、廷上。いつまで、立ってる気だ？」
あっ、立ったままだった私。

ってか、どうなるの？この展開？？

第２４話　ええっ、転入生！？　その１（後書き）

おっと、もう3月でしたね。少しずつ暖かくなっていきますね。
ここで、お詫びをひとつ。
前回、あとがきで、「次回はええっ！新入生！！」って書いたんですけど、転入生の間違いでした。
年度途中で新入生っておかしいじゃん、って自分でツッコミ入れてました（笑）

次回は、なぁんも考えていませんが（やっと書き終えたばかりなので）、作者自身もこの後の展開はどうなるんだろう？って思ってます。
ちょっと、更新が遅くなるかもです。なんとか1週間以内ＵＰを目指して頑張ります。

遅くなりましたが、２，０００アクセス突破しました。
こんなお話を読んでくれている人に感謝の思いでいっぱいでございます。
では、今後ともよろしくお願いします。

第２５話　ええっ、転入生！？　その２

「どうして、ここにいるのよ？」
って、右隣に座った転入生に小声で話し掛ける。

「え、いたら駄目かな？」
「駄目とかぢゃなくて、どうやってここに入学したのさぁ？」
「それは、まぁ、色々と・・・。話すと長いから割愛するよ」
「何？色々って？・・・それに、割愛？？」
なんだか、よく分かんないよぉ。むづかしい漢字を使うなっ！

「今から始業式をはじめるから、静かにするように」
と、先生は教卓に両手をついて、私に注意するように言った。
すると、キーンコーンカーンコーンと、チャイムが鳴った。
スピーカーから声が流れてきた。

「みなさん、おはようございます。今から始業式を始めます」
澄み切った放送部の声が教室を包んだ。
「では、校長先生の挨拶です」

し～んと静まり返る教室。

「ゴホン。これマイク入っとるのかね？」
校長先生の声に、小さく放送部が「はい、もう流れてますよ」と、
答える。

辺りから、「なんだ、なんだ」とざわつき出す。

すると、いきなり、ものすっごい大きな声で、校長先生は言った。
「わしが静山高校校長、松尾すすきである！」、と。

再び、し～んと静まり返る教室。

っていうか、パクリぢゃないんですかっ？
高校の名前も、静山丘なんですけど・・・

「・・・以上、校長先生の挨拶でした。では、今学期も頑張りましょう」
と、すかさず、放送部の爽やかな声が間に入り、始業式は終わった。
某提督の3秒スピーチと同じくらい早いんですけど・・・

「・・・変わってるとこだね？」
と、シバは、私に話し掛けた。
はぁ・・・と、ため息をついて、彼に答えた。

そんなこんなで、始業式は終わったんだけど、琴実と美希の質問攻めが、私を待っていた。

「それよりさぁ、ふう。どうして、知り合いなのに、私達に黙ってたの～」
琴実が、私の机に肘をついて顔を覗き込む。
とっさに、目を逸らしちゃう、私。
「あやしいなぁ、ふう」
と、後ろで仁王立ちする美希。

「別に、何もあやしくないよっ」
って、私は、窓の外を眺めながら、答える。
「そっかぁ。私達に言えないことでもあるのかなぁ～？」
琴実は、笑いながら、意地悪く言う。
「当事者に聞くのが一番いいだろう」
と、美希は、シバの方を向きながら言った。
「ねっ、楠木君は、ふうとどこまでいったの？」
「えっ？？」
困惑するシバ。
「あのねぇ、琴実。シバとは何にも無いんだから・・・」
「ええっ！！今、楠木君のこと、シバって呼びすてだよね？」
しまったぁ・・・いつものクセで・・・
「ますます、あやしいぞ、ふう」
美希は、目を細めて、詰問する。

あ～、やぶへびってやつ？それとも、身から出たサビ？？
ってか、どうしてそんな事が気になるんだ、この二人は？

「どうなの？楠木君は、ふうのこと、どう思ってるの？」
今度は、シバの方に向いて質問する、琴実。
「えっと・・・」
「好きなら、好きと言わないと、男じゃないぞっ」
「好きだよ」
「やったじゃん、ふう！」
琴実は、意地悪い笑顔で、次は私に質問をし続ける。

「で、ふうは、どうなのさ？楠木君のコトどう思ってるの？」
「・・・どうって言われても？？分かんないよ。っていうかさぁ、どうでもよくない？」
「どうでもいいわけないじゃん！」

「ほんとに、分かんないもんっ」
「じゃあ、嫌いなの？」
「嫌いじゃないけど・・・」
「嫌いじゃなきゃ、好きじゃん」
「好きとかぢゃないんだって」

もうっ、こういうのすごい苦手なんだけど・・・
「ってか、琴実。シバ・・・楠木君が困ってるからやめようよ」
「言い直さなくてもいいよ、普段通りの二人で」
そんな話を続けてると、同級生のほかの女子がシバに話かけにきた。

「ふう、いいの？もうライバル登場だよ？」
「いいんぢゃないの。別に、私は彼女でもなんでもないんだから」
私は、他の女子と話をしているシバを横目に、琴実に答えた。
「仲のいい友達だよ、シバとは」
そう、私は、二人に結論づけて、会話を終わらせた。

シバって、多分、もてる。
優しいし、顔もいいし、身長もあるし・・・

でも、シバは、柴犬なんだけど・・・
って、みんなには言えない。
今のシバは、どこからどう見ても人間だもの。

だから、この秘密は、私の胸にしまっておこ。

柴犬が、私の学校に転入してきました。
ほんと、不思議な話だよね？

第２５話　ええっ、転入生！？　その２（後書き）

なんだかんだで、ナントカ高校に転入させました。学園モノにしてみたかったので（笑）
書いていて、懐かしい気持ちになりますね。今、学生時代にタイムスリップしたら、すごく楽しい学園ライフになると思うのですが・・・

さてさて、次はどんなお話にしようかなぁ、と、考え中です。
ううっ、現時点では、アイデアが浮かばない（泣）
次回も、無い知恵絞って頑張りますっ！

第２６話　ランチ・パニック　その１

「せっかく、渡りに舟なのにさぁ」
「なにそれ、渡りに・・・」
「琴実（ことみ）、ふうにそんなこと言っても通じないよ」
「意味分かんないけどさ、もういいじゃん、シバの話は」

ランチを校庭の中庭で食べる。
丁度いい３人掛けのベンチは、私たちが美希（みき）と初めて会った場所。
このベンチは、私達「大中小の３人組」が独占（どくせん）しているのだ。

でも、まだまだ、外はさむ～い。北風さんがびゅうびゅう吹くから、
誰もここにはやって来ないってのも寂しい気がする。
コートを羽織（はおり）ながら、寒い中で食べる、冷たいお弁当っていうのも、
またいいものだと思うんだけど・・・
まぁ、私は、学食でパン買って食べるんだけど・・・

「それよりさぁ、普通始業式って、お昼までなんじゃないの？」
「ここの高校って変わってるからね」
「山の上だから、寒いんだよねっ、この高校」
「そうそう、どうしてこんなとこに立てたんだって感じしない？」

とりとめない二人の会話を、ステレオスピーカーで聞きながら、私
は一人、空を見上げていた。
北風さんは、急がせるように、おっきな雲を左から右に運んでいく。
例えるなら、雲のお引越しだね。

そんな、私の空想を、携帯音が止めてくれた。
この音楽は、メールだ。

”びっくりした？”
シバからのメール。
いつまで経(た)っても、長い文は送ってこれない。
”びっくりしたよ～！どうして、高校なんかに転入してこれたのさ？嘘(うそ)までついて”
”僕の両親が頼みこんでくれたんだ”
”野良犬(のらいぬ)なのに？？？”
”その後、飼われたんだよ。近くの家に”
”えっ～？？野良犬(のらいぬ)じゃないの？”
”僕の携帯も貰(もら)ったんだよ”

「何、メールばっかりしてんのさ、ふう」
携帯から目を離すと、二人はもう立ち上がっていた。
「早くしないと、午後の授業、遅刻(ちこく)になっちゃうよ」
「あ、ごめ～ん。いこ～」
私は、ベンチから立ち上がって、二人の後を追った。

シバは、何か隠してるような気がする。
でも、私の思い過ごしなのかな？
あまり、深く考えすぎない方が、いいのかも・・・私って、頭悪いから。

「ちょっと、廷上(ていじょう)さん」

私達が、廊下(ろうか)を歩いていると、後ろから声をかけられた。
何か嫌な予感がするから、気付かないフリをして歩き続ける。

「ちょっ、返事ぐらいしなさいよ」

「ふう、なにか、わめいてる子いるけど、どうすんの？」
琴実が、ひそひそ声で私に話しかけた。
「どうするもなにも・・・」

すると、声の主は、私達の前に立ち塞がった。

「声かけてんのに、無視するとは、いい度胸してるじゃないの」
いきなり、腰に手を当てて、文句をつけてきた。

「何か用？」
私は、めんどくさいをはっきりと相手に伝えるため、いつもよりも精一杯だるそうに答えた。
琴実と美希は、楽しそうに見てる。
ほんっとに、問題事が好きな二人。

「あなた、彼とどういう関係？」
「カレ？？」
なぜか、私じゃなくて、琴実が返事する。
私は、あきれた顔で琴実をにらむ。
片目をつぶって、「ごめん」って私に謝った。

「彼とは、誰のこと？」
次は、美希が腕を組みながら、相手に質問した。
「もしかして、楠木君のことかな？」
琴実が、笑顔で聞いてくる。
私は、首を左右に振った。

「知らないフリするつもり？」

「ふう、何かやったの？」
好奇心を抑えながら、琴実は、心配そうに聞いてきた。
美希は、相手をずっと見据えている。

「分からないものは、分からない。その彼ってことを、言いたくないのか、言いたいのか、どっちかにして」
美希は、私が「何もしてないよ～」って、琴実に言っている間に、相手に聞いていた。

「・・・本田君のことよ」

・・・本田君？？

・・・

ええっ！！どうして？？
何かしたの、私？
全然、見覚えがないんだけど・・・
う～ん・・・次回に続きますっ。

第２６話　ランチ・パニック　その１（後書き）

風邪ひいて寝込んでました、作者です。
最近、暖かくなったり、急に寒くなったりで、気温の変化についていけないぃ・・・

さてさて、また、いきおいで本編書いちゃったんですけど、どうしよ？どうしたら、いいと思いますかぁ？
う～ん・・・ほんと、パニックだわ。

悩んだ答えをお楽しみに！（ああっ、どうしよ？？）

第27話　ランチ・パニック　その2

緊張感の続く廊下の空間の中に、取り残される私。
琴実と美希は信じられないような顔をしている。

「えっ？ふうが何かやったの、本田君に？」
美希は、驚きを隠そうともしないで、文句を付けて来た相手に言った。

「覚えてますよね？本田君の後ろにバイクで乗って二人で通学してたコト」

相手は、確認するように私の目を覗き込んで問い質した。

「うっ・・・」
「それが、本当だとしても、ふうには、新しい彼氏がいるのよ」
私が言葉を選んでいる間に、琴実が言い放った。

ってかさ、何言うのさ、琴実！私、頭悪いから、何て言おうって思ってたトコだったのに～！

「何ソレ？新しい彼氏？？」
「そう！今日、転入してきた楠木君。知らないのぉ～、あんた？」
「それってさ、もう本田君のこと飽きたって言うか、捨てたって感じ？」
「そうとも言うかなぁ～？」
琴実と相手の言葉のやり取りを聞いていて、私はため息をついた。

「ひどぉ～！」

相手は、私を睨(にら)みつけるなりそう言った。

もう、どうにでもなれ、だ・・・って思ってみても、
とりあえず、私は、胸を張ってみて、誤解(ごかい)を訂正(ていせい)することにした。

「あのね、ちゃんと聞いてねっ。私は・・・」
「聞きたくないっ！」
聞けって！

相手は、私の言葉を塞(ふさ)いで、怒っている。

「あなたに、本田君は渡さない」

渡すも何も、貰(もら)ってもないんだけど・・・

「どういう気持ちで、ずっと遠くから見ていたか知ってるの？」

それは、つまり、ストーカーじゃん。

「ずっと、思い焦(こ)がれて、１６年。今、幸せになんなきゃ、この時間どうしてくれんのさぁ」

そんなコト言われても、私関係無いじゃん。

「ん？」
そこで、美希は、何かを発見したようだった。
美希の視線(しせん)を辿(たど)ると、四角のロッカーが積(つ)まれた一角(いっかく)に、お姫様みたいな女の子が泣いていた。

「ところで、あんた誰？」
美希は、その女の子に問いかけた。
ちっちゃくて、可愛らしくて、私とは正反対な感じがする・・・
だってさ、でっかいピンクのリボンなんかガッコにつけてくる？
この子とは話、合わないなって思っちゃうさぁ。

「どうして、あんたが泣いてるの？」
美希は、目の前にいる相手を無視して話かける。
「葵、いたの？」
文句をつけてきた相手は、後ろを振り向いて驚いた。
葵っていう女の子は、軽く首を縦に傾けて、人差し指を左目に添えている。

「どゆこと？」
若い検察官のように、琴実は相手に訴追するように言った。
相手は、目を上に向けながら、「え～っと」と、言葉を濁した。
若い検察官、琴実は真実を把握したようにみえた。
そして、腕を組みながら、目を細めた。
「なるほどね、黒幕は、あなたね。葵さん」
少し顔を反って、上から目線で、若い検察官は、葵を見た。
私は、琴実に小声で、「え、どうゆうこと？」って聞いた。
琴実は、大きな声で、「真実はたった1つ」と、某人気（名探偵）長寿番組を真似して、胸をはっている。

「つまり、本田君を好きなのは、目の前にいる子じゃなくて、葵っていうあの子。そうでしょ、葵さん？」

その糾弾が功を制したのか、はたまた恥心が芽生えたのか、彼女は泣きながら、走り去った。

「ちょっと、葵、待ってよ」

そう言い残して、葵の代役も後を追いかけるように去ってしまった。

なんだったんだろぉ・・・とても、疲れたんだけど・・・

私は、その場で座り込んでしまった。

「さてと、邪魔者はいなくなったことだし・・・ふう。教えてもらうよぉ～。本田君と何があったのかを」

琴実は、悪魔的な笑顔で、私を見下ろした。

もちろん、恐ろしい笑みを浮かべて・・・

・・・お手上げ。

私は、両手を挙げて、降参のポーズを取った。

補習の出来事を琴実と美希に、事細かに聞かれることとなった。

第27話　ランチ・パニック　その2（後書き）

はたまた、どんどん登場人物が増えていきますね、あはは。
事態を収拾するより、好き勝手、野放しな話にする方がおもしろいので、私自身、いったい何人増えるんだって感じで見てます。

さて、次回のお話も、いつもながら考えてません。
なかなか、書けなくて、毎日、書くようにしていてこのペースだからね・・・ほんっと、先が思いやられます。

でもっ、４０話～５０話ぐらいで完結出来たらいいなぁ、って描きながら、書いてます。
次回も、不定期でゴメンなさいですけど、読んでやって下さい。

第２８話　屋上と犬

葵(あおい)っていう子の件も一段落した私は、逃げるように琴実(ことみ)と美希(みき)に挨拶(あいさつ)して別れた。
そのまま、屋上(おくじょう)にあがる。

風は、まだ冷たい。
でも、春はもうそこまで来ている。
そう私に、北風さんは、告げてくれいるようだった。

どうして、ここに来たのか。
私にも分からないけど、多分、シバのこと。

この屋上から、見えるんだ。
あの神木(しんぼく)様が。

だから、ここに足が向いてしまった。
そう私は、結論づけた。

「ふ～」
両手をいっぱいに広げて、私は新鮮な空気を私の体内に入れるように、深呼吸した。
「はぁ～」
で、古い空気を外に吐き出す。

分からないものは、分からない。
そうあの日から。

私には、全(まった)く理解ができない。

そんなことばかりが続く毎日。
それは、それで、おもしろいんだけど。
でも、どうしてかって、知りたくもなるものさ・・・たまにはね。
かかとをコツーンって、屋上のコンクリートを軽く蹴(け)って、私は後ろ手で一歩、また一歩手すりまで歩く。

コツーンって。
コツーンって。
コツーン・・・コツーン。

コツーン、コツーン？
どうして2回鳴るの？

コツーン、コツーン。

「かかと、減るよ」
不意に左後ろから、声をかけられた。

その声で分かる、シバだ。

「シバ。いたの？」
私は、前を見ながら、話かけた。

「廷上(ていじょう)さんが、来るちょっと前に」
「・・・そう」
私は、よく他人(ひと)から、周りを見ないってよく言われる。
お母さんからも、事故だけは起こさないでね、って、これまたよく言われる。

「あのさ、シバ・・・冷たっ！」
私が何も考えないで何か言おうとした時、私の左足に、ぬるっとしたものが・・・
自分の足元に目を落とす。
そこには、シバが私の足を舐(な)めていた。
もちろん、シバは、柴犬になっていた。
「あんた、何してんのさ！」
怒鳴った。
だって、恥ずかしかったから。
でも、シバは、おすわりして、舌(した)を出してる、「ハッハッハッ」って息を出しながら。
う～、憎めない顔だ。
あ、こういう時は、目をつぶって。
「あのさ、いきなり人の足なめないでよ」
・・・
でも、返事がない。
「聞いてるの、シバ？」
・・・
やっぱり返事はない。
また、どこかに行ったのか？って思って目を開けると、そこには、舌を出してるシバがいる。
「も～、何がなんだかさっぱり分からないじゃないの～！」

私は、気付いたら、叫んでいた。

「どうして、どうして話ができないの？」
シバの顔を、ひっぱたり、耳を掴(つか)んでみたり、顔をさすったり、色々してるけど、返事がない。
それこそ、本当に犬だ。
まぁ、犬なんだけど、今、目の前にいるのは犬なんだけどね。
もぉ～、嫌。
分からないにも、程(ほど)ってもんがあるでしょ～！

「なんだ、うるさいな」
けだるそうな声がした。
私は、はっと、シバの顔を両手で挟みながら、声の方に振り向いた。
寝転がってる本田(ほんだ)君を発見してしまった、私・・・と、一匹。

「あれ？本田君？」
確認する必要もないぐらいの銀髪。
「ああ？」
本田君は、起き上がって私と対峙(たいじ)した。
距離はおよそ30メートル。
至近距離(しきんきょり)ではない。

「ああ」
なんか、本田君は分かったらしい、私であることを。
「犬？」
って、本田君は自分の肩をもみながら、首を傾けてシバを見た。

「犬。柴犬だよ」
私は本田君に、ありのままを伝えた。

「犬？ここに？」
「うん、ここに、白い柴犬」
「あれ？さっき、あの新しい転入生の声が聞こえたような気がしたんだけどな」
聞いてたのかよっ？
もしかして、まるっとするっとお見通し？

「う～ん、犬かぁ・・・」
でも、本田君は分かっていない、というか知らないみたい。
「えっと、どうして本田君はココにいるの？」
だから私は、すぐに話題を変えた。

「ん？昼寝（ひるね）」
「ああ～、お昼寝してんだぁ。へぇ～」
「悪い？」
「ううん、悪くない、悪くない。よねぇ～？」
って、シバを見た。
「いや、寒いから、こんなとこで寝てたら、風邪ひいちゃうじゃんって思って・・・」
「オレ、バカだから風邪ひかねぇ」
「・・・バカとか、そういう意味じゃないんだけどぉ・・・人間でも、犬でも風邪ひくよねぇ？」
私は、シバをずっと見ながら、ちっちゃい声でぼそぼそって。

「まぁ、いいや。学校の屋上に野良犬（のらいぬ）連れてんの見たら、怒られるから気をつけた方がいいぞ」
そう言いながら、本田君は、階段から降りていった。

「はぁ～」

と、私はうなだれた。
「どうして？私が疲れんなきゃならないの？」
彼の答えは、「ワン」だった。

第２８話　屋上と犬（後書き）

お久しぶりです（汗）。すみません、４月は1日も書いてないです。
何してんたんでしょうね？・・・かくいう私も思い出せません。

さて、今回は展開してなくて、全部含みみたいなお話でした。
これをちゃんと繋げていけるのか心配っ！

じゃあ、ということで、ちゃんと頑張って書きマース！！
頑張りますので、よろしくお願いしマース♪

第２９話　守れ神官のおじいちゃん

私は白い柴犬を連れて、校門を出た。
行き先は、校舎の裏山。
神木様のあるところ。

さっきから、シバは、一言も話さず・・・「ワン」とか吠えるけれど・・・黙って私の後をついて来る。
どこから見ても、普通の犬だ。

尻尾を振りながら、キョロキョロと顔を上げる。
時折、草の根っこの匂いを嗅いだり、土を前足で掘ったり、蝶を追いかけたり・・・見てて飽きない。

私は、別に犬に噛まれたとか、そういった経験が無いので、苦手意識とか無い。むしろ白いこのひょうきんな犬が、さも犬らしく歩き回っているのを見ているだけで、心が和むような気がする。
人と接するより、空を見てたり、犬と散歩したりする方が、気持ちが落ち着くと思うのは、私の心が病んでいるのかな。

「さぁ、シバ行くよ」
私は、他の生徒達と反対の方向へ歩き出す。
ほとんどの生徒は、恐怖坂に向かって歩くので、校舎裏山の辺りには、誰一人来ない。
っていうか、何も無いから来る必要ないし。

長い草が生い茂った草むらを通り抜けると、ヒューっていう風が私達を出迎える。
目の前には、町並みを一望できる景色と、大きな木が一つ。

私は、木の下に腰かけて、町の眺めと、空を見る。

どうして、私はここに来たのか。
シバのことが気になるから、それとも、ただ景色を見たいから。
私にも、分からない。
けれど、時間は十分にあるんだもの。
帰っても、特にすることないし。

「いい景色だね・・・」
私は、神木様にもたれて、私はしばらくの間、目に映る風景に癒されてた。
この時が、ずっと続けばいいのに・・・そう思った時に限って、中断させられる。

「ワン。ワン、ワン」
シバが草むらに向かっていきなり吠え出した。
「え、何？何を吠えてるの？」
ガサガサとかき分ける草の音を聞きながら、体勢を立て直した。

「誰じゃ」
草むらの中から、姿をあらわしたのは、初老の男の人だった。
背は、私と同じくらい。白髪の髪が肩まで伸びて、いったいいつの時代の人なんだろう？って思わせる。
一言で言えば、白髪のおじいちゃん。

「ごめんなさい」
私はとっさに、謝った。
別に、悪いことなんてしてないんだけど、なんて言えばいいのかな？
おじいちゃんの家に勝手に上がってしまった気がするから。

「こんなとこで、何してる？」
白髪のおじいちゃんは、杖も使わずに、腰も曲がらずに、颯爽と私達に歩み寄ってくる。
私は、動けずにただ白髪のおじいちゃんを目で追いかけた。
「ここは、神聖なる由緒正しき場所だ。不用意に近づいてはならん」
白髪のおじいちゃんは、私達の目の前に立って注意をした。

「・・・あの」
「ワン。ワン」
私が何か言おうとした時、横に座っていたシバがおじいちゃんに吠えた。

「ん？」
おじいちゃんは、シバに目をやって、
「おお、お前さんか。最近、久しく見てないのぅ」
と、微笑んだ。

「えっと、おじいさんは、シバのコト知ってるんですか？」
「知っておるとも。よくここに来ていたからな」
おじいちゃんは、シバの頭を撫でて私に答える。

「ところで、柴犬。あの坊やはどうした？」
「坊や？」
「・・・今は、お嬢さんさんが飼い主か？」
「いえ、違いますょ。私は、シバの友達です」
「シバというのは、この柴犬のことか？」
「あ、はい」
「そうか、元気にしとるといいがな。あの坊や」

おじいさんは、遠い目をしている。
「お嬢さんは、そこの静山丘高校の生徒じゃな」
私は、頷いてみせた。
「あんまり、ここには近寄らせんでくれと、お願いしとったんじゃが・・・」
「そうなんですかぁ・・・」
「まぁ、特にゴミを捨てるでもなし、隠れてタバコを吸う訳でもなし、良しとするか」
と、おじいちゃんは、結論づけた。
「どうして、おじいさんはここに来たんですか？」
「わしか？わしは、代々（だいだい）この地を守り続けておるのじゃよ」
「よく分からないんですけど、神木様を守ってらっしゃるんですね」
「お嬢さんは、神木様を知っているのか？」
「え、あ、はい」
「それで、神木様にお参りに来たと言うか？」
「・・・え、まぁ、いちおう・・・」
「それは、それは。若いのに立派な心がけじゃな」
「あはは、ありがとうございます・・・」
私は、頭をかいて苦笑した。
「・・・でも、あんまり、知らないんです」
「そうか、じゃあ、わしが教えてしんぜよう」

この地には、昔より神木様が祭られておった。
小高い丘から、四方八方を臨む神木様は、我ら百姓に恵みの雨を施してくださった。
時は、平氏の世代。
この地に、流されてきた源頼朝公は、箱根権現に帰依して読経をお

こたらず、源氏再興の志を深く持ち続けていなさった。
そのような折、ふと従者、佐々木高綱様を連れこの地にやって来られた。
頼朝公は、百姓より神木様の存在をお聞きになった。
そして、神木様に願いをかけられた。
「平家打倒」と。
頼朝公の周りに、幾つもの光が溢れ、風が天より舞い降りた。
その後すぐに、高倉宮以仁王が平氏追討を命ずる令旨を送り、頼朝公の願いは叶えられたのである。
征夷大将軍となられた頼朝公は、この地のことをよく覚えてくださり、高綱様を従えてこの地に、神木様を守る神官を命じてくださった。
神官は、野木性を与えられた。

「それが、わしら野木家なんじゃが・・・」
と、白髪のおじいちゃんは、目を落とした。
「頼朝公が崩御されて後、どんどん神木様の存在を世間から忘れ去られてのぅ。文献にも存在せんのじゃ。唯一、わしら野木家がお世話させて頂いているぐらいじゃ」
「・・・はぁ」
私は、おじいちゃんの抑揚無い語り部を、眠たい目をこすって必死に聞いていた。
「あの乃木将軍も、高綱様の末裔であると言われているようじゃが。わしらと同じで、野木性を賜ったのかもしれんのぅ」
「はぁ」
「乃木将軍を知らんのか？」
「・・・知りません」
おじいちゃんは、天を仰いだ。
昔話は、むつかしい。

野木と名乗る白髪のおじいちゃんは、「気をつけて帰るんじゃぞ」と言って、また草むらに帰っていった。
空から、カラスの声が聞こえてきた。
「さぶ～」と、呟きながら、シバと一緒に、帰ることにした。

結局、何も分からなかったんだけど、神木様は昔からあるんだね、ってことだけ分かったょ。

第２９話　守れ神官のおじいちゃん（後書き）

頑張って、更新続けてます～☆
このままの勢いで、どんどん登場人物を増やすよぉ～！
乃木将軍を知らない人は、調べてください～。

じゃあ、また読んでみてくださいね。

第３０話　日曜の約束

「結局、しゃべんなかったね？」
私達は、真っ暗になった道を歩いた。
シバはあくびをしながら、私に答えた・・・のかな？
よく分からないけど、犬のシバは、私の横をゆっくりと歩く。

いつもの交差点。
交差点で呼べるものか分からないけど、だって、信号も無いんだもの、ここでシバと別れる。
私は真っ直ぐ。シバは、右。

私は立ち止まって、シバを見るんだけど・・・シバは何食わぬ顔してゆっくりと自分の家に向かって歩いていった。
「ねぇ、シバってば」
私は、シバに呼びかける。

聞こえてないのかな？
シバは、こちらを振り返ることなく、暗闇の中に消えていった。
街灯少ないんだよね、ここら辺って。

「あ～あ、何だったのかな。今日も長い一日だったよ」
私は家に帰るなり、お母さんに疲れた顔で言った。
「今日、学校早めに終わったんじゃないの？」
「え？ちょっと、寄り道してた」
「ちょっとって、もうこんな時間よ。最近、帰ってくるの遅くない？」
「そうでもないよ。だって、琴実（ことみ）なんて、バイトしてるんだから、もっと遅いよ」

「琴実(ことみ)ちゃんは、バイトしてるんだから行き先分かってるじゃないの。最近、ここら辺でも危ないんだから、気をつけなさいよ」
「・・・うん」
前に会った茶髪ピアス男のことが頭をよぎった。
「そうだね。なんか変な人も多くなったのかもね」
「素直じゃないの？なにかあったの？」
「ううん、何もないよ」
「・・・だったらいいけど。じゃあ、ご飯にするから机の上片付けておいて」
「ええ～、それって親父ギャグ？ジャーとご飯とかけたの？」
「バカ言ってないで、早く布巾取りなさい」
「はぁ～い」
私は、2人しか座れないだろう机の上を布巾で拭いた。
テレビのリモコンとか、私のドライヤーとか、机のはじっこに寄せて。

「お母さんって、神木(しんぼく)様って知ってる？」
私は、筍(たけのこ)と若布(わかめ)が入った味噌汁(みそしる)をすすりながら、聞いてみた。
「神木様って？」
「あ、知らないんだ。やっぱり」
「何よ、神木様って？」
「この町にさ、古くからあるんだって」
「どこにあるの」
私は、エビフライにタルタルソースをたっぷりかけて、口に運んだ。
「私の高校の裏手にあるんだよ」
「物を口に入れながらしゃべんないの」
「知らないのぉ～」
お母さんの注意を無視して言った。
「知らないわよ、お母さんは。だって、元から住んでた訳じゃないもの」

「そうだよね。仕事でこっちに来たんだもんね」
「今日はそこに行ってたの？」
「うん、とってもキレイなんだよ」
「景色が？」
「うん、景色もそぅなんだけど、空もキレイに見えるの」
「そう、良かったわね」
「・・・ええ～、なんか興味無いってかんじぃ～？」
「興味があるとか、無いとかそういうのじゃなくて・・・」
「はいはい。お母さんは、仕事が生きがいだもんねぇ～」
「仕事ばっかりしてる訳じゃありません。ちゃんと、家事もしてます」
「私も家事手伝ってるじゃん」
「帰りが遅い娘に言われたくありません」
「何それ？嫌味ぃ～？」
「・・・最近、ひがみが入ってない？嫌なことでもあったの？」
「ううん、違うょ。っていうか、どっちかって言うと、最近楽しいかも？」
「そうよね。楽しまないとね」
そう言いながら、私は、食卓にある食べ物を片っ端から食べていった。

「ふ～、食べた食べた・・・って、あれ、着信？」
私は、お風呂から上がって、部屋に戻ったら、携帯のランプが光っていた。
着信は、シバからだった。

「・・・もしもし」
シバの声が、携帯から聞こえる。
「あんたさぁ、犬になってから全然しゃべんなかったじゃん」
「ごめん」

「ごめんじゃ分かんない。ちゃんと説明してよ」
「説明って言っても・・・。精神が続かなかったんだよ」
「何言ってんのか、さっぱり分からないんだけど」
「えっとね、精神の波動が続かないと、意識がとんじゃうんだよね」
「精神？波動？」
「何て言えばいいのかなぁ？意識が無くなると、犬に戻っちゃうんだ」
「意識が飛ぶって・・・なんか、怪しいクスリでもしてるの？」
「してない。してない！っていうかさぁ、そういう意味じゃないんだけど」
「だってぇ、ニュースとかでしてるじゃん。ぶっ飛ぶとかってさ」
「・・・もしかして、そんなのに興味あるの？廷上（ていじょう）さん」
「ある訳無いでしょ。怖いじゃん」
「それに、僕がしてそうに見える？」
「・・・ううん。見えない。けどさ、さっぱり分かんないんだよ。今日もさ、一緒に行ったじゃん、神木様んとこ」
「え、神木様のとこにいったの？」
「一緒について来てたじゃん。それで、白髪（しらが）のおじいちゃんと喋ったのも覚えてないわけ？」
「あ、そうなんだ。野木のおじいさんと会ったんだ。何か聞いた？」
「う～ん、昔話を聞かされた」
「他には？」
「え～、あんまり覚えてないよ」
「そっか、それならいいんだけど」
「何ソレ？知らないの私だけみたいじゃん」
「世の中には知らないでいいこともあるんだよ」
「え～、なんか気になるんだけどぉ」
「あはは。それより、今度勉強教えてよ」
「えっ？勉強？ええっと、それって美味しいもの？」
「美味しくは無いと思うよ。多分、食べ物じゃないと思うんだけど」

「じゃあ、パス！勉強なんて、美味しくないし、分かんないし。だって補習受けるぐらいだよ」
「だったら、今度一緒に勉強しない？」
「勉強きら～い」
「たまには勉強してもいいと思うよ。ねぇ、図書館行こうよ。次の日曜日に」
「・・・いいけど。図書館？」
「うん、図書館。いいよね？」
「分かったぁ」
「じゃあ、明日、学校でね。おやすみ」
「うん、おやすみ～」
と、電話を切った。

えっと、それって、デート・・・なのかな？
どうしよ？
とりあえず、寝よう。
なんか、頭がこんがらがってるから寝よう。

でも、私は、なかなか寝付けなかった。
だって、人生で初めてなんだもの。
たとえ犬であっても、男性から誘われるのって。
犬であることが、ちょっと傷だけど・・・

第３０話　日曜の約束（後書き）

いきなりハイペースで書いているテツです。
書ける時に書いておこう。
更新できる時に更新しておこう。

すみません、なんか書いたり書かなかったり・・・
暖かく見守ってやってください（笑）

次回は、図書館・・・にしよっかなぁ。と考え中です。
では、また読んでみてくださいね☆

第３１話　嵐の前夜

暗い部屋で一人、テレビは、つけたまま。
私は震えている。
何か始めようと。
外は冷たい風、街は矛盾の雨。
シバは眠りの中、何の夢を見てる？

・・・って、どうでもいいじゃん、シバの夢なんかっ！！

机は、教科書が開いたまま。
ペンは、チャック式の透明な筆箱からはみ出して、机のあちらこちらに自分の存在をアピールしてる。
テレビを見る気もおきなくて、ただ、ただ、机の上に座って、頭を抱えている。

とりあえず、そこにあるペンをくわえてみる。
勉強しているような気にさせるから。

「どうしようかなぁ・・・どうしたらいいのかなぁ・・・」

来るな、来るな、って思いながらも、時は、残酷にもせつなく、嘲笑うかのように、刻んでいく。
明日は、日曜日。

ペンを飛ばして、開けたままにしてあるポテトを、口に放り込む。
自然な動作。
そして、無意識のはざま。

深刻に考えてみるふりをしてみるように考える。

何をしても、何を考えても、
何をしたいのか、何に不安になっているのか、
どうしてなのか、なぜなのか、
自分の気持ちも分からない。

そう、今この場に座る神様にも。

嵐(あらし)の前の静けさとは裏腹に、外はどしゃぶりの雨が続いている。
月は、漆黒(しっこく)の雲を貫(つらぬ)くことも出来ず、ただ雨の音が聞こえるばかり。
屋根に降り続くこの雨が止めば、きっとそこは日曜日。

そんな不安を拭い去ろうと、私はふと考える。

結局、人とは、恋だの愛だのと叫んでみても、
己の欲望、パンとミルクには勝てないのだ。
私は、そう思ってるし、事実、世界はそうなのだから。

だから、私よ。
一体、何に恐れをなしているというのだ。

これから往(ゆ)くは、何も恐れることもなく、ただ平らかなる心をもって、制すればよいのではないか。
相手の心情を、優しく、かつ丁寧に、さながら、無機質なエレベーターのように迎えればよい。

地球上から見れば、いや、人類の歴史から見れば、私の明日の行動なんて、大河の一滴にも満たないほどのものなのだ。
それだというのに、何を悩むというのだ、私よ。

ただ、心を平穏に。さすれば、道は開かれん・・・って、開いたら、駄目じゃん！

「あ～あ」

と、言って、私はベッドに飛び乗る。

ベッドから仰向(あおむ)けになって天井を見ていて、気付いた。

「・・・ってかさ、そんな意味分かんないこと考えてる暇があったら、明日の服、何着ていこう？」

私は、ベッドから跳(は)ね起きて、クローゼットを開く。

あんまり、服にはこだわらない私。

「あ～、この服、中学ん時のだ。これは、駄目！えっと、これは・・・？うーん、なんかイマイチ」

自分の持ってる服をどんどんベッドに放り投げては、また奥から出していく。

そんなにない服もついに底をついてしまった。

どうしよ？

何も決まらない・・・

なんか、焦(あせ)ってる自分に腹が立ってきた。

「どうして、こんなことで悩まなくちゃいけないのさぁ！！」

私は、両手を上にあげて、大声で叫んでしまった。

「ふう、どうしたの？こんな時間に・・・」

いきなり登場してきたお母さんは、部屋を見るなり固まった。

「あんた、いい加減になさいっ！！」

ゴロゴロ、ドーーン！！

空と、目の前で同時に雷(かみなり)が鳴ったことを、私は生涯(しょうがい)忘れることは無いだろう。

第３１話　嵐の前夜（後書き）

ちょっと、短めですけど更新しました。
本当に、人ってパンとミルクの方が大事なんですよねぇ・・・って身を持って体験している作者です。

「悲しいけど、これ人間なのよね」

では、次回はようやく図書館に行くことになりますね。
また読んでみてくださいね☆

第３２話　携帯の使いすぎには注意っ！

今日は、とてもいい天気。
晴れ渡る空から、まん丸お日様が、おはようって喋りかけてくれてるみたい。
私は、ジャージのパジャマ姿で、窓を開けて、外の空気をいっぱい吸った。
朝の日光浴。なんか、気持ちいいね。

「あら、昨日、遅かったのに、早いじゃない」
あんまり眠れなかったんです・・・って、心の中でつぶやきながら、
「お母さん、おはよ」って、言った。
「傘持って行ったほうがいいわよ」
「え、どうして？今日は、一日晴れだって、天気予報で言ってたよ」
「だって、あなたが、日曜日にこんな朝早くから起きるわけないもの」
ぷ～ってふくれっ面した。
「よっぽど、大事な用なのね」
言い残して、お母さんはドアを閉めて台所に向かった。

さてと、とりあえず、今日着ていく服は、お風呂から上がって考えよう。
私は、朝風呂に入りに洗面所に行く。
「ちょっと、うざったいかも」
黒い髪の毛を触りながら、今度髪切ろうって思った。

私の高校って、染髪（せんぱつ）禁止なんだよね。
でも、琴美（ことみ）は、茶髪なんだけど、事あるごとに体教室に呼ばれるのも、めんどうだし・・・

別に、長いのが自慢なわけじゃないし、ただ気づいたら伸びてた、ってゆうのかな。

お風呂からあがった私は、お母さんが用意してくれた西洋的朝ご飯、ぶれくふぁーすと、ってゆうやつを食べながら、携帯見てた。

「ふう、携帯を見ながらご飯を食べないの」

「え、どうしてぇ？だって、食べてるときって暇じゃない？」

「食べるときは、食べることに集中するものよ」

「・・・なんかさぁ、最近、小言多くない？」

「そんな言い方しないの！」

「はぁ～い」

私は、生返事をしながら、携帯を机の上に置いた。

「携帯電話依存症、って聞いたことある？」

お母さんが、おはしを止めて聞いてきた。

「知ってる。ネット中毒っとかってやつだよね」

「そうそう、あまり携帯ばっかり触ってると、うつ病になるかもしれないから、ちょっと心配・・・」

「心配しなくても大丈夫だって。私、あんまり携帯見ないし、無くても困らないしさぁ」

「あ、そうなの」

お母さんは、晴れやかな顔で言った。なんか、嫌な感じがするんだけどぉ・・・

「じゃあ、ふう。携帯いらない？あんた、先月の携帯代、２万円もしてるんだけど！」

おお～、しまったぁ～、やぶへびってやつ？

「え、そんなに、かかったの？うそだぁ～？」

「嘘じゃありません」

バンって、机の前には、請求書。

「あはは、ほんとだねぇ～」

私は頭をかいてごまかす、しか方法ないんだもの。
「でもね、お母さん。ちょっと待ってね。携帯無くなると、ちょっとつらいかも・・・」
「ふう、ちゃんと、考えてから携帯使うように。分かった？」
語尾を強くして、私に同意を促(うなが)した。
「はぁ～い」
ちょっと、意気消沈(いきしょうちん)しながら、私は頷(うなず)いた。

あ～あ、朝からヤなこと言われたなぁ・・・

私は自分の部屋に入って、少し頬づえをついた。
そして、昨日のクローゼットをもう一度開いた。

第３２話　携帯の使いすぎには注意っ！（後書き）

ごめんなさいっ、ぜんぜん前に進まない！
ほかの作品ばっかり打ち込んでしまっちゃってるので、ほんとに更新遅いんですけど、ゆっくりのんびり読んでください、私の小説は逃げも隠れもしませんので・・・
でも、書き方変えるのむづかしいなぁ～って思いながら書いてます。
う゛～っ、ガンバリますっ★～

第３３話　ばんそうこう

「行ってきまぁ～す」
私は靴を急いで履(は)いて、外に飛び出した。
だって、約束の時間はもうすぐなんだもん。
やばい、遅刻じゃん・・・って、いつもの事なんだけど。

結局、これがいいって服が無かったから、時間が無くなっちゃったからぱっと取った服をそのまま着て外に出た。
そんなもんだよ、いっぱいいっぱい考えても結局、私って。

ドタバタ、ドタバタと走り回る私。
近所のおばさんが、「ふうちゃん、おはよう～」って声かけてくれるのに、振り向いてにっこり笑う。
でも・・・ドターンってこけるんだよ、漫画みたいにさ。

「いたぁい・・・」
ちょっぴり、涙が出たし、おばさんは心配してくれているんだけど、あんまりかまってる時間無くて、ごめんね。そう心で謝(あやま)りながら、目的地へと向かう。
待ち合わせ場所は、始めてシバと逢(あ)った場所。
あの交差点・・・まで、も少し。

角を曲がる前に、少し早歩きに変えて呼吸(こきゅう)を整(ととの)える。

色々なことが頭によぎる。
えっと、とりあえず、どういう顔して会えばいいのかな？
うっ、右足が動かないじゃん。

でも、遅刻してるんだし・・・ええぇ！！
私は、重すぎる足を前に出して角を越えた。
そこには、いつもの電信柱にもたれて、腕(うで)を組んで、目をつぶってる長身の男の人がいた。

「・・・えっと、遅れてごめん」
私は、合わせる顔が無くて、とりあえず、お辞儀(じぎ)をした。

「ううん、全然、待ってないよ」
顔をあげると、いつもの幸せそうなシバの顔が目の前にあった。
ちょっと、びくってしたけど・・・

「走ってきたんだ」
彼は、笑いながら話しかけた。
「どうして、分かるの」
私は、真剣になって聞く。
「だってさ、ひざから血が出てるよ」
そう言って、私のひざを指差した。

「どわぁ～」
って、声にならない声をあげて、ひざを見た。
血がドバドバーって流れてた。

急いでたから、それどころじゃなかったから、全然気付かなかったけど、けっこう痛い。

すると、シバは、片膝(かたひざ)をついて私のひざに手をあてた。

「・・・ありがと」
シバは、ばんそうこうを貼ってくれた。
「いえいえ、どういたしまして」
私は、自分の足を見る。
3重ぐらいに貼られたばんそうこうだった。
「どうして？ばんそうこうなんて持ってるの？」
「・・・ん？たまたまかな？」
って、シバはとぼけた顔で空を見上げた。

「じゃあ、図書館にでも行く？」
シバは、親指で道を指して、聞いてきた。
「え？図書館にでも？？今日は図書館に行きたかったんじゃないの？？」
「あ、そうだね。図書館に行きたかったんだ」
「ええ～、ほんとにぃ～？」
「ほんと、ほんとだってば」
そう笑いながら、私たちは、駅の向こう側にある図書館を目指して歩み始めた。

ばんそうこう、ありがと。
なんか、少し緊張が無くなったみたい。
私は、心の中でつぶやいた。

シバの優しさに、ちょっと救(すく)われたかもね・・・

第３３話　ばんそうこう（後書き）

えっと・・・いっつも言い訳ばっかり書いてるんだよね、このあとがき（笑）

ついに（？）、物語は中盤へと入ってきました。

・・・まだ中盤かよってツッコミは入れないでくださいね。

さて、次は図書館デートの続きとか書いちゃいます！

乞うご期待くださいねっ☆

第３４話　通りすがり

駅前の通りは、いつもとおり混んでいる。
行き交う人々は、日曜日の休みを満喫しているかのように、いきいきと私の目に映ってる。

・・・いや、ちょっと待って。浮かれてるのは、もしかして私じゃない？

えっとね、別にさ、何とも思わないんだよ。
ただ、ちょっとね。
こんな感じで、男の子と一緒に、外に出ることなんか今まで無かったから、やっぱり歩いている人の視線を気にしちゃうんですよ。
そんなお年頃なんです。
・・・なんか私たちって、彼氏、彼女って見えるのかな？

って、私は、一人で押し問答していた。

シバは、昨日見たテレビの内容を私に話している。
「あ、そうなんだぁ～」、とか、相づちをうってるんだけど、キョロキョロとまわりを見てしまう。
だって、昨日の晩は、ずっと服選びしてたから、テレビなんか、ぜんっぜん見てないし・・・

すると、前から、２人組の女の子が歩いてきた。

私とはタイプが違うお姉さんみたいな格好している。
そんな二人組みは、話をしながら、「ねぇ、見てよ」
そう言って、シバの方を見た。

「かっこいいじゃん」
なんか、目線がヤだ。

でも、シバは気付いていないよう。
それとも気付いているのに、知らないフリしてるのかな??
どうなんだろ?

すると、二人組みは、「でもさ・・・」と、私と通り過ぎてすぐ、肩越しに会話が聞こえた。

「もっと、かわいい子と付き合えるよね。どうして、この子なんだろ?」
「そんなもんじゃない?優位に立ちたいから、ぱっとしない子と付き合うんじゃない」

怒ってもいいのかな?
きっと怒ってもいいよね。
・・・でも、怒れないんだよね。

やっぱ、釣り合わないよね、私とシバって。

「そんなことないよ!」
いきなり、シバは強い口調で、言った。

え?何?
私って、今、思ってたこと言ったっけ??

私は目を丸くして(ると思う)、シバの顔を見た。
すると、シバは、一瞬だけ、ちらりと顔を変えた。
きりっとした目つき。

ちょっと眉(まゆ)が上がって、見たことない顔。
本当に今まで見た事もない顔・・・
そうして、すぐに元の優しい顔になって私の方を見た。

「どうしたの？シバ？」
「え？なんでもないよ」
「なんでもないことないでしょ？だって・・・」
「だって？」
今は、いつもの優しい顔。

「だって、いつもと違う顔だったから・・・」
「どんな顔してた？」
「なんか、怖い顔・・・」
私は、下を向いてそう言った。

すると、シバは「ああ」と言って、手を叩いた。
「さっき通った人、香水の匂いがきつかったんだ。僕は、嗅覚(きゅうかく)が良すぎて・・・だからかな？」
「あ！そっか、犬だもんね」
「そうそう！あ、着いたね、図書館」
おおっ！！図書館に着いちゃいました。

第３４話　通りすがり（後書き）

めっちゃ更新してなくて、本当にすみません！！
コメントまで頂いていたのに・・・

仕事とプライベートに流されつつ、全く更新していませんでした。
しかも、この話もストックだし（汗）

私も一から読んで、勉強し直します～！！

・・・ということで、約半年以上振りに再開致します☆

第35話　図書館ってさぁ～静かなんだよねぇ・・・

図書館だね。って、そんなこと言わなくても分かるよね。
だってさ、図書館なんて生まれてからあんまし来たことなくて・・・
ちょっと、緊張？
別に、シバと一緒だからじゃないよ、ゆっとくけど。

「ちょっと、シバ」
って、私はシバに話しかけた。
「うん？どうしたの？」
「えっと、いや、別にいいや」
「何それ？」
そう言って、シバは笑った。
だって、図書館ってこんなに静かだったっけ？

この図書館って、すごく小さいし、本もそんなに無いんだけど、駅から近いし、学校からも近いから、結構みんな使ってるって聞いたことがある。
昔からあるらしくて、古びた感じが図書館っぽくて、静かでいいのかな？
私、初めて来たからよく分かんないけど。

シバは、空いてる机に向かった。
さりげなく引っ張ってくれるから、ちょっと安心。

「ここは、どう？」
そう言って、シバは私を見た。
「うん」

シバは、古びた椅子(いす)に座って、自分のカバンから教科書を取り出した。
私も、それを見習ってカバンから、教科書を・・・って、あれ？
「どうしたの？」
「え、いやっ。えっとね、教科書・・・学校に忘れてきちゃった」
あはは、何やってるんだろ、私？

そう言って、頭をかいた。

「来週、社会科の抜き打ちテストだって言ってたから、僕のノートでも見る？」
「本当に？助かる～！！けどさ、抜き打ちなのに、どうしてシバ知ってるの？」
「ああ～。先生がね、転校してきたばっかりだから、こっそり教えてくれたんだ」
「あ、なるほど。社会ね」
社会科の結衣(ゆい)先生、イケメン大好きだからねぇ～。

って、私は苦笑した。

「じゃあ、まずノート作らなきゃ」
私は、新しいノートを取り出した。
「廷上(ていじょう)さん、今までノートつけてないの？」
「え？だって、今から勉強しよって思ったんだから、新しい方がいいじゃん！」
ノートには、マジック使って、社会って書いて、ガンバレ～！！って書いて、それと、雲の絵を描いて・・・
「出来た～！！見てみて、シバ。可愛くない？この雲のが・・・」

はっ！！しまった。
あまりにテンション高くて、声が大きくなっちゃった。
みんなが私を見てる。
ゴメンナサイ・・・

シバも、周りに頭下げて謝(あやま)ってくれてる。
だいぶ、恥(は)ずかしいんだけど・・・

そして、シバはちゃあんと、私のノート見てくれて、
「かわいいね。絵うまいんだね」
って、きちんと答えてくれた。

だって、雲(くも)は、毎日見てるもん。
うまくて当たり前だよ。

「えへへ」
って、私が言ってる時に、ある人が近づいてきた。

「これは、これは。ふうちゃんじゃないか？」
「え？ああっ、三鷹先輩(みたかせんぱい)！」

そう言って、三鷹先輩(みたかせんぱい)は、にこって笑った。
歯をキラリと輝(かがや)かせながら・・・

第３５話　図書館ってさぁ～静かなんだよねぇ・・・（後書き）

やっと更新出来ましたっ～！！
マジ、ウレシイ☆

どうして、図書館にしちゃんたんだって、自分を恨みましたね（笑）

このまま、更新続けれたらいいんですけど。
とりあえず、頑張りますっ！！

次回も「風の花」乞うご期待くださいねっ☆

第３６話　学校のスーパースター二人と会っちゃいました！！

三鷹先輩(みたかせんぱい)は、女子からすっごく人気がある。
テニス部のキャプテンしてて、とりあえずかっこいい。
三鷹先輩ファンクラブ、ってのもあるらしんだよ～。

それより、なんと言っても、生徒会長(せいとかいちょう)っ～！！

やっぱさ、学校の人気者って言ったら、生徒会長だよねぇ～！！

・・・って、別に私は興味があるわけじゃないよ。
だけど、学校一の人気者が私の名前知ってることに、びっくりしちゃった。

「あの・・・ええと、はじめまして」
とっさに私は、先輩にそう言っていた。

先輩は、笑顔のまま、私の目を見て言った。
「ごめんね、突然、呼び止めてしまって。
美希(みき)ちゃんから、よく話を聞いているから」

「あ、いえいえ、全然・・・」
慌てて、手を前に広げて、私は顔と手を同時に横に振った。

「ところで・・・」
そう言って、三鷹先輩は、視線を私からシバに移した。
「隣(となり)の彼は、少し前に転校してきた　楠木(くすのき)　梓羽(しば)君だったよね？」
「はい、はじめまして」
と、シバはごく普通に挨拶(あいさつ)した。

「僕(ぼく)は、三鷹(みたか)　将(しょう)。いちおう、静山丘(しずやまがおか)の生徒会長をさせてもらっている。よろしくね」
そう言って、三鷹先輩は、シバと握手をした。
「どうして、先輩は、シバ・・・楠木(くすのき)君のこと、知ってるんですか？」
私がそう言うと、三鷹先輩は、さらさらした髪をかき上げた。
「ははは、僕はいちおう生徒会長だからね。そういうニュースはすぐに入ってくるんだよ」
キラッと、歯を輝かせて、三鷹先輩は笑った。
「あらあら・・・何やら楽しそうね」
私たちが、話している時に、奥から女の人がやってきた。
あれは・・・
あの人は、秋菜先輩(あきなせんぱい)??
すっごくキレイで、スタイルが良くて、頭もすっごく良くてって、いつも美希(みき)が言ってる。
憧(あこが)れの人だって。
そんな学校のスター（あきらさんじゃないですけど・・・）二人と会えるなんて、すごい。
学校に入って、もぅすぐ1年になるんだけどっ、こんな間近で話することなんてないよっ！
だって、学年が違うから、廊下で会うこともないし・・・
「会長。いなくなったと思ったら、こんなところで、時間をお潰(つぶ)しになっておられたんですか？」

そう、言って、三鷹先輩をにらみつけた。
秋菜先輩は、すごく美人なんだけど、すっごく怖い人らしいよぉ・・・
・
そう、琴実が言ってた。
どうして、琴実が秋菜先輩のことを知っているのか、知らぬぃんだけどね。

「おお、副会長。それは、つまりだな・・・。あっ！」
そう言って、三鷹先輩は、シバの後ろに回りこんで、シバの両肩に手を置いた。
「君の言っていた転入生がいたから、声をかけたんだ」
「えっ、僕・・・ですか？」
シバは、体を固まらせて、困ってる。

「へぇ～、この子。」
秋菜先輩は、シバの顔をのぞき込んだ。
「分かった。今回は、大目に見ましょう、会長」
「あ、ありがとう」
三鷹先輩は、汗をぬぐった。
「・・・でも、次に逃げたら、承知しないから。分かりましたか？」
「は、はい！！」
ピキーンって、直立不動で、返事をした。

「ところで、転入生の君」
「あ、はいっ・・・」
「走ることが好きなのよね？」
「あ、そうです。はいっ、えっと、はい。好きです！」
「じゃあ、私のところに来なさい」
そう言って、秋菜先輩は、腰に手をやった。

「え、どこですか？」
「陸上部よ。私が今キャプテンしてるの。入部するでしょ？」
「ええ？クラブ、僕、入るんですか？」
「うん、そう！！」
そう言って、秋菜先輩はにっこり笑った。
ちょ～カワイイんですけど、でも、目が怖(こわ)い・・・

シバは、私の目を見た。
たぶん、助けを求めてる・・・
だから、私、答え分からないから、三鷹先輩を見た。
すると、三鷹先輩は、首を思いっきし縦(たて)に振ってた。
うん、だから、私もシバを見て、首を縦に振っちゃった。

シバは、にっこり笑って、秋菜先輩の方を向いて、「分かりました。僕、入ります。お願いします」と、答えた。

「本当！！ありがとう！じゃあ、明日、早速(さっそく)、放課後(ほうかご)にグラウンドに来てね。
今の陸上部の男子は、すぐ弱音(よわね)を吐(は)くとゆうか、なんかダメなのよねぇ～」
そう言って、パンっと手を叩(たた)いた。
「さぁ、会長！話はまとまったことだし、早く私たちの仕事を片付けるわよ！」
「あ、あの～。どうして、お二人とも図書館にいてるんですか？」
私は、控(ひか)えめに聞いてみた。
「今日は、卒業式(そつぎょうしき)の準備(じゅんび)なのよ。でも、会長がなかなか生徒会室に足を運んでくださらなくて、こうやって日曜日を返上(へんじょう)して頑張ってるわけ。ね？」
秋菜先輩は、三鷹先輩を横目でにらんだ。
「あ、うん。そうだね、副会長。今日中に終わらせないと、さぁ頑

張るぞ～！！」
両手を上に挙げて、三鷹先輩は、図書館の奥へとさっそうと消えていった。
「じゃあね～」
手を振りながら、秋菜先輩も一緒に奥へと消えていった。

今日、マジ、スゴイよ。
でも、とっても、今、疲れました・・・

第３６話　学校のスーパースター二人と会っちゃいました！！（後書き）

こんにちわ～！！

順調、順調♪

ちゃんと、更新出来てます～☆

今までの遅れを取り戻すべく、ガンガン書いていきます！

あ、誤字、脱字、とか、ご感想とか頂けるとすごく嬉しいです。

よろしくお願いいたします。

・・・さて、いつ、また止まってしまうだろうか？という不安はありますケド・・・（笑）

第37話　ふうって呼んで

「あ、そうなんだ。へぇ～、僕、まだ全然分からないな」
そう言って、シバは苦笑した。

私は、ストロベリーシェイクを飲みながら、シバに秋菜(あきな)先輩と、三(み)鷹(たか)先輩のこと、話してる。

どうでもいいけどさ、ストロベリーシェイク作った人天才だよねっ！
私、ストロベリーシェイク好きっ！！もちろん、ポテトもね。
「あれ、廷上(ていじょう)さん？」
あ、ゴメン！また、話飛んじゃった。
「えっと、シェイクって天才だよね」
「・・・？？」
「・・・」
シバの目も点でした。

私たちは、あれから図書館を離れて、駅前のマックでお茶中です。
結局、全然、勉強は、はかどらなかったょ、あはは。

「でさぁ、シバってどうして、勉強好きなの？」
会話に困ったから、あまり何も考えずに言った。
「好き・・・なのかな。分からないけど、家にいることが多かったから」
「あ、それってさ、私と一緒じゃん！拒否ってた？」
「何を？」
「学校だよ、学校。中学ん時なんか、結構、休んじゃったよ、私」
「学校はね、行きたかったけど、行けなかったんだ」
「あ、そうなんだ。じゃあ、私と違うなぁ～。私、行きたくなかっ

たもん」
「どうして？」
「だって・・・」
言えない・・・。プリングルスを食べ過ぎて、体重増えて、学校まで歩くのがめんどくさくなったから・・・なんて、言えない。

「色々、あるんだよっ、色々！」
私は、シェイクを、ズズズって最後まで飲んだ。
「そうだったんだ。あまり知らないけど、大変だったんだね」
「そうそう、とっても大変だったんだよ！もう、家庭のじじょー的なやつで」
「家庭の事情か・・・」
そう言って、シバは遠くを見た。

えっと、とっさに大げさに言っただけなんだけど、そんなに深くとらないでっ！

「でもねっ、今は、琴実（ことみ）とか美希（みき）とかいるから、学校楽しいよっ！ただ、朝が早いのが苦手だけどぉ・・・」
「僕は、朝は起きるの早いよ。起こそうか？」
そう言って、彼はくすくす笑った。
「いいもん、別に。起こしてくれなくったって。ちゃんと、自分で起きてるから」

はい、うそです。琴実（ことみ）に毎朝、メールもらってます。
でも、ちょっとシバから起こしてもらってもいいかも、とか思っちゃったけど。

「そういやさ、私、シバのこと、全然知らないよ」
「え？僕も廷上（ていじょう）さんのこと、知らないよ」

シバは、笑って言った。
「じゃあ、一緒だね」
そう言って、私も笑った。
「・・・これから、知っていけばいいんじゃないのかな？」
「そうだね、同じクラスだしね」
「あ、そういう意味でとらえるの？」
「えっ？だって、他にとらえようないじゃん」
私はそう言ったんだけど、シバはなんか苦笑いっていうのかな、よく分からないけど。

「外、暗くなってきたし、シェイクも無くなったし。シバ、帰ろうよ」
私は、シバを見ながら、トレーもゴミ箱に捨ててしまった・・・ゴメンなさい。よくやります・・・

そして、一緒に、いつもの別れ道まで来た。
いつもの交差点ね。

「じゃあ、また明日学校で。廷上（ていじょう）さん、今日はありがとう。楽しかった」
「うん、シバ、ありがとう～。私も楽しかったよぉ」

あ、一つ言いたいことがあったんだ。

「あのね・・・なんか、言いにくかったから、言えなかったんだけどさ」
「え、何？」
「私は、シバって呼んでるのに、廷上（ていじょう）さんって呼ばれるの、変なんだよね。

だから、私のこと、ふうって呼んで？」
今更だけど、なんか恥ずかしかったから、言えなかった。
「ああ、ゴメン」
そう言って、シバは頭をかいた。

「じゃあね、シバ」
私は、手を振って、バイバイした。
シバも、手を振りながら、笑って言った。
「ありがとう。また、明日ね、ふう！」

そう言って、私たちは家に帰りました。

やっぱ、名前で呼び合うのっておかしいかな？
そんなことないよね？

うーん・・・
まぁ、いっか。仲のいい友達は、みんな名前で呼んでるんだしね。

その時、お母さんからメール来た。

「帰りに、ゴーヤと、バナナを買ってきて。ママより」

えっと、ゴーヤとバナナ？？
今日の晩御飯は、何なの？？

謎は深まるばかりだ・・・

第37話　ふうって呼んで（後書き）

そういや、ふうのお母さんが作る料理は、あまり美味しくないらしい・・・

執筆、順調に進んでます。
ブランクがあったからかもしれません（笑）

こうやってね、書き始めると書けるんだけど、
ピタっーーーって、筆(ふで)が止まると、全くアイデアが出て来なくなるんです（泣）
だから、今、頑張りますっ！！

ちなみに、あとがきは、一言小ネタ（裏設定??）特集でも面白いかもしれませんね。

誤字、脱字、とか、ご感想とか頂けるとすごく書く気力が湧きます☆
よろしくお願いします！！

第３８話　シャアが来る

「おはよ～、ふう」
「あ、おはよ～、琴実」

私は、学校に通じる唯一の道、恐怖坂を登っています。

「今日は、早いじゃん、ふう」
「でしょ～！私もやる時はやるんよねぇ～」
「おっはよ～、ふう、琴実」

後ろから、美希がやって来た。
「おはよ～、美希。ふうが朝早いんだよ～、どう思う？」
「えっと～！あ、分かった。昨日の晩御飯が、おいしくなかったからじゃない？」
「あ、そっかぁ！！」

・・・悲しくも、正解だよ、美希。
昨日は、お母さんの創作手作り料理、「夏を先取り☆南国的沖縄料理」を食べさせられたんだけどぉ・・・
ゴーヤの苦さと、バナナが絶妙なバランスで・・・あ、ダメだ。思い出しちゃった。

でも、お母さんは、自分で作ったもの食べて、ちょ～へこんでた。
ということは、まだ、お母さんの舌も悪くなってないってことで・・・
・
それって、まだいぃことだよね？？

「あ、昨日の日曜日なにしてた？私は、バイトだよぉ～！ふうは？」

そう言って、学校の階段を上がろうとした時、上から声がした。

「アルテイシアか？」

えっと、なんて言えばいいのかな？

とりあえず、変なお面かぶって、赤いマントしてる。

「もう！！バカ兄！！私を学校で呼ばないでって言ってるじゃん！！」

と、琴実は、お面かぶってる男の人に言った。

って、・・・ええ～！！琴実のお兄ちゃん？？

私たちの驚きを無視して、琴実のお兄ちゃんは話を続けた。（っていうか、続けたいように見えるけどぉ・・・）

「アルテイシア。学校を抜けろと言ったはずだ！」

「あのねぇ・・・どうでもいいけど、学校にマスクはダメだって言ってるでしょ！！」

「私がマスクをしている訳が分かるか？私はお前の知っている貴信ではない。シャア・アズナブルだ。過去を捨てた男だ。」

「シャアのセリフをただ言いたいだけでしょ！また、怒られるよ。生徒会から」

「生徒会など、どうということはない。・・・うん、何！君は・・・」

と、言って、琴実のお兄ちゃんは、私の方を向いた。

「ララァ！ララァではないか？」

え、ラ・ラァ？？？

何それ？？

「あ、おはよう」
後ろから、シバが登校してきた。
「あれ、どうしたの？」
「シバ聞いてよっ、なんかよく分からないんだけど、私、ラ・ラァなんだって？」
「え、何それ？？」

私とシバが話しをしていると、琴美のお兄ちゃんがいきなり叫んだ。
「ララァ、奴との戯言はやめろ！」
「え、奴って僕のこと・・・だよね」
みんながその叫び声で、きょとんとしてる時に、後ろからまた叫び声が聞こえた。
「篠山君。学校で、マスクとマントは禁止って言ってるでしょ！生徒会に苦情が来てるんだから！」

この声は・・・
「あ、秋菜先輩」
美希が、後ろを振り返って言った。

「見せてもらおうか、連邦のＭＳの性能とやらを」
「ふぅーん。私とやり合おうっていうの、篠山君」
そう言った瞬間、秋菜先輩は、おもいっきしテニスボールを投げた。
琴実のお兄ちゃんは、態勢を崩しながらも、どうにか避けた。

「当たらなければ、どうということは・・・がっ！！」
しかし、秋菜先輩の第二球目をよけることは出来なかった。
「年貢の納め時よ、篠山君。生徒会室に引っ張ってやる！」
そう言って、秋菜先輩は、階段を猛スピードで駆け出した。
「ちぃっ、連邦のＭＳは化け物か！」

しかし、琴実のお兄ちゃんはうす笑いして、「ドレン」って叫んだ。
お兄ちゃんの横からは、小太りの男の人が姿をあらわした。
「二段構えの作戦ですな」
「ドレン、私は追われている。ちょうどお前の体格なら奴の頭を押さえられる。しかし、認めたくないものだな。自分自身の、若さ故の過ちというものを・・・」
そういい残して、マントをひるがえして上の階に逃げていった。

小太りの男の人は、秋菜先輩の道をふさぐように、立ちはだかった。
「こら、小太りっ!!どきなさい!」
「ガンダムだ!あの白い奴だ!」
「何を意味不明なこと言ってるの?どきなさいって!」

なんか、ほんとによく分からないんだけど、
小太りの人は、あっけなく秋菜先輩に捕まっちゃったみたい・・・

で、私は一つ琴実に聞きたかったことがあった。
「琴実。あの、ラ・ラァって何?」
「え?ララァって、女の子のこと?」
「ふーん。そんなに似てたの、私と?」
「黒い長い髪で・・・」
「うん、うん、それで?」
「肌が黒い」
「・・・え?肌が黒いの?えぇっ!!私ってそんなに肌が黒いの〜??」
「・・・いや、そんなことも無いんじゃないかなぁ」
そうシバは言ってくれたけど・・・ちょっとショック。

どうせ、ユーブイカットとかちゃんとつけてないけどさ・・・

琴実は、その後、ふかぁ～いため息ついてた。

第３８話　シャアが来る（後書き）

琴実の兄は、ガンダムシードを見てから、ガンダムにはまりました。
（裏設定）

ってかさ、ガンダム知らなきゃ面白くもなんともないじゃん、この話（笑）

ほんっと、すみません！
でも、どうしても作りたかったので・・・作っちゃいました、あはは☆

でも、琴実兄は好きなので、また出演させま～すっ！

あ、ちょこっとでも応援頂けると、すっごくうれしいです！

更新状況のご確認やご声援のコメントは、下記のブログにてお願い致しますっ☆★☆
ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｔｅｔｓｕ．ｓｂｌｏ．ｊｐ／
よろしくお願いします。

第39話　みんなの春休み！

そんなこんなで、無事に卒業式は終わったんだ。
なんか、生徒会役員が盛大に卒業式をしたみたい。
でも、一番がんばったのは、秋菜先輩だったんだって。

私、よく考えたら3年生の先輩を誰一人知らないから、卒業式も気付いたら終わってた・・・
だって、知らないもん。

ちなみに、秋菜先輩や三鷹先輩は、私たちの1つ上で生徒会は今年の夏までだから、二人はそのまま。
本当にいいコンビだと思うよね、あの二人。

そして、私は、今、春休み中なんだ。

え？春休みにホシューは無いのかって？？

えへへ～んっ！！
ちゃんと図書館で勉強したもんねっ！
・・・っていっても、赤点ギリギリセーフだったけどね。

でも、春休み・・・ツマンナイ。
つまんないんだよぉ～！！

聞いてっ！！私、琴実に電話したんだぁ。

「あ、もしもし、ふう？？どうしたの？何かあった？」
「ううん、別に何もないけど・・・。ちょっと時間が空いたって言

うか、暇(ひま)って言うか・・・」
「そーなの？珍しいじゃん、ふうから電話来るの」
「え～、そーかな？？琴実(ことみ)は、何してるの？」
「ごめんねぇ～、ふう。私さ、春休み中ずっとバイト忙しいんだぁ」
「あ！カラオケのバイト？？」
「うん、そうだよ。今ね、アルバイト少なくてさぁ、手伝ってって頼(たの)まれちゃって・・・」
「そーなんだ！あっ、今もバイト中？」
「うん、今、たまたま休憩中(きゅうけいちゅう)だから、いーよっ！」
「あ、ごめんね、忙しいのに・・・電話しちゃって」
「こっちこそ、ごめんねぇ、ふう。また学校でね」
「うん、がんばってね。ありがと～」

そう。
琴実(ことみ)はカラオケのアルバイトで忙しかったの。

だから、次は、美希(みき)に電話したんだ。

「もしもし？どうしたの？」
「ううん、どうもしないんだけど・・・春休みって美希(みき)も忙しい？？」
「え？別に忙しくないよぉ」
「あ、ほんと？良かったぁ～、あのね、琴実(ことみ)にでん・・・」
「でも、ふう。今、私、京都だよ」
「えっ・・・どうして、京都なの？」
「春休みは毎年、京都のおばあちゃん家に家族で来てんのよ～。で、琴実(ことみ)がどうかした？」
「あ、そぅなんだぁ・・・えっとね、琴実(ことみ)に電話したんだけど、毎日バイトで忙しいって・・・」
「え～！琴実がバイトで忙しい～？？おかしいな？・・・あ、分か

った！」
「え、え？？何が？何が分かったの？？」
「男だよ、男！！」
「男？？」
「そうそう、男！絶対さ、琴実のやつ、バイト先で新しい男が出来たんだよ」
「男って、彼氏のこと？？」
「そうそう！だってさ、あの琴美が、春休み中ずっとバイトなわけなくない？？」
「・・・そうだよね、毎日、働くとは思えないね」
「でしょ！！ガッコ始まったら、絶対、問い詰めてやるっ！！相談も無いとはいい度胸（どきょう）してんじゃん、琴実っ！！」
「・・・あはははは・・・そ、だね」
「あ、ごめ～ん、ふう。今から、ご飯食べ行くみたい～」
「こっちこそ、ごめん。電話、切るね」
「うん、ごめんねぇ～！じゃあ、また新学期、学校でねぇ～！！バイバ～イ！」

美希は、京都のおばあちゃん家（ち）に行ってて、帰ってこないの・・・だから、もう、シバに電話でもしちゃえって。

「もしもし、ふう？？どうかしたの？」
「もぉ～っ！別にぃ、何も無いけどぉ、電話したらダメなの！？」
「えっ！！ごめん、何か、僕、気に障（さわ）ること言った？？」
「だって、だって、だってぇ！琴実も美希も予定入ってて、誰も私のこと相手にしてくんないんだもん！」
「・・・あはは！」
「笑いごとぢゃないよっ！・・・で、シバは何してんの？」
「あ、僕？僕はクラブ活動・・・かな？秋菜（あきな）先輩から、あんた、ス

ジがいいわ、とかなんとか言われちゃって・・・」
「ふーん・・・で？」
「えっと、毎日、朝から晩まで、部活が忙しくて・・・」
「もぅ、いいっ！！」

って、私は電話を切っちゃった。

はぁ～、なんなんだろ、私って・・・

そこに、お母さんがリビングに帰ってきた。
「あ～、あんたは、いつも暇そうでいいわねぇ～」
むかっ！！
「お母さんも、忙しいのっ？？」
「え～、当たり前でしょ。年度末なんだもの」
「はぁ～。もういいよ、みんな」
「何、言ってんの。ふう、ご飯は？」
「いらないっ！」

って、私は自分の部屋に入った。

・・・みんな、忙しいんだね。
私、一人、暇だよ。
だいぶ、さみしいな。

私は置いていた枕(まくら)をお腹(なか)に抱えて、ベッドに寝転んだ。

そうして、私の青春の春休みは、なぁんにも無いまま、終わっちゃった・・・

第３９話　みんなの春休み！（後書き）

美希のおばあちゃんというのは、母方（ははがた）の母です。
京都にある豪邸に住んでるらしいです。
ちなみに、おじいちゃんは、美希がちっちゃい頃に他界してます。

みなさん、こんばんわ☆

さてさて、急にコマをどんどん進めてすみません。
ちょっと、時間軸を現実と合わせようかと・・・
（つまり、現実の時間と同じ季節を歩ませようかと）
思ったので、いきなり次は新学期＆入学式になるわけなんですね。

このままのペースで書き続けれたならば、ちゃんと物語終わらせれるかもしれないです♪

がんばりま～す！！
ちょこっとでも応援頂けると、すっごくうれしいです♪

更新状況のご確認やご声援のコメントは、下記のブログにてお願い致しますっ☆★☆
ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｔｅｔｓｕ．ｓｂｌｏ．ｊｐ／
よろしくお願いします。

第４０話　新学期～&入学式～っ☆　その１

ざわざわ、ざわざわ、ざわわざわわ・・・

今日は、私の静山丘高校の始業式でもあり、入学式なんだよ。

私たち、先輩（・・・に、なるんだよ～！）は、新入生の歓迎のために、こうして、体育館に集まってるわけ。

ってかさ、１年生ってカワイーよねっ？

私たちもあんなだったのかなぁ・・・って、思った。

「あ、そうだ！」

突然、美希が、何かを思い出したみたい。

「琴実～っ！！ふうから聞いたよ。新しい彼氏、出来たんだってぇ？？」

「ええっ！！何ソレ？？ふう、なんか言ったの？？」

ぶんぶんっ！私は、首を横に振った。

「春休み中、ずっとバイトだったっていうじゃん？おかしいと思うんだけどねぇ～、琴実？」

と美希は、不敵な笑みを浮かべた。

「あはは・・・。バレちゃあ、しょうがない！」

と、琴実は、腕を組みながら、笑った。

「実はね、好きな人が出来たんだぁ」

「え、だれ？だれ？」

美希は、身を乗り出して聞いた。

「・・・バイトの店長」

「ええっ、おっさんじゃん？？ついに、おっさんに手を出すの～？」

「いくら私でも、おっさんに、手は出さないよっ！」

「え、まだ若い??」
「うん、今は、２０歳ぐらいだと思う」
「思うじゃないでしょ?知ってるでしょ??」
「あはっ!美希、感やばくねっ?・・・せいか～い!!誕生日まで知ってるよぉ～」
そんな、美希と琴実の会話を聞いてる間に、三鷹先輩が壇上に上がっていた。
「はじめまして、新入生の皆さん。私は、生徒会長の三鷹 将です」と、いつもの歯がキラッってなる笑顔で、あいさつした。
いきなり、体育館に女の子の「キャー」って言う声がたくさん響いた。
ほんと、アイドルみたいだね・・・
「ありがとう」と言って、三鷹先輩は、手を振って声援に応えてた。
「さて、今日から、我が静山丘の一員となる新入生の皆さん、合格おめでとう。
そして、これから、一緒に高校生活を楽しんでいこうね」
「それよりさぁ、美希。三鷹先輩と秋菜先輩って付き合ってんの?」
琴実と美希は、まだ話続けてるみたい。
「どうだろうな?・・・たぶん、付き合ってないんじゃないかな?」
美希は腕を組みながら、答えた。
「付き合ってる、ってウワサ。ちょ～流れてない??」
「ああ、知ってるけど・・・でも、どちらかと言うと、秋菜先輩の下僕的な、感じかなぁ～」
「・・・では、ここで、2年生代表から挨拶してもらいます。2年

生代表、楠木君、廷上君、よろしくね」

へぇ～、シバが代表なんだぁ。って、私はぼけーって、聞いてたら、

「あれ？ふう、今、呼ばれたくね？？」

って、琴実が言ってきた。

「えっ？？だって、私、何も知らないよ」

「マジ、呼ばれたって！！」

そう言われたら、呼ばれたのかなぁ・・・？？

すると、私は肩をポンって叩かれた。

あ、シバ。

「ふう、早く壇上に上がらなくちゃ！」

「え、何言ってるの、シバ？えっ？？私？代表？？」

シバは、軽く頭を縦に振った。

「2年生の代表？？私？？ええっ～！！どうして、どうしてっ？？何がどうして？？」

「あれ、聞いてなかった？まぁ、いいや。とりあえず、上行こうよ」

「無理、無理ぃ～！！」

って、言ってるのに、シバは私の手を引っ張って・・・私は壇上までやってきちゃった。

仕方がないから、上がるけどぉ～。

どうしよ、こんなの緊張するよぉ～・・・

って、思ってる間に、一番上の段差で、つまずいて、こけちゃった。

ドッって笑い声が上がる。

すると、シバが駆け寄ってきて、私を起こしてくれたんだけど、どうして私はこんな恥ずかしい思いをしなくちゃいけないのさ！！

三鷹先輩も、近づいてきて、そっと私の耳に、「大丈夫、ふうちゃん？楠木君の後ろで立ってるだけでいいからね」と言った。

「あ、はい」と、私はシバのななめ後ろに立たされた・・・

あ～あ、こけるし、朝ちゃんとセットしてないし・・・さいあく。ちゃんと、セットしてから、ガッコ来るんだった。

あ！

こんな気持ちのまま、次回に続きま～す・・・

第４０話　新学期～&入学式～っ☆　その１（後書き）

三鷹（みたか）に会いたくて、静山丘高校（しずやまがおか）に入学した女子も多いとのことです。

みなさん、こんばんわ☆　作者のＴＥＴＳＵ（てつ）です！

もう、春ですね～！！

入学や入社や、「新」という文字が氾濫（はんらん）するこの時期。

私も、昔を思い出して、気分一新☆がんばろうっと！！

さて、ようやく、彼女たちも2年生になりました。

やっぱ、高校生活は、２年が一番楽しいと思うんですけどね。

どんどん学園コメディ化していきます（笑）

これからも、よろしくお願いします☆

ちょこっとでも応援頂けると、すっごくうれしいです♪

更新状況のご確認やご声援のコメントは、下記のブログにてお願い致しますっ☆★☆

ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｔｅｔｓｕ．ｓｂｌｏ．ｊｐ／

よろしくお願いします。

第４１話　新学期～&入学式～っ☆　その２

シバのスピーチはすごく良かった！

っていうかさぁ、シバって緊張とかしないのかなぁ？？

いつも、普通ってゆうか、普通なんだよねぇ～。

すごいよねぇ、シバって。ほんと。

私は、シバがスピーチを終えて、一礼したから、私も遅れて一礼した。

そのまま、今度はこけないように、ゆっくりゆっくり、階段から降りて、席に戻ったんだけど、恥ずかしくて、恥ずかしくて、まわり見れないよっ！

「やっぱ、ふうだね」

席に戻るとすぐに、琴実が声をかけてきた。

「もう～。何なのさ、この罰ゲーム！！」

「それにしても、シバ君は堂々としてるねぇ・・・」

と、腕を組んで前を見ながら、美希は、感心してた。

「それよりさぁ、どうして、赤点のふうが、２年生代表なわけ？」

「知らないよ～！私が聞きたいぐらいだよっ！！美希は、どうしてか、知らない？」

「うん、私も聞いてないよ。でも、練習中に秋菜先輩が来て、人が足らない、とか、なんとか言ってたような気がする・・・」

「ええ～、なんだか、いやぁな予感がするんだけど・・・」

そう言ってる間にも、入学式は進んでいって、最後にやっぱり、あの校長先生のスピーチが・・・

「これ、マイク入っとるかね？三鷹君」
「あっ、はい。入ってます！」
「え～、ではコホンっ！」
「わしが静山高校校長、松尾すすきである！」
し～ん・・・と、体育館を静かにして、入学式は終わった。
っていうか、誰か校長に、高校の名前間違ってる！って言ってくれないのかな？？

「ねぇねぇ、クラス一緒かな～！！看板あったから、見に行こ～！」
私はそう言って、琴実と美希と一緒に入り口に向かった。

「あ、みんな一緒じゃん！」
琴実が看板を見て、そう言った。
「それよりさぁ、また担任も一緒じゃんかよ～」
って、ぶーぶー琴実は言ってるけど、私はけっこう嫌いじゃないな、安部先生。

だって、最近、登場してないけど、私と一緒でポテト好きなんだもん。
・・・まぁ、ただそれだけの理由だけど。
そこに、久しぶりに安部先生がやってきた。
「お、廷上に、篠山に京極か。今年もよろしくな」
「あ、安部先生。よろしくお願いします」
って、私はあいさつした。
「ところで、先生・・・」

美希が、神妙な面持ち・・・なんか、むずかしそうな顔して言った。
むつかしい言葉を使うのは、苦手～。
あ、この間、面持ちって覚えたんだ。
どうして、面のことを面って読むんだろぅ・・・？？

「ああっ！！おもしろい、って漢字で書くと、面白いって書くんだよね？」
私は、今考えてたことが、声に出ちゃってた。
「ふう、びっくりするじゃん・・・？」
「だってね、琴実～。顔を白く塗って、人を笑わせてたから、面白いって書くと思うんだぁ～」
「いや、ふう。それ違うくね？面白いは、目の前が真っ白いぐらい景色がキレイ～ってところから、来てるんだって」
「へぇ～。琴実、物知りだね～」
まぁ、どってもいいんだけどね。
「ふう。話続けてもいい？？」
美希は、あきれながら私にそう言った。

「ええと、1年の時と、全くクラスメートが変わっていないんですけど・・・？もしかして」
「おっ！京極は、なかなか鋭いな。そうだ、3年間同一クラスなのだ！」
「ええっ！？」
私たち、3人は同時に驚いた！
「だって、じゃあ、何の為にこの看板出してんの？先生」
「分からんか？篠山」
「分かんない！」
「ジョークだよ」
「・・・何の？？」
「いやぁ、だってね。団長・・・いや、違った校長だっけ？うん、

校長が夢と希望を生徒に与えるとか、なんとか」
「先生、意味ねーじゃん。それに、」
「まぁ、先生もよく意味は分からんのだ、あはは、あはははは」
って、先生は、頭かいてごまかしてるけど、じゃあ私たちは無駄足(むだあし)だったってことだよねぇ～。

「ふう！」
って、シバの声だ。
「あ、ふう。ここにいたんだ。探したよ」
そう言って、走りながらシバはやってきた。
「うん、今ね、みんな一緒かなぁ～って、看板見てたんだよ」
「・・・と言っても、何の意味もない看板だけどな」
美希は腕(うで)を組みながら、私の言葉を補足(ほそく)した。
「えっと、とりあえず、先輩(せんぱい)から、生徒会室に来て欲しいんだって」
「えっ？私？？今すぐ？」
「うん、うん」
シバは、頭を縦(たて)にブンブン振ってる。

そうして、私はそのまま、学校の一番上にある生徒会室まで、連れていかれた。

第４１話　新学期～&入学式～っ☆　その２（後書き）

先生たちからの松尾校長の呼び名は、団長です。

みなさん、こんばんわ☆　作者のＴＥＴＳＵ（てつ）です！

ついに新学期とか始まりました？？

私は、去年も今年もあまり大差が無いので、少し寂しいですけど、新しく学校に行く人、新しく仕事する人、がんばってくださいね。

そういや、３年間、クラスメート一緒で担任も一緒って・・・作者都合です。すみません・・・（笑）

だって、クラスメート変えたりしたら、それでなくても登場人物多いのに、私の頭では覚えられません～っ！！

ってことで、次回は、生徒会を中心に話が進みま～す！

だから、また新しい登場人物も出まぁ～す☆

乞うご期待！

ちょこっとでも応援頂けると、すっごくうれしいです♪

更新状況のご確認やご声援のコメントは、下記のブログにてお願い致しますっ☆★☆

ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｔｅｔｓｕ．ｓｂｌｏ．ｊｐ／

よろしくお願いします。

第４２話　ＴＨＥ生徒会！！その１

生徒会室・・・

それは、高校の一番上にあって、この高校の全ての行事を仕切ってる。

まさか、私がそこに連れていかれるとは・・・思ってもみなかったょ。

だって、成績悪いしさ、私。

スポーツも、ダメだし、授業中はぼけーってしてるしさぁ。

そんな私を連れていってどうするのさ！

「ねぇ、シバ」

「うん、どうしたの？」

「どうして、私が生徒会室に行かなくちゃならないのかなぁ・・・？」

「うーん、どうしてだろうね？僕もまだよく知らないんだぁ」

そうやって、階段を登っていく私たち。

ちょうど、学校の真ん中の一番上にあるんだよね、生徒会室って。

たしか、その横が、放送部で、職員室は、１階にあるんだよ。

「失礼します」

こんこんって、ノックしてから、シバは生徒会室の扉（とびら）を開けた。

中は、ひろーい！
教室、１個分以上はあるよね。
そこに、長い机が真ん中にどんって置いてあって、３人が座ってる。
２人はよく知ってる、っていうかこの間、図書館で知り合ったばっかだけどぉ。
生徒会長の三鷹先輩（みたかせんぱい）でしょ。
それで、副会長の秋菜（あきな）先輩。
そして、・・・？

えっと、生徒会に似合わない人。
おさまりの悪い金髪で、黒のサングラスしてる。
変な人・・・

「シバ君、ふうちゃん、ようこそ生徒会へ」
キラッって歯を輝かせて、三鷹先輩はにっこり笑った。
「さぁ、席にかけて」
「あ、どうも・・・って、そうじゃなくて、どうして私が生徒会室に呼ばれたんですか？」
「ああ、それはね・・・」
って、三鷹先輩が言おうとした時に、秋菜（あきな）先輩が、横やりを入れた。
「今日から、シバ君とふうちゃんは、二年生代表なのよ」
「ええ～！！」
私は、声を出して驚いたけど、シバは普通の顔してる。
どうして、あんた驚かないのよ！

「だって、だって。私、成績も悪いし、生徒会なんて絶対無理ですよぉ」
「大丈夫よ。ふうちゃんは、二年生の副代表だから。シバ君が、二

年生代表ね」
「あ、はい」
そうやって、シバはすぐに受けちゃった。
「だから、ふうちゃんは、シバ君のお手伝いをしてもらえばいいの」
「でも・・・私なんかで、出来るのかなぁ？」
「シバ君は、頭もいいし、スポーツも出来るけど、まだ転校してすぐだから、分からないこと多いでしょ？だから、助けが必要なのよ」
「はぁ・・・」
でも、秋菜先輩が決めたってことは・・・やるしかないじゃん。

「でも、生徒会って、もっと3年生多くなかったですか？どうして、3人？？」
「それはねぇ・・・」
と、三鷹先輩は小声になって、
「副会長の人使いの荒さにみんな辞めてしまったんだ・・・」
「あら、会長、今何かおっしゃいました？？」
「いいぇ、何も・・・何も言ってません」
慌てて、三鷹先輩は否定した。

「ほんっとに、不甲斐ない！受験勉強だの、遊びたいだの、学校生活を楽しみたいだの、ほんっと、みんな身勝手よね」
そう腕を組みながら、秋菜先輩は言った。

あ、だから、美希が秋菜先輩が人がいないって言ってたんだ。
え、それで、私？？
・・・大丈夫かなぁ、私の未来・・・

「まだ、もう一人を紹介してなかったね。ふうちゃんの友達の、琴実ちゃんのお兄さんの篠山君だ」
三鷹先輩は、そう言って、金髪のサングラスを紹介した。

ええっ！！
この間の、マスクと赤マントの琴実のお兄ちゃん！？
私をラ・ラァって言った人だ！

「今の私はクワトロ・バジーナ大尉だ。それ以上でもそれ以下でもない。」
そう、琴実のお兄ちゃんは腕を組みながら、どこ見てるのか分からないけど、言った。
「あ、はぁ。よろしくお願いします」
私はそう言うしかできなかった。

「篠山君はね、生徒会が禁止してるのに、マスクとマントを着用して学校に来るから、いわば、社会奉仕の一環よ」
「社会奉仕・・・ですか？」
私は、秋菜先輩に聞いた。
「うん、そうよ！私に楯突こうったって、そうはいかないから！ねぇ、篠山君？」
「・・・これで私は自由を失った・・・」
お兄ちゃんは、悲しそうな声でそうつぶやいた。

「まだ、一年生の生徒会代表を紹介していなかったね。もうすぐ来ると思うから、もうちょっと待ってくれないか？」
三鷹先輩は、苦笑しながら、そう言った。

すると、
コンコンっと、戸を叩く音がした。

「失礼します」
そう言って、扉が開いた。

第４２話　ＴＨＥ生徒会！！その１（後書き）

琴実兄のマスクとマントは、生徒会に没収され、ヤフオクで売られて、生徒会の軍資金となったそうです。

みなさん、こんばんわ☆　作者のＴＥＴＳＵ（てつ）です！

おおっ！！生徒会！？

私は、高校在学中、生徒会とは対極にいましたので、実は生徒会が何をしているのか、全く分かりません。

だって、バイトばっかりしてたし、体育祭の日なんか、知らずに登校したら、運動場でみんなが行進していてびっくしした記憶があります（笑）

まぁ、そんな私が高校生活を小説で書いて、なんと生徒会を書くことになってしまったんですから、多少変なところあると思いますが、見逃してやってくださいね・・・

さて、次回は、私の好きなキャラクターがまた増えます！！
ふうと、いいコンビだと思うんですけど・・・どう絡むんだろ？

私も楽しみです～☆乞うご期待ください！

ちょこっとでも応援頂けると、すっごくうれしいです♪

更新状況のご確認やご声援のコメントは、下記のブログにてお願い致しますっ☆★☆

ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｔｅｔｓｕ．ｓｂｌｏ．ｊｐ／
よろしくお願いします。

第４３話　ＴＨＥ生徒会！！その２

ガラッと戸が開いた。

そこに立っていたのは、２人。

一人は、めがねをかけた男の子で、もう一人は、ストレートの黒い髪の女の子。

「新一年生の二人。代表の遠藤君と、副代表の霞ちゃんだ」

立ち上がって、三鷹先輩は、私たちに紹介してくれた。

「あの・・・、遠藤　信一です。よろしく」

スポーツしてそうだけど、めがねをかけていて、賢そうで顔もそこそこいいじゃん。

でも、ちょっと生意気そうだけど・・・

もう一人の女の子は、すっごく幼い顔で、ちょーカワイイんだけど、ちょっとのんびりした感じ・・・かな。

「・・・」

「・・・」

「・・・あの、霞ちゃん、自己紹介を・・・」

はっ、ってして、霞ちゃんという女の子は、口に手を当てた。

「うち、霞　亜由美って言いますぅ～。この間、うち、大阪からこっちに来たばっかりで、よく分からへんことばっかやけど、よろしくお願いします」

と、ゆっくりおじぎした。

「遠藤君は、サッカー推薦で入学したんだけど、結構、頭もいいのよね。それで、霞ちゃんは、大阪からこっちに来たばっかりだから、ちょっと言葉がおかしいけど、仲良くしてあげてね」
と、秋菜先輩は、説明した。
そして、私の方を向いて、
「そうね・・・ふうちゃんと、霞ちゃんが似てるから、ふうちゃん面倒見てあげてね」
「えっ、私も全然、生徒会のこと知らないんですけどぉ・・・」
そう、言ったんだけど、秋菜先輩には伝わらなかったみたい。

とりあえず、私たち7人は、なが～い机に座った。

「では、新生徒会の初めての任務を紹介する～！！」
そう、意気込んで、秋菜先輩は、黒板に大きく文字を書いた。
「クラブ活動！！この時期、いっせいに、各クラブは新入生の獲得に力を入れる。しかしっ！！」
そこで、秋菜先輩は一呼吸おいた。
「毎年、無理やりクラブに入学させられた生徒がたくさん出没する。そんな生徒たちを助けるのが、私たちの初任務だっ！」

「あはは、まぁ、つまり陸上部のことだよ」
ギラッって、秋菜先輩が、三鷹先輩をにらみ付けた。
「・・・いや、あの・・・」

「ふう先輩。うちなぁ、よく分からへんねんけどなぁ、一つ教えて欲しいことあるねん」
秋菜先輩と三鷹先輩のやり取りを完全に無視して、横に座っている霞ちゃんは、私に聞いてきた。
「うん、どうしたの、霞ちゃん？」

「なんで、大阪の信号より、こっちの信号の方が長いん～？大阪の信号は、変わるの早くて、私、渡られへんかってん～」
と、のんびり～と、ゆっくり～と、私に話しかけた。
「だって、大阪人ってさ、歩くの早いじゃん。私のお母さんも大阪生まれだけど、せっかちって言うか、イライラするっていうか・・・」
「あ、やっぱりそうなん～？なんか、うちだけそうかと思ててん～。良かったわぁ～」
「ところで、霞ちゃんが言う、うち、って家のこと？？」
「え～。家ちゃうで。うち、って私、っていうことやねん～」
「あ～、そうなんだ。うちって言うんだぁ！」
「コラ～！！そこ静かに～！！」
って、秋菜先輩の怒号（どごう）が飛んできた。
でも、霞ちゃんは、全く聴こえてないみたい・・・

「・・・ということで、とりあえず、プラカードを持って、本日から運動場で、呼びかけをすること。いい？分かった？」
「あの～、先輩、一つ聞いてもいいですか？」
一年生の遠藤君が、手をあげた。
「オレ、サッカーの部活が忙しいんで、そんなことしてられないんっすけど・・・」
秋菜先輩は、怒るのかなって思ったけど、上を向いて、ちょっと考えてる。
「そうねぇ・・・私も部活が忙しいし、会長もシバ君も部活忙しいから、部活して無い人がいいわね～」
ギクッ・・・
何か、嫌な予感がする・・・

「じゃあ、呼びかけ運動は、ふうちゃんと霞（かすみ）ちゃんとで、お願いするわね」

「ええ～！！そんなぁ・・・」

何て、損な役なの、私って。
でも、琴実のお兄ちゃんもクラブしてないんじゃあ・・・

「あ、篠山(しのやま)君はダメよ。だって、機動戦士愛好家クラブの部長をしてるんだから、すぐに新入生を部活に誘ってしまうわ」
と、秋菜先輩に言われてしまった。

霞ちゃんは、「ふう先輩。うちら、頼られてるから、しっかりせなあかんねん～」と、ガッツポーズをしながら言ってきたんだけど・・・

ああっ、先が思いやられる・・・

第４３話　ＴＨＥ生徒会！！その２（後書き）

機動戦士愛好家クラブは、正式にクラブ活動として認められていません。

みなさん、こんばんわ☆　作者のＴＥＴＳＵ（てつ）です！

ついに、ついに出演しました～、霞ちゃん！

私の大好きなキャラクターです。

どうしても出したかったから、ここまで作品を続けてこれたことに、感謝感激です☆

なんか、どんどんパロディになっていくんですけど・・・

全然、恋愛、絡んでこないんですけど・・・（笑）

新コンビの「ふう」と「霞」、みなさんのあたたかい目で見守ってやってください。

ちなみに、作者は、めっちゃめちゃの大阪（おおさか）の河内（かわち）っ子です！！

では、次回もよろしくお願いしまぁ～す！

ちょこっとでも応援頂けると、すっごくうれしいです♪

更新状況のご確認やご声援のコメントは、下記のブログにてお願い致しますっ☆★☆

ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｔｅｔｓｕ．ｓｂｌｏ．ｊｐ／

よろしくお願いします。

第４４話　告られた！？

プラカードを持って、私と霞(かすみ)ちゃんは、運動場に立っていました。
もう、桜が咲いている時期なのに、どうしてこんなに寒いの～？？
私知ってる。
この高校が丘の上にあるからだよ。
だから、風がビュービュー吹くんだよぉ～・・・
・・・いや、違うょ。
私たちが、寒いんだよ・・・
「寒いなぁ～・・・」
そう言いながら、霞ちゃんも凍えています。

どうでもいいんだけどさ、プラカードには、「強制入部断固反対！！生徒会」って、書かれてます。
私たちが立って何ができるのさ。
ちゃんと、ハチマキまで作ってくれちゃって・・・
無駄な予算だよ、生徒会。

「おっ、ふう。頑張ってる？」
美希(みき)がやってきました。
「あれ？この子は？」
「えっとね、霞ちゃんって言うんだよ。新入生」
「へぇ～」
「よろしくお願いします」
そう言って、霞ちゃんは、ペコリとおじぎをした。

「うーん、なんだか、ふうと似てるよね？」
「え、そうなのかな」
「うち、ふう先輩と似とるんですか～？」
「へぇ～。関西から来たんだ。そうどすえ～！ふうとよく似てはるわ」
そう、美希は京都弁を真似(まね)して言った。
「ちゃいま」
手を振りながら、霞ちゃんは言った。
「そうどすえ～は、京都弁やさかい、うちら使いまへん」
「ってか、さかい、も使えへんやん」
って、美希は、霞ちゃんをポンって叩いた。
「あ～、しまったぁ～！うち、間違えてしもたぁ～」

霞ちゃんは、真剣な顔して私に言ってきた。
「今のが、ボケとツッコミやで～」と。

・・・笑えません。
何がおかしいのか、全く分からないんだけど・・・

でも、美希は、「あはは・・・いいね！この子」と言って、笑ってるし。
あ～、もうっ、意味分かんないし。
どうして、私が運動場に立ってるの？？
一体、作者は、私に何をさせたいのよ～！って、叫びたい。

「あ！！こんなとこにいたんだぁ～」
って、その時、琴実(ことみ)が走ってきた。
「重大ニュースぅぅぅ～！！・・・ってか、何やってんの、ふう？」
「え？見たら分かるでしょ？？プラカード持ってんの！」
「うん、それは見たら、分かるけど・・・あ、この子、新入生？」

「そうだよ。霞ちゃん。」
「よろしくね、霞ちゃん。・・・ってか、ふうと似てるよね、なんとなく」
「でしょ？琴実もそう思うよね？」
って、美希が琴実に指さして言ってる。
そんなに、似てるのかなぁ？？霞ちゃんと私。
全然、違うと思うんだけど・・・

だって、こんなに、天然じゃないし。
私、関西人じゃないし。
ってか、何がなんだか、もう分かんないし・・・

「そういや、琴実。今、重大ニュースって言ってたけど、何？」
呆然と立ち尽くしている私を無視して、美希が話を元に戻した。
「ああ、そうそう。B組の青山さんっているじゃん？？シバ君がね、あの子に告(こく)られたらしいよ」
「あ、そうなんだぁ～」
「いや・・・あの、ふう？？そうなんだぁ～、じゃないでしょ？」
「え、どうして？？」
琴実が、私をきっと睨(にら)んで言った。
「なんかさぁ～！こう、もっと驚くって言うの？？そんなの無いの？？」
「琴実。ふうにそんなこと言っても伝わらないよ」
美希は腕を組みながら言った。
「よくよく考えなさい、ふう。今まで、廊下(ろうか)で話をしたりとか、夜に電話したりとか、そんなのシバ君に彼女が出来たら、気軽に出来なくなるんだよ」

・・・。
今、考え中。

「え、ダメなの？」
「そりゃダメでしょ～！！」
と、美希は、腕を組みながら、返事した。
「ダメなのか・・・」

う～ん、それは嫌かも。
でも、シバってもてるから、仕方無い気もする～。
そもそも、私って、中途半端（ちゅうとはんぱ）かも。

「うん、うん。美希の言うとおりだよ、ふう。どうするの？とられちゃったら？？」
「だって、だってね。別にシバは、彼氏とかじゃないし・・・私、分からないよ」

・・・ダメだ。
私の小さな脳みそでは、こんがらがってよく分かんない。
これじゃあ、カニの脳みその方が、美味しいよ。
って、考えるの止めちゃった。

すると、そばで聞いていた霞ちゃんが、
「ええっ！シバ先輩の彼女は、ふう先輩や無いんですかぁ～？」
って、驚いてた。

みんな、目が点になって、霞ちゃんを見ていた。

第４４話　告られた！？（後書き）

あちゃ～！！全然、更新出来てませんっ！！ごめんない！

みなさん、こんばんわ☆　作者のＴＥＴＳＵ（てつ）です！

気付いたら、このお話、コメディになっていないでしょうか？

と、心配でもあり、楽しみでもあり、最後まで続けられるのか、心配です・・・

さて、どんどん話は、分からない方向に向かっていって、

どうやら、私にもよく分からないんです！

助けて下さいっ（笑）

次回は、まだ、何も考えてません、ごめんなさいっ！

でも、ちゃんとシバとのお話書く前に、登場人物の整理とか、出来たらおもしろそうです。

ああっ、ハードル上げちゃった・・・

では、次回も、お楽しみにしてくださいね。

こんなお話ですが、ちょこっとでも応援頂けると、すっごくうれしいです♪

お願い致しますっ☆★☆

――

更新

２年の青山さんをＢ組の青山さんに変更しました。
作者も忘れていましたが、
ふう達は、２年生になっていました・・・あわわ。

第４５話　黒猫も言葉を話しちゃった・・・

てくてく・・・
歩く、私。

プラカード持っての、何の意味も意義も持たない苦痛の作業を終えて、私は一人帰り道を歩く。

さっきの、琴実（ことみ）の声が、頭ん中でこだまする。
「今まで、廊下（ろうか）で話をしたりとか、夜に電話したりとか、そんなのシバ君に彼女が出来たら、気軽に出来なくなるんだよ」

そうだよね。
シバに、彼女が出来ちゃったら、私、普通に出来なくなるんだよね。
それって、なんだか、さみしいな・・・

夕陽が、私の背中を真っ赤に染める。

ぶんぶん・・・
「何、考えてんのさ、ふう！」
私は、自分自身に言い聞かせる。
「シバは、何でも無いんだから！！」

「うるさいなぁ」

・・・？
なんか、声がするんだけど、男の人の。
「えっ！！」

私は、声の出るほうを見た。

えっと、見たら、黒い猫だった。
塀(へい)の上で、のんびり寝てる黒い猫。
赤いリボンだか、スカーフだか、よく分かんないけど、黒い猫。
・・・が、しゃべった！

「ええっ！」
どうして、猫がしゃべったの??
え、気のせい??
それとも、私、おかしくなったのかな?

「うるさい。人が寝てる時に、大きな声を出すな」
「だって、猫でしょ?」
「あ、そうだな。猫だな、オレは」

どうして、そう冷静なんですか?
私は、どうしても、ツッコミを入れたくなってきたぁ〜！

「どうした、娘?何か悩み事か?」
猫に、心配されてるぅ〜！！
言えるわけないじゃん、人にも言えないのに、猫に言えるわけないじゃん！！

「いや、何でもないです。ってか、猫のくせに偉そうじゃないですか?それに、私は、娘じゃありません！風花(ふうか)っていう名前があります」
って、私は、猫に何言ってんだぁ〜！

しかし、黒猫は、冷静にかつ、穏やかに言った。

「そうか、悪かったな。オレの名前は、坂本(さかもと)だ。何か、悩み事があると思って心配したんだが、初対面では言えねぇよな」
「初対面とか、初対面じゃないとか、そういう問題じゃないです！ジジさん」
「誰だ？ジジさんって？」
「え、ジジさんじゃないんですか？」
「今、紹介したろ！オレは、坂本だ。気に食わない名前だが、坂本っていうんだ」
「あ～、坂本っていう苗字だったんですね、ジジさんの苗字」
「え？オレに名前なんてねぇよ。誰だよ、ジジって？」
「だって、魔女の宅急便に出てくる、ジジさんでしょ？それで、私が魔法使いになっちゃったんだぁ～。え～、どうしよ、どうしよ」
ってか、もともと、シバも犬だし。私、声きこえてたし・・・
もしかして、私って、魔女(まじょ)？？

「あ～、落ち着けめんどくさい！お前は、まともだ！オレが・・・少し変なだけだ」
「だって、私、犬の声も聞こえるんですよ！おかしいのは、私ですよ～」
「犬の声は、誰にだって聞こえるだろ？」
「聞こえませんよ～っ！！！」
「いや、だって、ワンって吠えるの、聞こえるだろ？」
「違うんです、ワンだけじゃないんです。私は、犬も日本語しゃべってるように聞こえるんです」
「・・・なんか、よく分からんが、まぁ、頑張れ、娘」
「だから、私は娘じゃないです！」
「あばよ」

そう言って、黒猫は、めんどくさそうに、どっかに行っちゃった。

・・・。
え、猫とか出すの、このお話？
ってか、ジジって名前じゃないの？？
というか、また一部の人にしか分かんないじゃん、この話！！
時世ネタじゃん！！！

どうなるの、私？？
一体、ぜんたい、何がなんだか、分かんないよ～！！
あ～、も～！！

「ニャフラック！！」

私は、暗くなってきた空に向かって、叫んでいた。

第４５話　黒猫も言葉を話しちゃった・・・（後書き）

坂本（さかもと）さん、大好きです！というか、ジジが大好きだったから、坂本さんも大好きです！
（ちなみに、坂本さんの名前は、あえて変えてあります）

みなさん、こんばんわ☆　作者のＴＥＴＳＵ（てつ）です！

登場人物の整理を出来たら・・・なんて、前回あとがきで書いていて、
まさかの、新キャラ、黒猫さんの登場です（笑）

今回のお話は、本当に余談で、話の進行とは何の関係も無く・・・
はかせも出せたら、いいな、と・・・私の完全な趣味でごめんなさい。

でもっ、でも、ちゃんとお話を元に戻しますから、寄り道しても読んでくださ～い（泣）

次回は、ふうが自分の気持ちに気付いてしまうお話になるかもしれません。
でも、いっつも、次回予告が、私の気まぐれで変わるので、あてにしないでください！

では、またお会いしましょう！
Ｓｅｅ　ｙｏｕ　ｌａｔｅｒ♪

こんなお話ですが、ちょこっとでも応援頂けると、すっごくうれしいです♪

お願い致しますっ☆★☆

第４６話　ごめんなさい！！

「ただいま～」
私は、家のドアを開けた。
なんか、今日は疲れた。
色々、ありすぎて、よく分からないし・・・

「ふう、どこに行ってたの？」
「あ、お母さん。久しぶりだねぇ～」
「久しぶりじゃないでしょ？今朝会ったばかりでしょ？」
「だってぇ、いろんなことがありすぎて、私には、精神と時の部屋に入った感じだよ」
「何を訳の分からないこと言ってるの？さぁ、早く手を洗ってきなさい」
「はぁ～い」

私は洗面所に向かって、蛇口をひねった。
お母さんが好きなキレイキレイを手にとって、私は手を洗った。

「そうそう、ふう。今日の晩御飯のおかず買ってきてくれた？」

・・・忘れてた。
今日、メール来てたんだっけ。
何を買うかも、覚えてないんだけど・・・

「もしかして、忘れてた・・・とか、言うんじゃないでしょうね？」
お母さんは、台所で何かを切りながら、私に詰問(きつもん)した。

「ま、まさかぁ・・・。ちゃんと、覚えてたけど・・・」

「覚えてたけど??」
「えっと、生徒会で、黒猫がしゃべりかけてきて、告白されたから・・・」
「だから??」
「だから・・・えっと、あの、その・・・」
「だから????」

やばい、これは、やばい！
お母さんは、食べることが、家での唯一の楽しみだから、それを破ると・・・

やられる!!

「ごめんなさい!!」
私は、両手と頭を床につけて、謝った。

「ふーん、何か分からないけど、大変だったのねぇ～」

お母さんは、何かを切りながら、言った。
助かったのかな・・・？
はぁ～、良かったよ・・・

しかし、私の安堵(あんど)は、一瞬にして、音も無く砕けた。

なぜなら、振り向いたお母さんの手には、包丁が・・・
その顔は、まさに、閻魔(えんま)様!!

「今すぐ、買ってきます!!」
私は、後ろを振り返らずに、家を飛び出した。

「はぁはぁはぁ・・・」
私は、携帯を片手に、家を飛び出したけど、何を買ってくればいいのさ？

そこで、とりあえず、メールを読んでみる！
「帰りに、ゴーヤと、バナナを買ってきてね☆　ママより」

がーん！！
再チャレンジ！！
再チャレンジするの？
あの、恐怖の「夏を先取り☆南国的沖縄料理」！？

どうして、そんなに負けず嫌いなのさぁ、うちのお母さん！！
やめようぉ、と、私は言いたい・・・
けど、この状況で、私は家には帰れない。
ゴーヤとバナナを買わないと、私の未来は無い。
けれど、ゴーヤとバナナを買って帰っても、明日は地獄なんだよ。

究極の選択ってやつですか？

私は、溢(あふ)れる涙をこらえようと、必死に、目をつぶって空を見上げた。
涙で、月が見えないよ。
ありがとう、大空よ。
ありがとう、地球よ。
私の生涯に一片(いっぺん)の悔いも無いよ。

そう言い聞かせて、私はスーパーのドアを開けた。

「あれ？ふう？？」
そこには、人間のシバが立っていた。

「え？シバ？？どうして、こんな所にいるの？」
「ただの買物だよ。それより、ふうこそ、どうして、そんなに汗かいて・・・泣いてるの？」
「えっ、ゴミ！！ゴミが、目に入っただけだよ！」
あ～、恥ずかしい！
も～、ちょ～恥ずかしいよ！

「なんでもないよ、なんでもないからね」
「あ、そうなんだ。でも、大丈夫・・・？」
「大丈夫じゃないよぉ～！」
「ええっ！！」
シバの顔、見たら、なんか、分かんないけど、色々、こみ上げてきたよ。

「もとはと言えば、あんたが、問題なんだから！」
「え、ぼくが？何かしたの？」
「え・・・」
「ぼくが、何かしたなら、謝るけど。あ、もしかして、生徒会のこと？？」
「生徒会じゃないもん。そんなんじゃないもん！」
「生徒会じゃないの？でも、ごめんね。急に生徒会入ることになって・・・」
「そんなんじゃないもん！別に、シバが悪いわけじゃないけどさ・・・」
何だかよく分からないけど、涙が止まらない。
シバは、あたふた、あたふたして、優しく謝ってくるけど、優しく

されればされるほど、涙が止まらないのは、どうして??

「ふえ〜ん」

ついに私は、子供のように、泣き出してしまった。

第４６話　ごめんなさい！！（後書き）

さぁ、もうすぐ夏も終わりますけど、みなさん、今年の夏も楽しめたでしょうか？
私は、仕事に忙殺されまくりで、あっという間の夏でした・・・（泣）

みなさん、こんばんわ☆　作者のＴＥＴＳＵ（てつ）です！

私の大好きな登場人物の一人、ふうのお母さんの麻実（まみ）さんは、仕事が大好きですが、それと同じくらい料理をするのが大好きなんです。
けれど、いつも失敗ばかりしていて、あまりお料理は得意では無いようです・・・

ちなみに、「夏を先取り☆南国的沖縄料理」は、「第３７話」と「第３８話」をご参照ください。

さて、次回は、久しぶりに「星がある公園」を舞台にしようかと思っています。
５０話に向けて、話を急展開させていければ、と思っていますので、ご期待くださいね☆

こんなお話ですが、ちょこっとでも応援頂けると、すっごくうれしいです♪
お願い致しますっ☆★☆

第４７話　星と星の夜空の下で　その１

「どう、落ち着いた」
「・・・うん」

と、私は、コンポタの缶を握り締めて、星型のトンネルの上に、シバと一緒に腰掛けてる。
シバが買ってくれたゴーヤとバナナのスーパーの袋と一緒に。

今日は、星がキレイだなぁ～。

私は、上を向いて、何気なく思った。

「久しぶりだね、ここに来るの」
私は、上を見上げながら、つぶやいた。

「僕は、けっこう来てるよ」
横目で見たシバも、同じように空を見上げてる。
「どうして？」
「うーん、どうしてだろうね」
「それじゃあ、答えになんないじゃん」
「そうだねぇ」

雲が無いんだね、今夜は。
星を見てるんだけど、星に見られてる気分。
なんか、変な気分。

「あのね、シバ」
「ん？」

「今日ね、なんか色々、いっぱいあったんだよ。だから、頭がいっぱいなっちゃった」
「うん、僕も。今日は大変だったよ」
「・・・シバは、私の理由・・・聞かないの？」
「ふうは、言いたくなったら、自分で言うじゃん。しかも、いきなり」
シバは、笑った。

「そうかなぁ～」
「言いたいんだったら、いつでも聞くよ」
「う～ん・・・」
聞きたいけど、聞けないよ・・・
だって、今の関係が壊れるかもしれないし・・・
っていうか、このままでも壊れるかもしれない・・・

「う～ん・・・」
「悩むね、ふう」
「うん、悩むよ、すっごく」
「そんなに大切なことなの？」
「えっ？」
私は、シバに視線を落とした。
でも、シバの方が身長高いから、落としたというより・・・
どっちでもいっか。

「少しでもふうの心が晴れるなら、聞くよ」
「うん・・・でもね、なんて言えばいいのかなぁ～。言いたいけど、言えないってやつ？」
「言いたいんだったら、僕なら言うかな」
シバは、相変わらず、上を向いたままだ。
「どうして？」

「だって、僕は、後悔だけはしたくないから」
「・・・もしかしたら、言ったら後悔するかも・・・って思ってても？」
「う～ん・・・言うだろうなぁ。言ったり、したりした後悔よりも、言わなかったり、しなかったりする後悔の方が・・・僕は嫌かな」
「そっかぁ・・・」
航海、先に遭わず・・・ってやつですね。

「じゃあ・・・」
ごくって、つばを飲み込んだ。
どうしても聞きたいから、やけくそです。
「青山さん・・・っていう人に告白されたの？」
と、私なりのありったけの勇気を込めて聞いてみた。

「・・・あぁ～」
シバは、気のない返事。
なんだそれ！！
でも・・・

「・・・どうなのかな・・・って思って・・・」
「・・・されたよ」

「あっ、そうなんだ。そうだよね～。なんか、すごくキレイな人らしいから、すごいね、シバ。あはは・・・」
私は、頭をかいて笑った・・・けど、ちょっと失敗。

昔、聞いたんだけど、B組の青山さんって、すごく人気があるんだって。
そんな人から、告白されたら、誰だって・・・

「でも、断ったよ」
「えっ、うそ？ほんとに？なんで？？」
信じられない・・・

「理由なんてあるのかな？」
「何それ？よく分かんないけど・・・」
「同じこと、青山さんにも言われた」
シバは、苦笑した。
でも、ずっと上を向いたままだ。

「笑えないよ、全然」
私は手で、ぶんぶん空を切った。
「まぁ、冗談（じょうだん）では無いんだけど・・・」
「そうだね。笑い話にもなんないね」
「まさか、ふうにそんな事聞かれると思わなかったよ」
「だって、ちょっと・・・気になったっていうか・・・」
う～ん、分かんないけど。
「・・・興味本位ってやつで、聞いてきたの？」
「ううん、ちがう。ちがうよ！」
慌てて否定したけど・・・なんかシバ、怒ってる？

そう思ってると、
「だって・・・」
と、シバは言って、視線を空から私の瞳に移した。
「僕は、ずっとふうが好きだから。」

「え？」
風が私の髪をなびかせる。
彼の瞳が、まっすぐ私の瞳をつらぬいている。

私の刻(とき)が止まったようだった。

「僕は、ふうの気持ちが知りたい」

「だって、私なんか・・・」

私は、視線を外さざるを得なかった。

第４７話　星と星の夜空の下で　その１（後書き）

暑いですよ～！！寝苦しいですよ～！！
夏真っ盛りなんですけど、物語は、まだ４月なので、ちょっと肌寒い・・・
物語と現実の季節が合わなくて、すみません。

みなさん、こんばんわ☆　作者のＴＥＴＳＵ（てつ）です！

前回のあとがき通り、なんとか「星谷公園（ほしのたに）」を舞台にすることが出来ました☆

良かった、良かった～！・・・何が？と言われても困りますが・・・
はい、すみません。ただの自己満足です・・・

さて、次回は、私が絶対入れたいセリフがありまして・・・
私の好きな漫画「天ない」から、ちょっとご拝借させて頂ければと。

では、次回「第４８話　星と星の夜空の下で　その２」で、お会いしましょう～！
Ｓｅｅ　ｙｏｕ　ｌａｔｅｒ♪

こんなお話ですが、ちょこっとでも応援頂けると、すっごくうれしいです♪
お願い致しますっ☆★☆

第４８話　星と星の夜空の下で　その２

視線を外した私は、自分の小さい頃と向き合ってた。
私は、小学校に上がる前、お母さんに聞いた。
「どうして、私にはお父さんがいないの？」
周りの友達には、休日遊んでくれるお父さんがいる。
でも、私にはいない。
お母さんと二人だったし、お母さんはいつも忙しそうだった。
物心がついた時から、お父さんがいないということを、お母さんに聞いちゃいけないんだ、って私は思ってた。
だって、寂しかったから。
今でも、私のわがままだったって思う。
そんな小さい時の記憶なのに、私には今でもすごく鮮明に心に焼き付いてる。
お母さんは、「お母さんと、一緒じゃ嫌？」って聞いてきた。
私は、ちっちゃかったけど、精一杯、聞いたんだ。
だから、それは答えになってないって思った。
「嫌・・・じゃないけど」
これも、精一杯答えた。
「じゃあ、いいじゃない。このままで幸せでいいじゃない？」

「だって、そんなことじゃないもん！」
頭が回らなかった。
言いたいことは、そういうことじゃなくて、どうして、私にはお父さんがいないのかっていうこと。

「そんなことじゃない？って、どういう意味？？」
「・・・分かんない・・・」
私は、言いたいことがうまく言えなくて、泣いていた。
聞きたいけど、聞けなくて、お母さんは私にご飯を食べさせるのに、とっても頑張ってくれていて、だから、うまく言えなくて。
どうしたら、うまく言えるのか、分からなくて、私は、泣いた。

お母さんは、私を抱きしめて言った。
「ごめんね、ふう」

その優しさが、余計に私を辛くした。

言わなくちゃ良かったんだ。
何度も、そう心に思った。

お母さんは、いつも、「忙しい、忙しい」って言っていたけど、一度も私に、「ふうの為に、忙しい！」って怒ったことも無かった。
だから、私のわがまま。
そう、私のわがままだった。

純粋に、ただ、お父さんがいる子がうらやましかった。
お母さんは、私のために頑張ってくれてるのに・・・
同時に、私の心の中で、お父さんのことが嫌になっていった。

見たこともない、お父さん。
お母さんは、一人で私を産んだから、私は一度も見たことが無い。
抱かれたこともない。
名前を付けてもらったわけでもない。

何もしてくれない。

私の男性不信は、お父さんが原因かもしれない。

絶対、好きになんてならない。
それに、私もきっと失敗する。
だから、好きにならないように、好かれないように、私は思ってる。

私なんて、好きになってくれる人なんて、いやしない。

・・・そう、思っていた。

でも、目の前にいる、シバは、とても優しくて・・・私の理想のお父さん。
何でも聞いてくれて、私、嫌われようとも思って、すごいワガママばっかり言って・・・

それでも、私の事、好きになってくれてる。

どうしたら、いいの？
私は、ちっちゃい頃の自分に、そう問いかけていた。

第４８話　星と星の夜空の下で　その２（後書き）

最近、いきなり涼しくなりましたね。
風邪をひかないように、気をつけてくださいね。

みなさん、こんばんわ☆　作者のＴＥＴＳＵ（てつ）です！

今回は、私自身、書かされていて、なんかせつなくなりました。
ふうが、男性を嫌う、若しくは、好きになることが出来ないって理由、作者の私も分かったような気がします。

実は、私が書いているようで、私が書いていないんです、このお話って。
勝手に、情景が浮かんで、それを書き連ねてるだけなんです。

私もびっくりしました。
自分で、書いているんだけど、勝手に書いてる、いや、書かされてる。
そんな気分を味わって、読んでみて、せつないな・・・と。

変な話ですみません・・・

では、次回「第４９話　星と星の夜空の下で　その３」で、お会いしましょう～！
Ｓｅｅ　ｙｏｕ　ｌａｔｅｒ♪

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――

こんなお話ですが、ちょこっとでも応援頂けると、すっごくうれしいです♪
お願い致しますっ☆★☆

更新状況のご確認やご声援のコメントは、下記のブログにてお願い致しますっ☆★☆
ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｔｅｔｓｕ．ｓｂｌｏ．ｊｐ／
よろしくお願いします。

第４９話　星と星の夜空の下で　その３

「正直でいいんじゃないかなぁ」

思いがけない、ちっちゃい頃の私自身の言葉だった。

「本当に・・・正直でいいの？ちっちゃい頃の私は、それで納得するの？」

心の中で、私は、昔の私に聞いている。

「だって、お父さんがいるの、うれしいよっ」

それは、本当に正直な私。

ちっちゃい頃の、あの頃の私。

背伸びしてたけど、本当は寂しがりの私。

すっごくちっちゃいけれど。

でも、今の私よりも、もっとしっかりしてた私が、今の私に言ってくる。

「無理しなくていいよ。あたしもうれしいもん」

「本当に、そう思うの？」

「うん、今までいい子にしなくちゃって思ってたけど、疲れちゃった」

「本当に、疲れたね」

「今の私を見てるとね、あたしは、何か違うなぁって思うの。いいこともあるのに、どうして、どうでもいいの？って思っちゃう」

「・・・うん」

「だからね、あたし達は、頑張ったじゃん。うそをつかなくても、いいよ」

うん、ありがと。
そう、私はつぶやいた。

そうして、ちっちゃい頃の私と、向き合えた。

そんなに、時間は経(た)っていなかった、と私は思う。

私は、顔上げて、シバに言った。

「わ、私も、シバのこと・・・好き」

恥ずかしいのに、とっても大きな声になっちゃった。
もっと、恥ずかしい・・・
だから、すぐ、顔を下に向けた。

たぶん、私、顔、真っ赤だ・・・

シバは、私を見てる。
たぶん、見てる。
だって、視線、感じるから。

・・・でも、何も言わない。

だから、私も声を出せない・・・

静寂が、星谷(ほしのたに)公園を包む。

だって、今、言わなくちゃ。
失いたくない。

私は、シバを失いたくない。
そういう気持ち。

いっつも優しくしてくれるシバを、他の子に取られたくない。
たとえ、ちょっとの間でも、いい。
こんな私だから、少しでも、いい。
私に、幸せを下さい。

そう、私は、下を向きながら、思ってた。

シバと初めて会ったこと。
なんか、汚い柴犬。
不思議な体験。
退屈だと思っていた人生を、変えてくれた人・・・いや、犬。

でも、今は、かっこいい男の子。

そして・・・過去の私と向き合わせてくれた大事な人。

もう、自分を偽(いつわ)るのは、やめよう。
我慢して、背伸びして、言いたいこと言えなくて、どうでもいいやって思って・・・
そんなこと、やめよう。
ちっちゃい頃の私に言われたように・・・

私は、すごく嬉しくなった。

でも、待っても待っても、シバからの返事は、無かった。

「・・・あの、シバ、何か話してくれな・・・い？」

私は、おそるおそる上を向いた。

あれ・・・シバがいない・・・んだけど。

もしかして・・・

視線を下にすると・・・やっぱり。

シバは、舌を出して、ちょこんと座ってる。

柴犬の姿で・・・

私は、その場で固まっていた。

第４９話　星と星の夜空の下で　その３（後書き）

すみません、ブログで昨日更新します、とか言いながら、
更新日が、今日になってしまいました・・・
申し訳ございません。

みなさん、こんばんわ☆　作者のＴＥＴＳＵ（てつ）です！

やっと、やっと、ふうは、自分のことを認めましたね。

やっぱり、人は、愛されることと、愛することで、幸せになれると思います。
でも、なかなか難しいですけれど・・・

ふうとシバが、仲良く、本当にお互いがお互いを想いやっていけたらいいですねぇ～。

「人生短し、恋せよ、乙女」です。
恋愛は、怖いものですけど、それ以上にたくさんのことが分かるって思います。

キャゼルヌさんも言ってました。
「独身生活１０年でさとりえぬことが、一週間の結婚生活でさとれるものさ。よき哲学者の誕生を期待しよう」
（銀河英雄伝説　第６巻　飛翔篇から抜粋　著：田中芳樹氏）

全くもって、その通りですね（笑）

では、次回「祝第５０話　特別編　風の花ラジオ」で、お会いしま

しょう～！

Ｓｅｅ　ｙｏｕ　ｌａｔｅｒ♪

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――

こんなお話ですが、ちょこっとでも応援頂けると、すっごくうれしいです♪

お願い致しますっ☆★☆

更新状況のご確認やご声援のコメントは、下記のブログにてお願い致しますっ☆★☆

ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｔｅｔｓｕ．ｓｂｌｏ．ｊｐ／

よろしくお願いします。

祝第５０話　特別編　風の花ラジオ

ふう「おめでとうございま～すっ！
ついに来ちゃいました第５０話！
今まで読んでくれていた最高の人も、今日始めて読む素敵な人も、
第５０話を祝ってくださ～い！！

・・・ということで、今回は、特別編。
風の花ラジオ、で、お送りしたいと思いまぁ～す！！
また、パーソナリティは、わたくしこと、風の花主人公の、廷上（ていじょう）
風花（ふうか）と、共演頂いている仲良し３人組の、琴実（ことみ）と美希（みき）で、お送りし
たいと思いまぁ～す☆
では、二人にも自己紹介してください」

琴実「おめでと～！！え～、私は、ふうと同級生の、篠山（しのやま）　琴実（ことみ）で
す。えっと、風の花の華やかさ担当です！」

美希「琴実、ウソついちゃダメじゃん！！私も、ふうと琴実と同級
生の、京極（きょうごく）　美希（みき）です。よろしくお願いします」

琴実「え～、ウソじゃないじゃん！！だって、私がいないと、風の
花、暗い話になっちゃうじゃん」

美希「あ、そうかも。そう言えなくもないね。たしかに、琴実は、
明るさだけはあるもんね」

ふう「えっと、あの・・・ラジオ、進めてもいいかな？」

琴実「あ、ごめんごめん！！それよりさぁ、ふう。どうして、今回

は、ラジオ形式なのさぁ～？それに、ふうが、司会とかって、出来んの？」

ふう「出来るよっ！私だって、やれば出来るもんっ！えっと、ラジオ形式にしたのは、面白そうかなって、思ったから・・・かな」

美希「え～、何それ？つまり、いきおい？ってこと？」

琴実「あ～、私、いきおいなら、負けないよっ！」

ふう「だって、分かんないけど、面白そうだったんだもの・・・特別編だし、ちょっと違うことしたいかなぁ～って」

琴実「でもさ、これって、ラジオじゃなくて、いつもどおりの私たちのガールズトークじゃん！？」

美希「あ、女子会ってやつ？？」

ふう「あ、でもね、でもね。ラジオだから、全部、オンエアされちゃうから、危ないこと言っちゃダメだよ。特に琴実は！」

琴実「どうして、私なのよ！」

美希「でもまぁ、この話が、５０話も続いたのってスゴイな。いつもの作者なら、とっくに投げ出してるよね？」

ふう「うんうん。主人公の私ですら、スゴイって思った。第１０話ぐらいで、満足して、途中で終わるって思ってたもん」

琴実「それは、私たちのおかげだよね～」

美希「私たちの功績は、大きい！」

ふう「え～、私じゃないの、一番は？」

琴実「いやいや、違うよ。ふうだけの話だったら、絶対、途中で終わってるって」

美希「そうだよねぇ～。少し書くのが遅れた時には、必ず新しい人物だしてるもんね」

琴実「それだけ、作者の頭の中は薄いんだよ～っ」

美希「言えてる～。すぐ、ぱくる癖。あれ、やめた方がいいよねぇ～」

琴実「そうそう。ぱくるんだけで、ネタだから、飽きたら出てこないってやつ～？」

美希「それじゃあ、一生、作家なんてなれないよ。すぐ訴(うった)えられるじゃん」

琴実「あ～あ～。私たちの話が書店に並ぶ時が来るかも・・・って、ちょっとでも思ってたんだけどなぁ～。がっかり」

ふう「・・・あの～。私、置いていかれてない？」

美希「置いていってないよぉ。ちゃんと、ふう、聞いてるでしょ？」

琴実「そうそう。だったら、それで、いーじゃん！」

ふう「何がいいのか、さっぱり、分かんないよぉ」

美希「分からない方が世の中いいこともあるものだよ、ふう」

琴実「そうだよ～。でも、結局、私たちが言いたいことだけ言う・・・みたいなラジオになってるよね」

美希「そもそも、これって、ラジオって言えるのか、どうなのかも疑問だわ」

琴実「だって、普通さぁ、お手紙とか来るじゃん、ラジオって」

美希「・・・琴実。それを期待しちゃダメだって。そんなに、面白い話でもないから、お手紙来ないし・・・」

ふう「もうっ、美希！！それじゃあ、今日、読んでくれてる素敵な人達も、読んでくれなくなるじゃん！！」

美希「だって、本当のことじゃん」

琴実「そうそう、ふう。あんまり、主人公だからって、肩もっちゃいけないよ～」

美希「冷静に、かつ、客観的に受け止めなくちゃ」

ふう「え～、そうなの～？？それは、ちょっと・・・っていうか、だいぶショック」

琴実「それよりさぁ。これから、どういう話になっていくの、これ

？」

美希「う～ん・・・。やっぱ、学園モノで終わるんじゃないの？」

琴実「私の恋ばな、とか、しちゃおっか？」

美希「全然、期待してないから・・・」

ふう「あの・・・あの。みんな、聞いて！？」

琴実「どしたのさ、ふう？」

ふう「あのね・・・もう、時間なんだけど？」

美希「え？早くない？？」

琴実「私、全然、しゃべってないんだけど！！」

ふう「だって、だって！みんな、物語について、ちゃんとしゃべってくれないもん！」

琴実「あ、ふうが怒った～？」

美希「ダメだよ、琴実。ふうをからかったら」

ふう「どうせ、いーもん！どうせ、主人公なのに、のけ者だもん」

琴実「いや、そんなことないよ、ふう。帰りに駅前のケーキ、食べに行こうよ」

ふう「・・・琴実」

琴実「何??」

ふう「・・・琴実のおごりで」

琴実「うっ・・・うん。私のおごりで」

ふう「美希。私、特製パイナップル丸ごとジュースも飲みたいな」

美希「えっ!あれは・・・1，500円もするじゃん!!」

ふう「・・・飲みたいな、わたし」

美希「はい、はい!!分かった、分かった!」

ふう「えへへ・・・じゃあ、今日のラジオはここまでです!
今まで読んでくれていた最高の人も、今日始めて読む素敵な人も、
お付き合い頂いて、ありがとうございました。
どんどん物語は、これからが面白くなっていく・・・と期待しちゃいたいので、
更新速度は、とっても遅いんですけど、
これからも、風の花、応援よろしくお願いしまぁ〜す。」

一同「よろしくお願いしまぁ〜す、ぺこっ」

作者「・・・。あれ?特別ゲスト、呼ぶの忘れてませんか?」

祝第５０話　特別編　風の花ラジオ（後書き）

最近、あわわ、あわわの忙しさです。
ウェブページ製作のお仕事を立ち上げたり、
来年早々、Ｂａｂｙが産まれるので、準備したりで、
いつの間にやら、季節も冬に変わっちゃっいました（汗）

みなさん、こんばんわ☆　作者のＴＥＴＳＵ（てつ）です！

今回は、ラジオってなことで、特別編（番外編？）をお送りしたわけですけれど、
意外に難しくて、本当はもっと話をさせてあげたかったたんです。

けれど、紙面の関係上、終わってしまいました。

本当は、特別ゲストで、私が出る予定だったたんですけど、
完全に忘れ去られてしまいました・・・（泣）

また、特別編が出来たらいいなぁ～って思ってます。
リベンジです、リベンジ！！

では、次回のタイトルがまだ未定なんですけれど、
次回のお話で、またお会いしましょう～！
Ｓｅｅ　ｙｏｕ　ｌａｔｅｒ♪
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
こんなお話ですが、ちょこっとでも応援頂けると、すっごくうれし

いです♪
お願い致しますっ☆★☆

更新状況のご確認やご声援のコメントは、下記のブログにてお願い致しますっ☆★☆
ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｔｅｔｓｕ．ｓｂｌｏ．ｊｐ／
よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9600i/

風の花　しばし見交わす　恋の実を

2011年11月13日12時07分発行